

551
171

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70^{3m} 1 2 3 4 5

始



トエKW-PP



ヂエイ、エム、バリ 作
澤村寅二郎 譯

喜劇「妻は知る」四幕

東京
研究社

大正
15. 6. 25
内交

序

昨年六月「姉の日記」出版の際にも、その序文に於て一言したこゝであるが、語脈思想の吾
吾と甚だしく異なる英語英文學にあつては、一つの純文藝的作品を研究するに當り、原文と譯文
と註釋の三つが兼ね備はらなければ、十分にその妙趣を味ふこゝが出来ないといふのが私の持
論である。のみならず原作に對して一種の憧憬を有する者にまつて、假令原文を解する力が十
分で無くても、單なる翻譯のみでは、甚だ物足らなく感ずるやうに思ふ。これは自分が辰野隆
氏譯「シラノ・ド・ベルヂュラック」を讀んだ時の自らの經驗であつて、あの巧みな日本譯の或
る一節を讀むに當つて、その原文を参照したく思つても、手近かない爲つてその儘になつた
が、若し同じ書物にそれが附屬してゐたならば、そんなに重寶であつただらう、そして又フラ
ンス語をおさらへする機會が得られただらうと思ふ。勿論原著の内容や思想のみを傳へるのが
譯文の目的である場合には、そんな面倒も要らないだらうが、苟くも文學的價値の高いクラシ
ックにあつては、書物の大きさが許す限り、成るべくさうなつてゐるのが便利であらう。シエイ

クスピアやゲーテやモリエールなきに於ては、殊にその必要があると思ふ。

ハーデイの「姉の日記」を以て始め出した此自分の叢書も、さういふ意味から原文譯文註釋の三方面を具へてゐるので、直接原文を研究しようとする人には、譯文註釋が其十分な參考となり、又譯文のみを味はうとする人には、譯文それ自身が獨立した讀物となると同時に、英語のやうに普及した語學に於て原作を時々參考することは、少なからぬ興味と實益とを與へるだらう、そして其際に生ずる疑問は、註釋によつて解決することが出來やうといふのである。

以上の考が、讀者の要求に適合したためか、「姉の日記」も幸に好評を博し、今またこのバリの傑作「妻は知る」を出版する運びになつたことは、私の大に感謝するところである。因に、原書名 *That Every Woman Knows* は、本文末尾の一句を採つたものである。

大正十五年三月

澤村寅二郎

著者評傳

英國に於ける近代劇の代表としてショーやゴールズワージーやシングやその他種々の新しい作家の戯曲が、我國に可なりよく紹介されるにも係らず、バリのものが、一向に知られてゐないのは不思議である。尤もその道の人々には、疾くの昔からその價值が認められてゐて、彼の傑作の一つである「天晴れなクライトン」は、宮森麻太郎氏の「近代戯曲大觀」に委しい梗概が載つて居るし、たしか元の淺草の金龍館で上演されたこともあり、有名な一幕物「十二磅の眼つき」は坪内士行氏が紹介し、「クオリティ街」は原語のまま、三四年前に京濱外人素劇團によつて演出されて、非常な喝采を博し、あれを看てから急にバリ信者になつた人もある。その他「ピータ・パン」や「センチメンタル・トミ」は活動映畫で紹介され、「マイ・レイデイ・ニコチーン」は石川欣一氏に依つて譯出されてゐる。又最近出版の菊池山本兩氏著「近代劇精隨」にはバリの可なり委しい評論と其作品の梗概が載つてゐる。併し一般の讀書子には、あまりその作が讀まれてゐない。これはバリの劇作が、ずつと昔から英國で上演されてゐながら、そして其功績によつて

作者が従男爵に叙せられてゐながら、極く近年に到るまで、それが出版されなかつたことが、何よりも主な理由であらうと思ふ。委しく云へば、千九百十四年までは、あの一風變つたバリが、自分の劇作の出版を許さなかつたために、主として書物によらなければ、西洋劇の傑作を味ふことの出来ない吾々の多數が、自然に彼に親しむ機会を得なかつたわけである。それにしても、彼ほゞ英國で人氣の盛んな作者が、こんなに日本で度外視されることは、少々奇異に思はれる。彼が英國に於てどれ程人氣盛んであるかの一例を挙げるに、ハームスワース百科全書に記されたピネロ、シヨー、ゴールズワージー、バリの四人の傳記のうちで、バリは二欄打抜きの大きな標題の下に、一頁半以上の記事に、彼の肖像はもとより、その生れた小さな家の寫眞までが載つてゐる。ところがあの有名なシヨーは、それよりも少くして三分の二頁、ゴールズワージーは更に少くして約半欄、ピネロも畧同等の待遇である。併しバリが知られてゐないのは、單に我國ばかりでなく、千九百十八年アメリカ出版の一英文學史(*A History of English Literature, by Moody and Lovett*)には、シヨーやゴールズワージーが大に論ぜられてゐるにも係らず、バリはその名前すら、全然何處にも見當らない。しかも一方に、千九百二十年の春自分がカリフォルニアのある中學校で觀た學生の素人芝居は、バリの極く初期の作「教授の戀物語」(1894)であつ

た。これこそ本當に不思議な現象だと思ふ。

ジェイ・エム・バリ(James Matthew Barrie)は、千八百六十年五月九日、スコットランドのキリミア(Kirriemuir)といふ小さな町の質素な家に生れた機織工の子である、貧苦のうちに彼はエディンバラ大學を卒業した。その苦學の様子は本戯曲第一幕のシヤンドの述懐に表はれてゐる。彼は卒業後文筆を以て世に立たうとし、幼い時非常な感化を受けたその母親の口から、直接に聞いた土地の種々の物語を材料として、故郷キリミアをスラムズ(Thrums)と假稱し、地方色の豊かな短篇を書いてロンドンへ送つた。スラムズは「織絲の端」といふ意味で、故郷の機織町を代表させたのである。彼は間もなくロンドンへ冒險的に乗込んで、筆を以て奮闘した。彼が後年聖アンドルーズ大學の名譽總長に推薦された時の學生に對する演説中に、その當時の苦心が涙のにじむ滑稽を以て描かれてゐる。かやうにして彼は初め小説を以て世に知られたのである。その主なる作品は *Auld Licht Idylls* (1888), *A Windsor in Thrums* (1889), *Sentimental Tommy* (1896) などである。

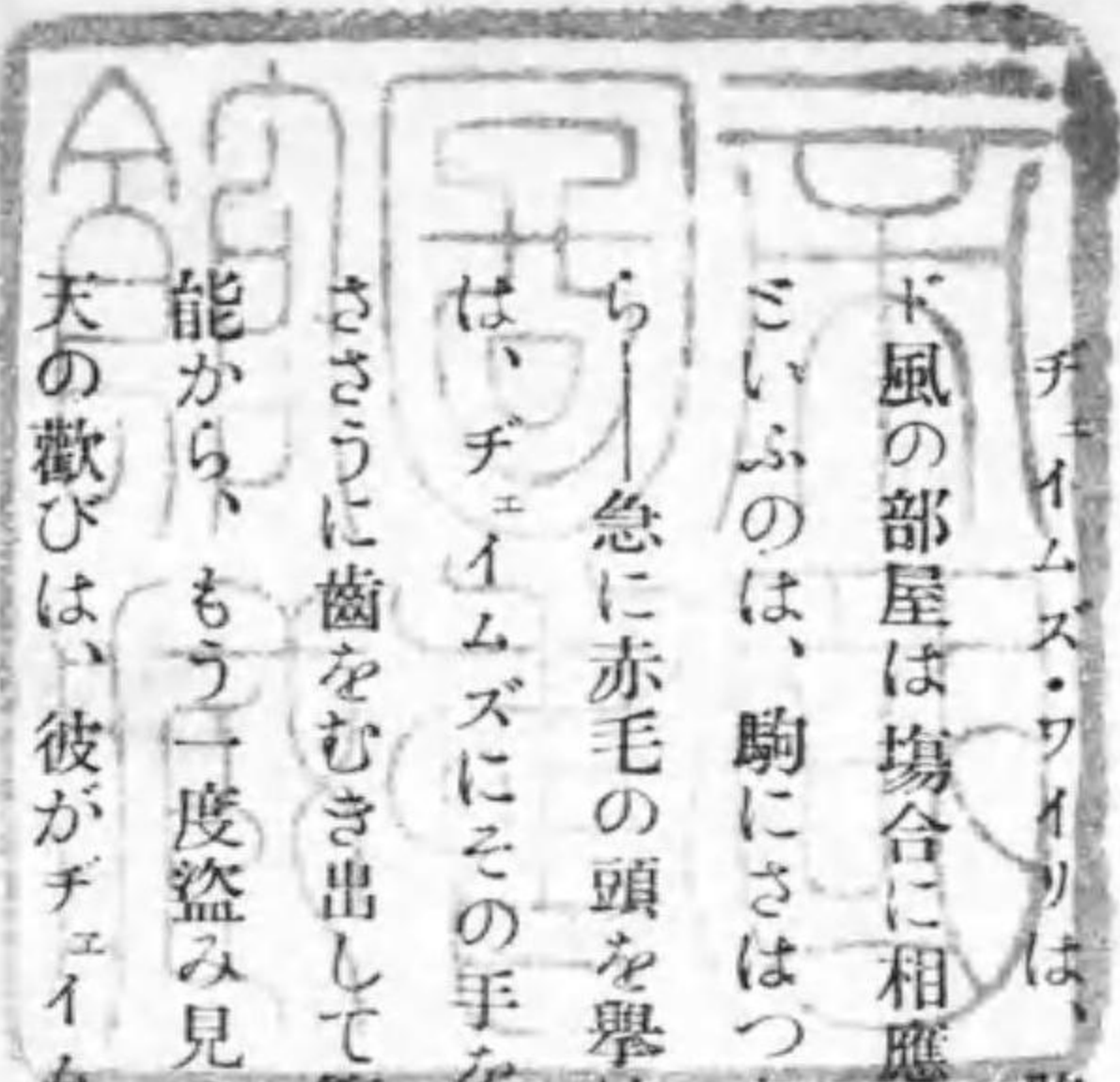
千八百九十一年に彼は初めて劇に手をつけた。その一つが丁度その年に英國へ紹介されたイブセンの「幽霊」を茶番化したもの、即ち *Isen's Ghost* であつたことは、彼の特色を物語る

もので、彼は當時歐洲を風靡してゐたリアリズムに對して大なる反感を抱いてゐたのである。彼は日本ならば江戸趣味をいつたやうな、十八世紀又は十九世紀の初めに對する懐古的の憧憬を有し、夢幻的空想に富み、詩情豊かな、時にはデイケンズのやうに怪奇に、時にはサツカレのやうに諷刺的で、又ラムのやうな物靜かな冥想的の美さを具へてゐる。そのロマンチズムの一面は *Quality Street* (1902), *Pantaleon* (1905), *A Kiss for Cinderella* (1916), *Dear Brutus* (1917), *Mary Rose* (1920) などに著しく、その諷刺的方面は、*The Admirable Crichton* (1902), *The Twelve-Pound Look* (1910), *The Will* (1913) などに表はれ、本戯曲 *What Every Woman Knows* (1908) は蓋し後者に屬する最大傑作であらう。但し最も人口に膾炙してゐるのは、*The Admirable Crichton* である。又彼の夢幻的空想を最も縦横に發揮したものは、彼の不朽の名作 *Peter Pan* である。これは千九百四年にお伽劇として上演されてから廿年このかた、引續いて英國に於けるクリスマスの一特色となり、ピータ・パンのないクリスマスはサンタ・クローズのないクリスマスに等しさへ稱せられる。最近このピータ・パンの活動寫眞が我國へ輸入されて、非常な喝采を博したことは、世人の記憶に新たなところである。

パリに於て吾々が最も魅せられる點は、その *humour* である。ヒューモアは英文學に最も著しい特色であつて、大陸諸國殊に北歐の文學に最も缺けてゐる點であらう。ヒューモアは鋭い明察に加ふるに深い思やりを以て、人生の矛盾を觀察指摘するところに生れる。従つてヒューモアの裏には涙がある。ヒューモアはかくして *pathos* (悲哀味) の一面も謂ひ得るのである、そしてヒューモアが外國に最も紹介し難い點であることも、これまでパリが大陸や日本にあまり移植されなかつた原因の一つでないかと思ふ。シェイクスピアの如きも、その悲劇の方は日本へ紹介されるけれども、喜劇の方は一向紹介されない。英米であればこそ持てはやされる *As You Like It* や *A Midsummer Night's Dream* は日本では一向演ぜられたことを聞かない。

日本の新しい劇壇は、可なり大陸の影響を受けてゐる。そしてイブセンに始まつた近代の主我的思想が多く紹介されてゐる。これは従來の日本の傳統に捕はれた考へ方を矯正するには良いであらう。併し歐羅巴の文藝が單にさういふものばかりであるを考へないやうにしたい。それにはロシヤの憂鬱な悲劇や北歐の性慾問題などを理窟つよく取扱つたもの以外に、清新輕快なそして情味豊かなパリの喜劇などが、もう少し多く日本へ紹介されてもよからう。日本は、歐洲の先進國に比し一時代遅れて、今頃「解放」の道程をたぎつてゐるが、向ふでは「破壊」も「解放」の時代から、進んで「建設」も「訓練」の時代に入りつゝある。少くも英國あたり

はさうである。従つてその文藝には、悠容迫らざる精神的餘裕がある。吾々の一本調子な突きつめた國民性を緩和するものは、かういふ意味の文藝ではなからうか。その點から見ても吾々は、大に英文學のヒューモアを學ばねばならない。そして我バリは、そのヒューモアの何ものかを、最も多く教へるところがあると思ふ。



チェイムズ・ワイリは、將棋盤上に、ひみ手を差さうこしてゐる、そして小さなスコットランド風の部屋は場合に相應して、物々しく静かである。チェイムズは、片手を宙に浮かせて——こいふのは、駒にさはつたら、それを動かさねばならぬ、アリックがさうさせずには措かないから——急に赤毛の頭を擧げて、アリックの顔を讀まうこする。彼の父、それは即ちアリックだが、父は、チェイムズにその手を差されては大變だ、こいはんばかりの顔つき。チェイムズは、氣味よささうに齒をむき出して笑ひながら、指が將に駒を擱まうこする刹那、彼はある自己保存の本能から、もう一度盗み見る。今度はアリックが見つけれられる。その顔に現はれた、道ならぬ有頂天の歡びは、彼がチェイムズを破滅の淵に誘つてゐたこきを、歴然と告げてゐるから。チェイムズはぎらりこ睨む。此時遅し、敵手は、再び蟲も殺さぬ老父こなるが、もう駄目。チェイムズは額の汗をふきふき、ワイリ家特有の、最も妙案の浮びやすい方法で、手足をのさばらして、下唇を突きだしながら、腰を落付けて、もう一度盤面を考へなほす。アリックは兩頬をふくらま

し、一滴の汗水が、その鼻の頭に溜まる。

土曜の晩には、何時行つて見ても、二人はかうである（家族の禮拜が終つて、それと共に召使が部屋へ退つてから）。そして時によるこゝ、あまり永く考へこんでゐるので、遂には、ごちらの差す番だか判らなくなつてしまふ。

これは、あなたがミス・ワイリへ社交的の訪問をする場合に通される部屋ではない。その時の部屋は客間、そしてミス・ワイリは華かなメリノであなただけを迎へ、大抵の場合「これはまあ意外な歓迎ですわ」ミ叫ぶ、併し意外なごころか、あなたが砂利道をこちらへやつて来るのを見て、椅子の覆ひを手早く剥がし、アリックミデイギッドミチェイムズに、シャツの胸當をつけなければ、お客様のところへ出て來たりなき、滅多にしないがよろしい、ミ警告するだけの餘裕があつたのだ。尙またこの部屋は、例へばまあは入つて御飯でも召上がれ、ほんの有合せですが、ミ招待（これがワイリ家の招持のしかた）される場合、そして毎日の御飯を食堂で喰べるやうな振りをするのが、一種の家族的の見榮なのだが、さういふ時、お客のあなたが堂々ミ儀式張つて食事をする部屋でもない。これは本當の家族の居間で、上流の生活法に到底馴れる見込のないアリックが、此處ではカラをはづして、靴下のまゝ、氣樂に坐はるこゝが出来る。そしてチェイ

ムズも、たまにはその眞似をする。併しチェイムズの方を、マギが、そのまゝに差措いたらお慰み。

其處には、一つ頗る立派な椅子がある。併し坐はるための椅子だと思つたら大間違ひ。これは、ほんの、いざいふ時、この部屋に一種の格式をつけるためのもの。この椅子は、傲然として、他の椅子達を鼻であしらつてゐる。ちやうど、金ゆゑに嫁いで來た貴族の花嫁のやうに。それ以外、備付の道具は質素である。その大部分は、ワイリ家發祥の、あの小さな家から持越しのもの。其處にある大きなてかてか光る椅子は、あなたが一寸向うを見てゐる間に、寢臺に變へるこゝが出来る。チェイムズが此椅子に坐はつてゐるこゝ、屹度次第に滑り落ちて來て、終ひには、良い氣持ちに半分寢たやうな恰好になつて、兩の脛が、時計の兩針のやうに、十二時十分を示す。さういふ恰好で、チェイムズがお客を迎へるこゝろを見るこゝ、マギは身の毛をよだてる。

其他の椅子は皆馬の毛入りであるが、この馬の毛入りこいふやつは、座席に一筋の割目が出来てゐれば、これ程坐り心地のよいものはない。此處にある椅子の座席は皆ひきく溝になつてゐる、ワイリ家の者は皆ヅシリミ腰を下ろすから。將棋盤は大きな中央の卓の端にある。其卓は

尙また四つの書物を飾りたて、ゐる。それは互から同じ距離に置かれて、一つはバイブル、もう一つは家族の寫眞帖である。若し書物がこれだけなら、マギが此部屋を書齋と呼び、頑として改めない理由にはならぬ筈。一方でデイギッドとチェイムズはそれを西の間と呼び、アリックは單にそれを「部屋」と呼ぶ、これは彼にまつて寢臺のない部屋に對する自然の名前なのだ。其處に松材で出來た書棚がある。それには六百冊の書物が入つてゐて、手を觸れるここの出來ないやうに、ガラス戸がたて、ある。

誰もその書物に觸らうとはしない、ワイリ家の人々は讀書家ではないから。彼等は、一つの牢屋の中に、そんなに澤山の書物がかためて押込めてあるのを見て、諸君が呀いふのを、聞きたいのだ。併し、(それは主として坊さんだが)、一冊の本を讀終つて、平氣で又一冊讀始める人が、世間にあることを考へるに、彼等自身が魂消るのである。こはいへ、デイギッドがこれだけの書物を買つたのは、必ずしも虚榮からではない。寧ろ自分が得なくて残念だといふ、教育に對する偉大な尊敬からであつた。これと全く同じ感じから、彼は「時事評論」をこり、男らしくそれにぶつつかつて行く。アリックも亦教育を尊敬するので、「時事評論」を讀まうとするが、意氣消沈して、其ベーチを見ながら、「ウム駄目だ、駄目だ」と呟き、時には、「こん畜生め」と

いふのが聞える。チェイムズは教育を一向尊敬しない。そしてマギは、今のこころ局外中立である。

彼等は、其地方の花崗石坑を所有するワイリ父子商會であつて、其石坑に、アリックは働き盛りを一石工として暮したのであつた。一家を今日の地位へ引上げたのはデイギッドである。彼は一步一步自分で攀ち登り(同時に其階梯を切り開いて)、他の人々を自分の後から引上げたのである。「ワイリ兄弟」に、アリックは其商會を呼びたかつたのであるが、デイギッドが「いけません」云ひ、チェイムズが「いけません」といひ、マギが「いけません」といひ、お父さんに、先づ花を持たせなければならぬといつた。そしてアリックは、今や大體に於てその名前を悪くは思はないが、唯毎日髻を剃らなければならぬので、屢々溜息をつく。そして酷寒の朝なごに、今でも彼は四時か、時とするに二時に、寢床から這出し(槌を鑿ぎが自分を呼んでゐるに考へて)、そしてズボンを穿き始め、其ズボンがあまり立派なので、まだ起きなくてもよかつたのだといふここに、やつと氣がつく。時とするに彼は、自分の仕事が永久になつたといつて、少し泣いたりする。そんな時に、マギは——デイギッドに内しよで——彼に鋤を與へ、又デイギッドは——マギに内しよで——木挽の仕事を彼に與へる。

倍、デ・イムズが一手をさすのに對して、觀客諸君が許される以上の時間を彼に與へたが、其間に或る事柄が起りつゝあつた。即ちデイギッドが部屋へは入つて來てゐるここだ。彼はある公けの會合へ出席して來たので、黒の上着をよそ行きの靴をつけてゐる。デイギッドは四十近く、父や弟と同様に頬髯を蓄へ（アリックの頬髯は、一種の襟卷のやうに頸のまはりに生へてゐるが）、そして誰よりも少し先きに、何處かへ到着せねばならぬといつたやうな、潑刺すぎる態度を具へてゐる。彼等三人の肖像を十五磅で引受けた畫家は、（其畫面は壁にかゝつてゐるが）、此特色を、多分偶然に、捕へたやうである。こいふのは、アリックとデ・イムズが、一生涯、壁に釘づけにされてゐるかのやうであるのに對して、デイギッドは、何處かへ急いで出かけるといつた風に、額縁から踏み出しかけてゐる。併し人間に肖像を、合せて六つの此顔は、ワイリ家所有の石坑から切出した花崗石のやうに、皆一種の家族的類似を具へてゐる。彼等は、例へば泥炭のやうに純スコットランド風であつて、假りに此人達が、互にその眼の玉を——始終物の値段を勘定してゐるやうな小さな青い蚤取眼を——取替えたとして、近所の誰にも其相違が氣付かなかつたことであらう。

將棋の差手はデイギッドに注意しないし、デイギッドも亦二人に注意しない。彼は寢椅子にと

つかま腰を下ろして、その所謂「ゴム側」のよそゆき靴を、互にこすり付けて脱ぎ、手縫ひの上靴を穿き、それからその靴を正規通りに腰かけ臺の中へ納つて、爐の方へゆく。今日はデイギッドに何か考へることがあるらしい、こいふのは、彼は勝負に眼もくれず、口も出さず（デイギッドに口を出される程業腹なことはないが）、尙またデ・イムズの王様の苦戦の態を見て、アリックも目くばせをかはしもしない。立關の振り時計の刻む音が聞える。やがてデイギッドは口を切る。それはちやうど讚美歌のやうにその口から流れ出す。

デイギッド あ、堅き大地をして、

我足下より崩れしむるな、

ある人のいみじと思ふものを、

我一生に見出すまでは。

（これは獨白ではなくて、一個の斷案として提出せられたものである。將棋の差手はやつと勝負から眼を離なす。）

アリック（デ・イムズの王様を握りながら） デイギッド、今云つたのは何だい。

7
デイギッド（政談演説家が簡潔明瞭な言葉で、時局を説明するやうに） 私の述べてゐるのは戀で

あります。

ヂェイムズ(自制を失はないで) おい兄さん、デイギッド、ワイリもあらう者が、其處に立つて、私は戀をしてるます、ミ云ふのかい。

デイギッド 私? 私はそんなものに關係はないよ。

ヂェイムズ(相當に、きかないところがある) 別にそんなものなんて、云はなくつたつて可いだらう。

(彼等二人は獨身者で、生れてこのかた二人にまつて怖いものさいへば、唯女だけであつた。

デイギッドは其呑氣時代に——それは今も續いてるのだが——ある夜會から相合傘で一人の婦人を家へ送り届ける時、肱で一寸悪戯をやつたところがある、そして後で其ことを考へて、北叟笑みもし、肝を冷やししました。その點から見ても一層平凡なヂェイムズは、一杯呑みながら異性を論じたことはあるが、根が用心深いので、若い婦人が同時に二人よりも少い席には決して列しない。)

デイギッド(冷かし半分) へ、ん、お前はあの女にまつ捕まつたね。

ヂェイムズ(急所を突かれた氣味で) 誰にも、まつ捕まりはしないよ。

デイギッド 今にまつ捕まるよ。

ヂェイムズ 大丈夫だ。あんたの方が大分怪しかつたぢやないか。

アリク さやうさ、あのキティ、メンジズがね。

デイギッド(相合傘の氣持に歸つて) あいつは一寸危いところだつたよ。

アリク(婦人さいふものについて、知れる限りのことを知り、言葉一つ震はさずに、婦人の話の出来る人) 妙な話だが、男さいふものは、友人が誰か、まつ捕まつたこと聞くさ、一寸皮肉な眼くばせがしたくなるものさ。

デイギッド 全くです。

ヂェイムズ(おれだつて男ださいふ心持) そしてつまりその皮肉な眼くばせが怖さに、吾々二人は今まで獨身で來たのだ。併し一たい獨身でゐて、何が面白いのだらう。

デイギッド 別に面白くはないさ、併し安全だよ。

ヂェイムズ(そのあこがれを棄て了つて) さうだ、獨身は寂しいが、併し安全だ。ところで、それぢや、今の歌は誰のために云つたのだい。

デイギッド 勿論マギのためさ。

(デイギッドとチェイムズが、こんなにマギを愛するを知つて、初めて此二人を知ることが出来る。)

アリク さうだらうと思つたよ。

デイギッド(戀に關する彼の斷案の第二の點に論及して) 私はマギが詩を讀んでゐて、先きの言葉を自分獨りに繰返してゐるのを見たのだ。

チェイムズ マギは中々詩を解するね。

デイギッド 戀。マギが心から求めてゐるものは、確に戀だ。それも唯の戀ではなくて、堂々たる立派な戀だ。さういふのは、マギはが、こそ小さいが、ロマンスに對する熱情を有つてゐる。チェイムズ(悄然として部屋の中を歩き廻りながら) マギが心から求めてゐるものを、くれてやるここが出来ないとは、實に情けない話だな。

(他の二人は、チェイムズに對して、あまり注意を拂はない、これがもう少しやくざな家だ、チェイムズも中々水際立つて見えるのだが。)

アリク(言葉荒々しく) 世間の男つていふものは馬鹿なもんだ。

デイギッド お父さん、あなたはガラシールズの牧師を、誰が手に入れたか、マギに話しました

か。

アリク(悲しげに頭を振りながら) 話さすには措けなかつたよ。でそれから、わしは——あの——マギにらつこの手捲きを買つてやつて、それをマギの手にそつと渡すと同時に、逃げて来た。

チェイムズ(ワイリ家の人々がどれ程公平であるかを證明しながら) 勿論公平にいふと、あの牧師は、マギを貰いたいなんて口振りは、決してしなかつた。

デイギッド マギは、誰も貰ひ手がない。それがマギの氣を腐らせる所以さ。お父さん、私はスニビの窓に出てゐる、あの鎖つきの金時計を買つてやらうと思つてゐました。マギは大變欲しがつてゐますから。

チェイムズ(ポケットをたきながら) 兄さん、後の祭だよ、私が買つてやつたから。

デイギッド 牧師もつれない人だね。此家で何ボンドのピフテキを食つたか知れやしない。

アリク マギが牧師のために縫つてやつた上靴を忘れはしまいな。

チェイムズ 忘れるもんですかね。マギは、初めウキヤム、カスロのためにそれを縫ひ出したのだ。それに、マギはあんなに若く見えても、だんだん年を取りますからね。

アリク マギは髪をちらちらさせてゐるが、あれは一體マギを若く見せるのか、老けて見せるのか、わしには一向見當がつかないよ。

デイギッド(斷乎として) 勿論若くです。シツ！ マギが時計を捲いてゐます。い、かい、チェイムズ、牧師のことは一言も云つてはならないよ。今日は宗教のことも云つてはいけない。チェイムズ わしがそんなことをすると思ふのか。

デイギッド お前のやりさうなことだからさ。それに、あのもう一つの件だがね。今晚遅くまで起きてゐなければならんことについては、一言半句もならないよ。寝る時間だ。マギが云つたら、皆で眠むくないごまかすのだよ。

アリク その通り、そして愈々――

〔此時マギが入つて来る。そして三人は、急に將棋に夢中になる。吾々はマギの様子を、いくらでも委しく書けないことはない。併しそれが何の役にたつか。諸君が本當に知りたいと思ふのは、彼女が美人かさうかといふことだ。ところが美人ぢやなかつたのだ。美人でないマギ登場。これだけ云へば、外にいふことはない。譬へていへば、耳から耳まで口の裂けたマギ登場。その聲は柔かなスコットランド風、そして醜い女に不釣合な程に、てきばきした

様子。チェイムズが我知らず客用の椅子にのさばつてゐる姿を見て、はた立止まる。〕

マギ チェイムズ兄さん、私だつたら、良い椅子には坐りませんよ。

チェイムズ ほいまた忘れた。

(併し彼は、妹がもう少しがみがみ云つてくれたら、と思ふのである。良い椅子の神聖を汚すといふことすら、彼女の元氣を引立てるたしにならないから。マギは編物をこり上げる、そして三人は、何れも自分達の話してゐたことを、妹が知つてゐるのぢやないかと思ふ。)

マギ デイギッド兄さん、遅いのね。もうかれこれ就寝時間だわ。

デイギッド(こんな話なら、大丈夫だと思へて) 集會で遅くまで引止められたんでね。

アリク(ガラシールズといふ問題から、全く離れて了へるのを喜んで) 良い集りだつたかね。

デイギッド まあ可なりでした。(幾分憤つた様子で)あのチョン、シャンドといふ青年は、演説をしなくちや氣のすまない男ですね。

マギ チョン、シャンドつて、あの學生のシャンドぢやないの。

デイギッド さうさ。あいつは成程冬の幾月かは、グラスゴウ大學の學生ぢやあるが、夏は此處の鐵道の驛夫に過ぎない。あんな青二才が、文なしの辯に、演説をするなんて、甚だ生意

氣だよ。

アリク シヤンド家の奴等は代々生意氣者ばかりで、それに嫉妬深いミ來てる。此六年間うちこつきあはなかつたのは、そのためだらう。演説は旨かつたかね。

デイギッド(ワイリ家の寛大さを例證しながら) 中々旨い演説でしたがね、併し何も私を笑草に
しなくたつて可かつたのに。

マギ(一針落しながら) そんな生意氣なことをして?

デイギッド(悄氣て) わしが何か一ミミ口を切る時には、何時も「此處に立つて一言を試みん
ごさするに際し」なんかミ屹度やるもんだからね。

チェイムズ それの何處が悪いんだね。

デイギッド あいつはわしの眞似をして云ふには、「議長閣下は、私の質問にさ答へんごさした
ふや」なんてやつて、皆がミつミ笑つたのだ。

チェイムズ(金のはいつたポケットをたきながら) 悪黨め。

デイギッド お父さん、私は教育の無いことを痛切に感じましたよ。(それミ知らないで、彼は、
此高貴な「教育」ミいふ言葉を、立派に發音する。)

マギ(彼にやさしみ深い手を延べながら) デイギッド兄さん。

アリク わしも同感だよ。今でも骨の髄まで、わしは教育の缺乏を感じてる。お前にその機
會を全く與へなかつたと思ふよ、わしは耻かしい。併しお前の小さい時分、わしは實にひき
い貧乏だつたもの、さうしてそんなことが出来るもんかね、マギ。

マギ 御尤もですわ、お父さん。

アリク(書棚をじつミ眺めながら) かういふ書物が讀めるなんてね。一度に一冊づゝ抱へ込ん
で、一杯の雑炊のやうにすつかり底までさらへて了ふ。おい聞いてくれ、わしが恭しく頭を
下けるのは、富ではなくて學問に對してだよ。

チェイムズ(ぶち壊はしの名人) 其處に書物が五間ほミ並んでゐる。そしてそれを選んだのは、
ガラシールズの牧師なんだ。あの男の曰く――

デイギッド(すばやく) おいチェイムズ

チェイムズ ミいふのは云違ひで――その――

マギ(平然として) チェイムズ兄さん、それは云違ひぢやないでせう。デイギッド兄さん、ガラ
シールズの牧師はあのターンプルの娘ミ結婚するこいふ噂ですわね。

デイギッド(警戒しながら) 何でもそんな噂だつたよ。

アリク 要するにあの娘は損な取引をしたものさ。

マギ(つむじ曲り) お父さん、まあ何を仰有るの。あの牧師さんは誠に立派な方です。私はそれが良縁であるここを心から希望します。

チェイムズ 何が良縁なもんか。

マギ(自分の悲劇に近きながら) 相手の婦人を知らないで、あなたさうしてそんなこゝろが云へるの。屹度その婦人はチャームに富んだ方だせう。

アリク チャームだつて。さうだ、あの男が丁度さう云つたつけ。

デイギッド たは言を吐く馬鹿者めが。

アリク 一たいチャームつていふのは、はつきりいふこゝろ、さういふこゝろなんだい、マギ。

マギ それはね、まあ云つて見れば、女を飾る一種の花です。それがあれば、外に何にもいらぬし、それがなければ、外に何があらうこゝろ、大した變りがない。ある少數の女は、萬人に對してチャームを有ち、大抵の女は、ある一人に對してチャームを有つが、併し女によつては、誰に對してもチャームを有たないのがあります。

(さうしたわけか、彼女は編物の手をやめた。男連中はすつかり悄氣てゐる。チェイムズはその拳でテーブルを一つ思切り擲る。)

チェイムズ(怒鳴りながら) わしには、チャームを有つた妹があるんだ。

マギ い、え、そんなものはなくつてよ。

チェイムズ(鎖付の時計を持つて、妹の側へかけよりながら) さあこれを上げる。

(彼女はそれを膝の上に置かせたまゝである。)

デイギッド マギ、絹の着物が欲しくはない?

マギ 私に絹の着物が何の役に立つて? (激しい感情に駆られて) 小さな茶色の雌雞に、衣裳をきせるのも同様だわ。

(男達は、あはれに、もぢもぢする。)

チェイムズ(ぢだんだ踏んで) あいつを此處へ連れて來い。

マギ あいつつて誰れを。

チェイムズ 兄さん、テーブルの下で私を蹴らないやうにして貰ひたいね。

マギ(立上りながら) 下らんこゝろはよして、寢ませうよ。

(彼等は此言葉を聞くと共に、マギを仲間に加へない筈の、一つの仕事が残つてゐることに気が付く。)

デイギッド(何くはぬ顔で) わしはまだ大して眠くない。

マリク わしもだ。

チェイムズ 私のちやうど云はうと思つてゐたことを、二人が云つて了つた。

デイギッド(例になく丁寧に) おやすみなさい、マギ。

マギ(三人を睨めつけて) 云はずに知れた、十時がきまりの就寝時間なのに、三人が三人、眠くないつて?

チェイムズ さやう、十時に就寝するのは、云はずに知れた話。(北叟笑みながら)吾々はそれを當てにしてゐる。

マギ 當てにしてゐる?

デイギッド 間拔野郎。

チェイムズ 何が悪いんだ。

マギ(兩腕を組んで) 何かあるんですね。デイギッド兄さん、さあ云つて頂戴。

デイギッド(敗軍を知るの明がある) チェイムズ、外へ出て番をしてゐろ。

(チェイムズは出て行く、手ごろの棒を携へて行くのをマギは見る。)

デイギッド(きびきび事務的に) マギ、泥棒がうろつくのだ。

マギ 泥棒? (坐つた彼女の身體は堅くなる、併し彼女は金切聲を出すたちの女ではない。)

デイギッド その泥棒をこつつかまへるまでは、お前に黙つてゐる積りだったが、最近二度まで此部屋へはいつたんだからね。おれ達は、昨夜寝ずに待構へてゐるが、今晚も亦寝ずにゐるよ
うこいふのさ。

マギ 銀の食器は。

デイギッド 今のところまだ一つも盗まれない。それから考へるに、此間来た時に、おびえて逃げ去つたのか、それとも根こそぎさらふ積りで、もう一度やつて来るのだらう。

マギ さうしてそんな事が判つたの。

デイギッド 火曜日だったが、巡査が石坑へ尋ねて来てね、妙な談をするのさ。二時十分過ぎに
此窓から一人の男が忍び出るのを見たこいふのだ。

マギ 巡査はその男を追つ掛けたの。

デイギッド 非常に暗くて、直ぐ影を見失つたつて。
アリク 窓の話をしてやれ。

デイギッド あごで見るに、木の框の間へナイフの刃をさし込んで、窓の掛金を押戻してある。
マギ まあ兄さん。

アリク 巡査の話ぢや、その男は、絨たん製の小さな靴をさけてゐたささ。
マギ 銀の食器は屹度なくなつてゐます。

デイギッド いや大丈夫。奴はその鞆の中に、屹度一束の鍵を入れてゐるさいふ、わし等の考
ささ。

マギ それこそ武器をね。

デイギッド 武器さいやあ、こちらもその傘立の中に、可なり丈夫な武器が入れてあるんだ。だ
からね。お前が寝て了へば――

マギ 私が？ 兄さん達を危い目にあはして置いて？

アリク なあに、相手はたつた一人さ。

マギ 巡査はそのうちの一人だけ見たのでせう。

デイギッド(兩の手の平を嘗めながら) 三人居れや、此上なしだ。

マギ 私も一緒に番をします。四人居れや、此上なしです。

デイギッド これでもマギにチャームがないつて云ふのかなあ。

(チェイムズは、まるで泥棒がテーブルの下にでも居るやうに、爪さき立て、歸つて来る。彼は、
皆の者に、もう息をするなさいふ合圖をして、それから報告をさ、やく。)

チェイムズ 居るよ、あそこに。私が外へ出るや否や、大黃の直ぐ側の扉を、奴が忍んで降りる
のを見たんだ。

アリク そんな風な男だい。

チェイムズ おつかない奴さ。わしにはそれだけしか判らなかつた。手に小さな絨たん靴を持つ
てゐた。

デイギッド そいつに相違ない。

チェイムズ 奴は石南の中へ忍びこんで、今そこから、窓をじつと見てゐる。

デイギッド 占めた。燈火をお消し。

(此部屋は三つのガスの火口のついたシャンデリヤで飾られてゐるが、時代の進歩と共に、そ

の一つが取除けられて、替りに白熱燈が取つけられてゐる。今はそれだけがこもつてゐるのだ。アリックは椅子に攀つて、小さな鎖をひくき、忽ち部屋は煖爐の火で、ほんやりと照らされるばかり。その光は、四つの輝く顔に、ちらちらと映つる。）

マギ 向ふでも兄さんを見たの。

ヂェイムズ ごうかね、併しここにかく一杯くはしてやつたさ。わしは星空を見上げて、恐ろしく眠むさうに、星をめぐらしてあくびをしたのさ。

(永い沈黙、その間彼等は闇に隠れてゐる。遂に物の動く音が聞える。彼等は幽霊のやうに部屋から忍出る。ヂェイムズが立關の燈火を消すのが見える。それから戸が閉つて、一つの空虛な部屋が、今か今かこぼえながら、闖入者を待かまへる。窓がそつと開いてまた閉まる、まるで母親が、赤ん坊の眠つてゐるかさうかを覗いて見る時のやうに。それから、ある男の頭がカーテンの間から現はれる。胴體もつゞいて現はれる。彼は絨たん製の小さな鞆を携へてゐる。彼は躊躇の體。明に彼を當惑させる點は、ワイリ家の人々が、煖爐からあの石炭の塊を取除けずに、寢についたさいふこと。彼は戸を開けて立關を覗きこみ、振り時計に耳をすます。あたりは全く靜穩。彼は燈火を點する。吾々は今や明瞭に彼を見る。彼はヂョン、

シヤンド。歳は二十一で、靴は泥まみれ、それは絨たんの憤慨によつても證明せられる。彼は見すほらしい外套を着、横倒しの大黒帽巾を被つてゐる。それ以外は、驛夫の着るやうな、すり切れた畝織木綿。彼の行動は、初め忍びやかだが、大丈夫だと思ふにつれて殆んど物馴れた態度になる。彼は鞆を開いて一束の鍵、小さな紙包、泥棒の鐵てこ見たやうな黒い棒を取出す。此落付いたお客様は、煖爐を調べて更に石炭をつぐ。彼は鍵で書棚の戸を開いて、二冊の大きな書物を選び出し、テーブルの上へ持つて来る。彼は外套を脱ぎ、包を開く、その中には大判の卦洋紙がはいつてゐるこまが今判かる。彼の次の行動は、その鐵てこが、實は定木であることを示す。彼は、ペンとインキが何處にあるかを知つてゐる。彼は上等の椅子をテーブル近く引ばつて来て、それに坐り、書きものを始める。そして折々ペンで空を突く時、絨たんにインキのはねをこぼす。彼は全く仕事に氣をこられてゐて、戸が開くのも、ワイリ一家の者が彼を見つめてゐるのも、眼にこまらない。人々は棒を武器にしてゐる。）

アリック(到らう) さあ、ヂョン、シヤンド、用意がよけれや。

(ヂョンは其言葉に應じて振り返り、それでも少し立上る、溢々こ無表情に。)

ヂエームズ(驛夫をまねて) 切符を拜見。

デイギッド おいジョン、今こなつちや、旨い文句もさ考へさつけまい。

マギ 若い方、その椅子は、坐り心地が可いでせうね。

ジョン 此椅子には、別に不足をいふ點もありません。

アリク(本當に心を痛めて) 此町の育ち。一家の面よごし。今夜わしはシャンド一家を不憫に思ふ。

ジョン(ぎろぎろ睨みながら) ワイリさん、私の一家を不憫がらないで貰ひませう。

ヂエームズ は、旨いね。

マギ(此場合にも公平の念を失はず) 此青年に申開きをさせたがよいと思ひますわ。こちらで考へたほご悪くはないかも知れないから。

デイギッド おい若い人、さつさこ申開きをするさ。

ジョン 申開きがなくちや解らないのは、無教育な連中だけさ。私は學生だ、(少々激して)そして書物が無くて、さうにもかうにもやり切れないでゐるんだ。お前さん達は、私の必要なものを、全部此處に有つてゐて、飾りにする外、何の役にも立てないでゐる。だからさ、私

は勉強に來たんだ。私は一週に二度來るんだ。(主人側呆れ返へる。)

デイギッド(誰よりも先きに、氣を直す) 窓からね。

ジョン 苟くもシャンド家の者が、お前さんこころの戸口から這入るなんて、それほご卑屈になれると思ふのか。時に、これは警察行きですかね。

ヂエームズ さうさ。

マギ(親切心からよりも、寧ろシャンド一家を贖罪にしてやりたくて) これは、吾々一同が寢室行きにして、此青年に勉強をさせる可いわ。併し其椅子ではいけないこさよ。(こいつて彼女は椅子を向うへ轉がす。)

ジョン お嬢さん、有難う、併し御恩になるわけにもいきませうまい。

ヂエームズ おれの考ぢや、こいつは詰らん奴だ、追出すさ。

ジョン さうだ追出すがい。そして私が將來永い間、詰らん人間でゐるさうな噂を聞けば、良い氣持がするだらう。

デイギッド(ジョンを尊敬し始めてゐるので) 君は學問の出來ない學生かね。

ジョン 出來ないどころか、私は素晴しく出來る學生さ。

デイギッド ぢや問題は金だね。

デヨン(多くの立志編中の人々と共に味つた己の経験を光榮として) 大學の第一學年を私は一樽のじやが薯で暮した、そして吾々二人の間には寢臺用の寢椅子が一つあるつ切り。一人が寢ると一人が起きなくちやならなかつた。それが苦しかつたと思つたら間違ひ。實に快心の極。併し今年はそれをするだけの餘力もない。私は、星晨せいじんの間にロミュラス、リーマスと相往來するここも出来る身でありながら、空しく此處こゝに止まつて、君等のやうな無學文盲な連中の切符を集めなくちやならんのだ。

チェイムズ(結論として) 馬鹿あいへ。

デイギッド(その頭に、ある計畫が、ほんやり形をこりかけてゐる) チェイムズ、お黙り。若い方、實のこころ、君の意氣が氣に入つた。そこで聞きたいが、教授達は君の將來をさう思つてゐるかね。

デヨン 私を非常に有望な青年だと思つてゐます。

デイギッド 此町ぢや、君は大變品行方正だといふ評判だね。

デヨン 無理もないことです。

デイギッド 君は眞じめに物事を考へる人かね。

デヨン 私は生れてから笑つたところがありません。

デイギッド グラースゴウでは誰の説教を聞いてゐるかね。

デヨン ソーキホールハイのフレミスタさんです。

デイギッド 君は日曜學校の先生かね。

デヨン さうです。

デイギッド もう一つお尋ねするが、君は約束があるかね。

デヨン 婦人との約束ですか。

デイギッド さやう。

デヨン 私は未だ曾て婦人に對して、たつた一こゝも誘さそひの言葉をかけたところがありません。

私は、自分の立身たてまといふことに、あまり心を奪はれてゐますから。

デイギッド 成程。(彼は考をめぐらす、そして遂に頭をツミ動かして、父ミ戸のうしろで話したいといふことを示す。)

チェイムズ(羨ましさに) 私も行かうかね。

(併し二人は、チェイムズに答もせず、出て行つて了ふ。)

マギ あの人達が、何を氣まぐれに考へ出したか知らないが、歸つて來るまでお坐りなさい、若い方。

デヨン 私はシャンドといふ人間です、だからシャンドといふ名で呼ばれるまでは、此家で再び腰を下ろすことをお断りします。

マギ お若いので、ではお待ちになるのが退屈なことでせう。

(彼が待つてゐる間、その顔が大變瘦せこけてゐることに諸君は氣がつく。彼は子供位のからで、殆んど何時も喰物が十分でない。デイギッドミアリクは間もなく歸つて來る、將棋盤上のある差手を研究してゐたかのやうに、何くはぬ顔をしながら。又實際彼等はある差手を研究してゐたのである。)

デイギッド(急に、にこにこしながら) シャンド君、坐りたまへ、そして椅子をもつこよせて。

寒さ凌ぎに何かちよつぱりやつても可いでせう。(てきばきこ) マギ、洋盃を。

(マギは訝る、併し洋盃^{コップ}と酒壺^{デカント}を、チェイムズの所謂移動戸棚からこり出す。デイギッドミアリクは、此上もなく親しげな様子で、尙ほまたテーブルへ椅子を引よせる。)

君は禁酒主義者ぢやないでせうな。

デヨン(警戒的に) 殆んど禁酒主義と同じです。

デイギッド 吾々もさうだ。さういふ飲み方にしますか。マギ、熱湯があるかい。

デヨン まだ飲むか飲まぬか、きめないので、さうせ飲むなら、冷^{ひや}で頂きませう。

デイギッド チェイムズ、お前は熱いのをやるだらう。

チェイムズ(同じくテーブルの側に坐つたが、全く見當がつかないで) いや、私は――

デイギッド(斷乎として) チェイムズ、お前は熱いのをやる筈だ。

チェイムズ(むつとりしながら) 熱いのをやりませう。

デイギッド マギ、湯沸を。

(チェイムズは明に熱いのをやらなくちやならない、さうすれば、マギが湯沸をこりに臺所へ行つてゐる間に、彼等は當面の仕事に着手が出来るから。)

アリク さあ、デイギッド、マギの歸つて來ぬ間に早く。

デイギッド シャンド君、あなたに一つ申込みたいところがあるのです。

デヨン(警告的に) 恩にきせるやうなことは御免ですよ。

アリク 純然たる取引の問題だ。

デイギッド お父さん、私にお任せなさい。實はね——(併し弱つたことに、疑深いマギは、此時既に湯沸を持つて歸つて来た。) マギ、お前が居ちやいけないといふことが、判らないのか。

マギ(煖爐の側に腰を下ろして、編物をこり上げながら) 判つてゐてよ。デイギッド兄さん。

デイギッド 私はシャンドさんに一こし申込みたい事があるのだ、そして商買の取引に婦人は顔を出すものではない。

(針が休まずに動く。)

アリク(溜息をつきながら) デイギッド、仕方がない、マギを此處に居らせるさ。

デイギッド(嚴然として) こらやい。(併しかう云つても彼女はびくきもしない。) ぢやよし、

其處にお坐り、併し、い、かい、邪魔をしてはならないよ。シャンド君、吾々三人は君の教
育費として進んで三百ポンドを出さうと思ふ、但、條件として——

デヨン 減多なこをいはないやうに。

デイギッド(何時にも似合はず徐ろに) 但、條件として、今から五年後、マギ、ワイリが尙未婚

ならば、それがマギの希望である場合、君に結婚を要求することが出来る。それはマギの方では全然任意であるが、君の方は何處までも義務を負ふこいふのです。

チェイムズ(合點がいつて) 成程。

デイギッド(元のきびきびした態度に歸つて) さあ、君の意見は。きめて下さい。

デヨン(暫く黙つてゐたが) 残念ですが——

マギ この人が残念であらうなからうご構ひません、私が不服ですから。それに、こんな申込をするなんて、あなた方、ほんごにひきいは。

デイギッド(女に眼をくれずに) マギ、靜に。

デヨン(女に眼をくれながら) お嬢さん。あなたの方で、何がそんなに不服なのか、私には判りませんね。

マギ あなたが髻を生やすやうになつたつて、其理由は、そんなにはつきりこは判りません。

デヨン 私は決して髻なんか生やしません。

マギ ぢや、てんであなたは駄目。

アリク おいおい。

マギ 私は此青年を拒絶したんですからね、さうするこゝろ——
 チヨン なに拒絶したつ!

デイギッド マギの拒絶如何は、此人の打つけた意見を聞いて悪い理由にはならない。シヤン
 ド君、君の反対する理由は?

チヨン つまり片手落ちな取引だからです。成程今ぢや私は大した獲物でないでせう。併し私
 ほごの技量のある者が、三百ポンドの金を得て、こんな雄飛が出来ないでせう。此婦人が夢
 にも望み得ないやうな雄飛も出来るこゝろいふものです。

マギ それやさうでせうよ。

デイギッド 問題は、その三百ポンドがないこゝろ雄飛が出来ないだけさ。

チヨン そこが私の弱味です。

マギ それはさうですが、併し——

アリク マギ、お前の方は、ちつとも心配しなくて可いんだからね。お前は、厭なら、あの
 こゝろ結婚する必要はない、併しあの人は是非お前と結婚しなければならぬのだ。

チヨン それも亦不公平な取きめです。

マギ その条件がなければ、夢にも考へられないこゝろですわ。

チヨン ぢや、考へてゐるにはゐるんですな。

マギ 馬鹿らしい。

デイギッド シヤンド君、これは君には良い取きめだよ。十中八九まで、マギは間もなく結婚す
 るだらうから、約束を續ける必要は、多分なくなるにきまつてゐる。

デイムズ 妹はひく手あまたなんだからね。

チヨン 假りにそれが本當だとしても、要するにマギが良縁をこりはずした時の用意に、私を
 備へて置かうこゝろいふのさ。

デイギッド(安心して) 簡單にいふこゝろその通り。

チヨン もう一つ問題があります。假りに私がマギを好くやうになつたこゝろすれば?

アリク(さうなれば可いこゝろいふ様子で) 随分ありさうなこゝろさ。

チヨン さやう、こゝろがさうなつた時に、マギが私を放り出すこゝろすれば?

デイギッド 君はその危険も冒さなくちやならない。

チヨン それも逆に考へて、假りに私がマギを知るにつれて、マギが厭やでたまらなくなつ

たごすれば？

デイギッド(にこやかに) 君は双方にも危険を冒さなくちやならない。

デイムズ(それほごにこやかでなく) おいジョン、シャンド、君に必要なことは、頭を一つ喰はすことだ。

ジョン 三百ポンドは大した金額ぢやない。

デイギッド それを受けるなりご断はるなりご、君の勝手だ。

アリク 僧職を志して勉強してゐる學生にこつて、大した金額ぢやないつて！

ジョン それだけの金がありながら、私が牧師で満足するご思ふのですか。

デイギッド その君の口調が、私には氣に入るのだ。君位の技倆のあるスコットランド青年に、三百ポンドの金を持たせて、世の中に出せば、何一つ出来ない事はなからう。考へても恐ろしくなる位だ、殊に英國人の中へ出かけた場合。

ジョン お嬢さんはどう思ひます？

マギ(編物をしてゐる) その問題については、善悪ごちらにも、一向考がありません。

ジョン(マギをつくづく見た後で) 此方は幾歳ですか。顔は若いやうだが、それは捲毛のせい

だご世間で云つてゐます。

デイギッド(大分嬉しうに) 妹は何時までも歳をこらないたちの女です。

ジョン それを私は返答ご認めるわけにいきません。

デイギッド 妹は廿五だ。

ジョン 私は丁度廿一です。

デイムズ ある書物に、四つ違ひ位は理想的だご書いてあつた。(例によつて顧られない。)

デイギッド シャンド君、さあごうだ。

ジョン(お母さんが居たら、まさかこんな返答もさせまいに) お嬢さんの方で異存がなければ、私に異存はありません。

デイギッド マギは？

マギ 「なければ」なんていけません。あなたの方から頼まなくちや。

ジョン、シャンドごもあらうものが、ワイリ家の一員に、そんな屈辱の機會を與へるなんて。御免です。

マギ ぢや、それでお仕舞。

デイギッド おい、シヤンド君、ほんの形式だよ。

デヨン(澁々ながら) お嬢さん、御同意下しますか。

マギ(頑として) あなたはそれを頼むのですか。

デヨン(苦々しく) さやう。

マギ(立上つて) 答へする前に、先づあなたが引退ひきさがるだけの餘裕を作つて上げませう。

デイギッド おいマギ。

マギ(勇敢に) 私が引く手あまただご云ふのは、あなたを誤解させる言葉でした。私にはチャームがないので、今までに誰も私の眼まへを追かけませんでした。

デヨン おやおや。

アリク 今に追かけに来るんだ。

デヨン(お人よし) ミにかく、それは、あなたの方から追かけなかつたといふ證據です。

(主人側は互にめくばせをする。)

マギ もう一つ。デイギッドは私を廿五だごいひましたが、私は廿六です。

デヨン おやおや。

マギ さあ、餘計なことは言はないで、此取引を止めますか、止めませんか。

デヨン(考をめぐらした後) 手を打ちませう。

マギ ぢや、さうこ。

デイギッド(急いで) さあそれで事がきまつた。シヤンド君、君は熱くして飲むご云つたかね。デヨン 生で飲まうと思ひます。

(他の人々は熱くして飲むごにきめ、大匙で砂糖なご加へて慎重な調査が始まる。)

アリク 君の健康と前途の成功を祝して。

デヨン 有難う。お嬢さん、あなたの健康を祝して。ミころで證文を書いた方がよくはないですか。クロスビ辯護士なら、祕密にこしらへてくれるでせう。

デイギッド さうしようか、それとも唯双方の名譽に信頼しようか知ら。

アリク(婦人に花を持たせて) マギにきめさせたがよい。

マギ 證文を書いた方がよいと思ひます。

デイギッド 明日書かせるごにしよう。私は考へてゐたのだから、五年の年賦で金を拂ふのが一番い、だらう。

デヨン 私は考へてゐたのだが、全額を直ぐさま私の名義で銀行に預ける方が可いでせう。
アリク デイギッドの案が最上だと思ふ。

デヨン 私はさうは思はない。勿論あなた方に都合が悪るけれや——

デイギッド(急所を突かれて) ちつとも悪くはない。マギ、お前はさう思つて？

マギ 私はデヨンに賛成します。

デイギッド(最早マギは向ふの味方だといふ變な感じを味ひながら) それならよし。

デヨン ぢや、それで事がまつたとするに、私は出かけませう。(彼は書きものを鞆へ納^{しま}ふ。)

アリク(愛想よく) 若し續けて書物をお讀みになりたけれや——

デヨン もうこれからは、隙な時に何時でも來ることが出來ますから、私は失禮しようと思ひ

ます。(マギはデヨンに外套をさせてやる。)

マギ あなた、頸巻があつて？

デヨン ありますよ。(ポケットから取出す。)

マギ 二度捲いた方がよくつてよ。(彼女はデヨンのためにさうしてやる。)

デイギッド シヤンド君、ぢやおやすみなさい。

アリク そして幸運を祈ります。

デヨン 有難う、あなたにも御同様に祈ります。私は、明朝六時廿分の汽車が着くまへに、事務所の方へ聲をかけます。

デイギッド 證文を用意して置ませう。(大事件なごの濟んだ後に、時を起る手持不沙汰の状態。)

マギ 承知しました。(デヨンは窓から出かけやうとする。)あなた、こちらですよ。

(彼女は、もう少し當りまへの出口から、彼をつれて出る。)

デイギッド あいつは竹を割つたやうな男だ。それに、金を預ける問題で、あんなに旨く私を出し抜いたでせう。(此時共謀者達は愉快氣にその額をあつめる。) お父さん、あの男は確に立派な實務的の頭腦を有つてますよ。

アリク あいつは隅へ置けない。吾々の誰よりも隅へ置けないよ。

チェイムズ マギだけは例外でせう。マギがどんな偉い女か、あの男は全く知らない。

アリク 知らない方が一番良い。男さういふものは、偉い女を怖がるから。

チェイムズ マギは中々歸つて來ないね。

デイギッド(あまり良い氣持もしないで) 良い徴候だ。しつ！ マギ、今晚の天氣具合はさうかね。
マギ 少し風があります。

(彼女は棚の上に疊んで載せてあつた、大きな上履ひをこつて、それを上等の椅子に被せ始める。男連は互に眼くばせをする。)

デイギッド(のびをしながら) ムー——ア——こ。大分遅くなつたな。お父さんの時計は何時？

アリク わしのは十時四十二分。

デイムズ わしのは十時四十分。

デイギッド 十時四十二分。

(三人は時計を捲く。)

マギ さあもう寝なくちやいけないわ。(彼女は三人の肩に優しく手をかける。さうして三人は、こればかりを、さうかして避けようとしてゐたのだ。) 本當にあなた方は親切ね。

デイギッド なにを馬鹿な。

アリク なにを馬鹿な。

デイムズ(但これは問題にされない) なにを馬鹿な。

マギ(少々悲しげに) デイギッド兄さん、私はあの青年に少々氣の毒ね。

デイギッド そんなさうがあるもんか。お前さういふものが居つて初めてあの男は成切するのだ。

(彼女は例の二巻の書物をこり上げる) お前はさういふものを寝室へ持つて行くのかい。

マギ さうです。あの人の知つてゐることは、私も知つてゐたいと思ひますから。

(マギは書物を持つて立去る。アリクとデイギッドの二人の悪漢は、今や互に相手の側を去りたがる。)

アリク ア——ムー——こ。デイギッドお前大きな石炭をこり除けておくれ。

(アリクはバネ附の寢具の方へふらふらこ出かける。デイギッドは石炭をこり除ける。)

デイムズ(腰を据ゑて大に論じたい氣持) 實にロマンチカルな事件だね。(誰も返答しない。)

一體結果はさうなるのかな。(何の返答もない。) マギは變り者だ。女さういふものがさの位變つたものかさういふことを、誰か利口な著者が氣付いたか知らん。女について立派に一冊の本が書けるさ私は思ふ。(デイギッドは依然として應じない。) マギが自分を廿六ださちオンに云つたのは、本當に天晴れだ。(同様にふらふらこ立去りながら呟く。) 併しわしは廿七だと思つてゐた。(デイギッド燈火を消す。)

六年が過ぎ去つてデヨン、シヤンドの重大時機が来た。もしかするに、彼の重大時機は、實はまだ先きにあるのかも知れない、それとも六年前にあつたのかも知れない。それは屢々夜中にそつと呼びかけながら、傍を通るので、吾々はベッドの中で寢返りさへしない程だ。併し堂々たる公けの知らせによるに、これはデヨンの重大時機である。彼が肌脱ぎになつて、永らく働いてゐた、當の目的の時間なのである。そして今や（上等黒地の併し身體に合はない）上着に手を通してゐる。こいふのは、結果を待つより外に、最早用事がないから。彼は下院の候補に立つてゐる、そして今晚は選挙の投票が行はれるのである。

幕が開くに、諸君は、譬へて云へば、デヨン、シヤンドのポスターが顔にくつつ付くのである。シヤンドに投票せよ、シヤンド、シヤンド、シヤンド。政治及宗教上の権利、信仰、希望、自由。これ等はシヤンドにこつてかびの生えた名である。シヤンドのこきを書いた札を得よ、シヤンドのこきを書いた札を百枚得よ、今晚グラーヌゴウではその札が雪に降つてゐる。諸君が

其ポスターの糊を眼から取除けるに、吾々がシヤンドの委員室に居ることが判かる。それは理髪師の店であつたが、今はシヤンド、シヤンド、シヤンドの名前が風のやうにその中を吹き捲つて、造りつけの家具以外のあらゆるものを吹き飛ばした。シヤンドに投票さへすれば、永久に刷毛でかき掃でかき、すつかり洗つて奇麗にして貰えるのに、何を苦んで髻を剃り、何を苦んで洗面所へ頭を浸す必要があらうかこいはんばかり。其處には、その上に立つてシヤンドに怒鳴り、それから駈出すための堅い椅子が二三ある。其處には鐵製螺線狀の階段があつて、曾ては婦人の調髪所へ通じたのであるが、今は更に多くのシヤンド、シヤンド、シヤンドへ通ずる。背後の硝子戸は、理髪所そのものへ開き、それが開くに、政治上宗教上の自由、シヤンドの叫び聲が聞え、其向ふには、更に多くのシヤンド賛成シヤンド反対を以て埋つた往來がある。あらゆる服装の男が、其不思議な言葉を叫びながら、駈込んだり駈出たり、階段を上つたり下りたりする。それから暫く静になつて、マギ、ワイリが階段を下りて来る。青ビロイドの着物であるが、たしかに飾り過ぎて、（そしてさうせ言ふならエ、言つて了へ）益々醜婦に見える。彼女は兩手を天へ差延べて、小さな獨樂のやうに廻轉する。アラクミデイギッドが、シヤンドこいふ言葉を口にせずんば止まずこいふ病にか、りながら、往來から彼女のこ

ろへ飛込んで来る。アリクは——年よつたために——一層痩せ、デイギッドは——年よつたために——一層肥り、二人共に、ツキード地の燕尾服にシルクハットをかぶつてゐる。

マギ 兄さん——皆は——あの人は——早く早く。

デイギッド まだ報告がないんだ何の報告も。實に氣がもめる。

(獨樂は益々早く廻轉する)

アリク マギ、後生だからお坐り。

マギ ごとも坐れませぬ。

デイギッド マギを抑へ付けなさい。

(二人は彼女を椅子の中へ押付ける。チェイムズが飛込んで来る。彼も亦肥つてゐる。彼のネク

タイは失くなつて居り、その帽子を被つちや、もう二度と葬式に列すことは出来ないだらう。)

チェイムズ(物狂はしく) チヨン、シヤンドに投票せよ。チヨン、シヤンドに投票せよ。チヨン、

シヤンドに投票せよ。

デイギッド(彼を掴まへて) 何か知らせがあつたかい。

チェイムズ 一言も。

アリク マギを御覽。

デイギッド 妹(彼はマギの側に跪いて、いさしけに彼女を抱きしめながら) こんな大膽な企をするなんて、あの人もごうかしてゐた。

マギ こんな大膽な企をするなんて、あの人も偉いものだつた。

アリク(物狂ほしく動き廻はりながら) 氣違染みた野心だ。

マギ 素晴らしい野心だ。

デイギッド おい妹、おいマギ、失敗を覺悟するが可いよ。

マギ(しはがれ聲で) 覺悟はしてゐます。

アリク 六年の辛い歲月、マギは今晚を待つてゐたのだ。

マギ 六年の勇ましい歲月、チヨンは今晚のために奮闘したのです。

チェイムズ そして五年たつた時、妹、お前はチヨンを結婚するこゝも出来たのだ。證文には五年を書いてある。

マギ あの人に結婚しないさいつて、私が不平だと思ふのですか。戦に勝たないうちに、私があの人の邪魔をしてよかつたのですか。

デイギッド(眉をしばめながら) 併し戦に負けたら?

(マギは返答が出来ない。)

アリク(はつこししながら) 何だ、あれは?

(三人は戸口で耳をすまます。叫聲は鎮まる。)

デイギッド まだ恐ろしい騒の最中なのに、さうしてあんなに静になつたのか知ら。

(チェイムズは風の如く消去る。アリクとデイギッドは、マギがまるでデジョンにでも話をするやうに、そつこ口を利くのを聞いて色を失ふ。)

マギ あなたは負けたとおつしやいましたか。ね、あなた、それや初めてですもの、負けるのは當りまへ。六年。さやう、今晚から又もう六年を始めませう。今に勝てます。(言葉烈しく) 斷じて屈服してはなりませんよ。

(群集のさよめきは又急に起つて、次第にこなたへ近いて来る。)

デイギッド デジョンが来るやうだ。

(チェイムズは握りつぶした玉葱のやうに部屋の中へ飛び込んで来る。)

チェイムズ 今デジョンが来るよ。

(彼等の言葉は、假令そのまま、續いても、外の騒のために誰にも聞えなかつただらう。民衆は突喚して此委員室を占領しようとするやうである。其奮闘の中から、一人の男が大わらはになつて現はれ出て、うしろに戸を閉めながら、部屋の中へさつこ飛び込む。それは、帽子も五ギニの服を着たデジョン、シャンドである。彼には尙また他の變化がある。彼は此數年間粘土の中を土鼠もぐらのやうにもぐつて進んで来たから。群集の中をぐんぐん突進するために揚け勝ちだつた彼の右の肩は、今永久に其位置に止まつてゐる。彼の口は箱のやうにぴたりと閉まる傾きを有つてゐる。彼の眼は勞れてゐて、誰かがその上に眼蓋を引かぶせて、一週間彼を眠につかせる必要がある。併しその眼は依然として正直な忠實な眼で、若し口さへ少し手傳ひをするなら、時として微笑を以て其顔を輝かすことも出来る位。)

デジョン(そのまま、眞直ぐに天へ飛んで行かないやうに、一つの椅子に噛かじり付きながら) 入選。當選。二百四十四の多數。私は下院議員デジョン、シャンドだ。

(群集は、此時既に報知を得て、其さよめきに戸がぱつと開く。チェイムズは直に駈寄つて、今に自分がシャンドの義弟になることを告げる。涙の玉がアリクの鼻の頭にぶら下がる。デイギッドは冗談まじりにデジョンを擲ぐる眞似をし、デジョンも有頂天になつて擲り返す。)

デイギッド お父さん、戸へ身體を投かけて、皆を喰止めなさい。マギ、何故お前はそんなに黙つてゐるんだ。

マギ(手足の力が抜けて) あなた大丈夫當選?

ジョン 二百四十四の多數。わしは從男爵を敗つた。マギ、わしはそれをやつてのけたのだ、しかも一人の助けもなしに。私は獨力でやつてのけたのだ。(彼の聲はこはれる。其こはれた缺らを拾集めるこども出来る位。)わしは鳥のやうに聲がかれて了つた。しかもカウキヤツデン俱樂部で演説をしなければならぬ。デイギッド君、酸素を私に注入してくれたまへ。

デイギッド よし来た。(彼がそれをする間に、マギは幻を見てゐる。)

アリク マギ、お前何をしてゐるの。

マギ これは下院、私はジョン、初めて議長の眼を捕へようとしてゐる。あのすつこ上の、婦人席に坐つてゐる、變な小さな細君が見えますか。あれは私。議長閣下、私は今此處に立つて、私の歴史的な處女演説をしようと思ひます。私は雄辯家ではありません。婦人席からの聲、「あなたが雄辯家でないつて? 今にあなたが雄辯家であるこどもを、あなたは皆に知らせるでせう」「黙れ、女」こいふ叫聲、そして満場の憤慨。議長閣下、私は今閣員席に眼

を注ぎながら、恐る恐る立つものであります。婦人席からの聲、「そしてあなたは、今にその閣員席に上着の裾を垂れるでせう」「その小さな細君をつれ出せ」こいふ大きな叫聲、そして女は力づくでたゞき出される、そして名譽ある紳士は潮のやうな喝采を浴びて席に復する。

(アリクとデイギッドは、濫りに屈しない其頭を振る。)

ジョン(寛容に) マギ、マギ。

マギ あなた、私を怒つてはゐない?

ジョン そんなこころがあるものか。

マギ 併しあなた睨付けたんぢやないの。

ジョン 私はサー、ペリグリンのこどもを考へてゐたのだ。私が投票に勝つたこいふ、唯それだけのために、ケチな復讐をしたから。あの男は、私が勉強せずに置いたフランス語で、私に祝詞を述べた。

マギ(稍背が高くなつて) フランス語の話せる婦人に結婚するこいふこころは、あなたにまつて助けになるでせうか。

デイギッド(すかさず) ちつともなりはしない。

マギ(得意満面) Mon cher Jean, laissez-moi parler le français, voulez-vous un interprète ?
 (ね、あなた、私にフランス語を談話して下さい、あなた通辯が入らない?)
 チヨン これは、これは。

マギ Je suis la sœur française de mes deux frères écossais. (私は二人のスコットランド人を兄に有つフランス人の妹です。)

デイギッド(彼女を崇拜して) マギはフランス語を勉強してゐたんだ。

チヨン(軽くあしらつて) うまい、うまい。

マギ(堂々) 皆がお出になります。

アリク 誰が?

マギ うちのお客が。こゝはロンドンです、そしてチヨン・シャンド夫人が初めての招待をするところです。(輕快に)今晚誰が見えるか、あなたに申上げましたかね。あすここにサー、ペリ格林さんがお出でになります。(アリクに向ひ)サー、ペリ格林、ようこそ入らして下さいました。Avez-vous... 選挙でお敗^{まが}して本當にお氣の毒さま。

チヨン マギ、從男爵がお前をやりこめはしないかしら。

マギ その從男爵をやりこめるために、私は本當の貴族を招待しました。Voilà(みんなもんです。)

デイギッド(歡んで) しようのない奴だ。貴族は金がかかるよ。

マギ なに、ほんの一寸した安い貴族ですよ。(チェイムズ威張つては入つて来る。) これはようこそ、安井男爵さま。

(チェイムズは、マギの氣がふれてゐねばよいがと思ふ。)

デイギッド(この男、教育がなくて本當に困つたもの) おい、安井のてい將、さうだい。

チェイムズ(呆氣にこられて) マギは――

マギ エ、ようこそさんす、マギと呼んで頂戴。

アリク(齒を剥いて笑ひながら) マギは初めての招待會の練習をしてゐるんだよ。偉い方々が戸口へ見えてゐるんだ。

チェイムズ(憎氣て) それを私は云ひに來たのだ。偉い方々が本當に戸口へ見えてゐるのですよ。

チヨン 誰が?

ヂェイムズ 傑い方々がさ。二頭曳の馬車がさ。(彼は三枚の名刺をヂヨンに與へる。)
ヂヨン 「ミスタ、テンタドン」

デイギッド 君の應援演説をしてくれた人かい?

ヂヨン さやう。あの人は院内幹事で、控訴院判事です。「レイデー、シビル、テンタドン」

(溢面をつくる) 例の女か! テンタドンの妹さ。

マギ 結婚してゐる人?

ヂヨン いゝゑ。「コンテス(伯爵夫人)ド、ラ、ブリエール」

マギ(流石は物識り) フランス人でせう。

ヂヨン さやう、親戚にあたるらしい。未亡人だ。

ヂェイムズ 併しお客様達へは、何ぞ云つたらいいんです? (少くとも、「ようこそいらつしや
いました、ごうかこちらへ」位の挨拶があるものさ、ワイリ一家の人々は期待する。)

ヂヨン(此男確に將來大人物たる資格を有つてゐる) 今私は大變忙しいが、お待ち下さるな
ら、間もなく二三分間割愛出来るでせう、ご云つてくれたまへ。

ヂェイムズ(仰天して) 冗談いつちやいけませんよ。

(併しこれがために、彼は益々ヂヨンに敬服し、そして此言づてをもたらし去る。)

ヂヨン(ごうだ驚いたらう、ごいふ調子なきにしもあらず) 私は二階へ上つて、窓から群衆に
私の姿を見せてやらう。

マギ 併し——ね——あなた、その貴婦人達をどうするの。

ヂヨン(二階の方へさんさん上りながら) お前のお客様ぢやないか。お前の力の試めし時だ。
マギ(縮み上りながら) そのシビルさんごいふのは、ごんな女か、あなたの知つてる點を聞か
せて頂戴。

ヂヨン 何にも知らないがね、唯その女は私を下品な男だご考へてゐる。

マギ あなたを。

ヂヨン その女は私の演説會に出席したことがある、そして私を下品な男だご云つたさうだ。
マギ 一體それはごういふ積りなんでせう。

ヂヨン さあごういふ積りだらうね。私は二階から下りて來たら聞いて見よう。

(彼が立去るご共に、マギの不安は増す。)

アリク(勵ますやうに) ぶつ突かつて行くさ、お前のフランス語で。

マギ フランス語はみんな頭から抜けて行きます、お父さん。

デイギッド(暗い顔をして) おれは屹度また例の訛りが出るんだ。

(新來の客は部屋に光輝を添へる。そしてマギは、自分が火箸でつま、れて、洗面器の一つへ入れられたやうに感ずる。そのお客様達は、氣儘勝手に振舞はうといふ考は毛頭ない。従つてこんな風に、「白鳥來つて家鴨色を失ふ」のは、彼等の咎ではない。彼等は、自分達がワイリ家のお客様であることを知らないで、單に他の人々と一緒に待合室で待つてゐるものも考へてゐる。彼等は探りを入れるやうに、身體をうねらせる。そしてマギの方でも、これに應じて身體をうねらせることが出来れば、別に氣を悪くすることもないのだが、マギは、それがまだ自分に眞似の出来ない藝當であること、假令デイギッドが彼等同様の立派な夜會服を買つてくれても(そして丁度その時デイギッドは買つてやらうと決心してゐるが)、それを身體につけるよりは、兩腕にか、へてゐる方が、一層良いきりやうに見えるだらうといふことを急に悟る。なほまた彼女は、その婦人達のやうに外套をひらりと脱ぐことは、その外套の代金を帳場へほんご投出すよりも、一層困難な仕事であることを感じる。伯爵夫人の方は、歳がいつてるのだから、大目に見ることも出来ようが、シビル嬢の方は、若くて美しくて、

丁度靜に波を切るターサスの巨船のやうにゆつたりと身を横たへる。)

伯爵夫人(いみじくほ、笑んで、世にも美しい語調で) お邪魔でございますまいね。待つてゐてもよいといふお談でしたから。

マギ(洗面器の中から勇敢に攀登りながら) さうぞ——御遠慮なく——お差支なくば——あの——

(デイギッドが父が、自分を氣の毒がつてゐることを彼女は悟る。)

(大きな聲の演説が外から聞える。)

シビル(その鼻を小氣味よくツンとさせながら) あの人はまだやつてゐますよ、小母さん。

伯爵夫人。Mon Dieu! (おやおや) (宇宙全體の容赦を乞ふやうな態度で。) あれはテナンドンさんでね、群衆に向つて其愉快な演説をもう一つやつてゐるのですよ。さうでせう、その戸を閉めて頂けないでせうか。

(これはデイギッドへの言葉。それが如何にも切なる調子なので、まるで自分の命乞ひでもしてゐるやうである。デイギッドは彼女を救つてやる。)

マギ(斷じて負けてはるまいと決心して) J'espère que vous—trouvez—cette—réunion—intéress-

sante? (此會合があなたにこつて興味あることを希望します。)

伯爵夫人 Vous parlez français? Mais c'est charmant! Voyons, causons un peu. Racontez-moi tout de ce grand homme, toutes les choses merveilleuses qu'il a faites. (あなたフランス語が出来て。まあ、それは愉快。さあ、さあ、少し話させう。この偉大な人物について萬事をお話し下さい、この人が行つた總ての驚くべき事柄について。)

マギ 私——私——Je connais (私は知つてゐます)——(おやおや後が出て来ない!)

伯爵夫人(意地悪く) これは失禮、お嬢さん、あなたはフランス語をお話しになつたと思ひました。

シビル(デイギッドが自分の肩の美さに見られてゐることを知る) 小母さんは、なんて意地が悪いでせう。(マギに向ひ)この人があんなに早口で駈出すと、本當に誰にだつて判りやしないですよ。

マギ(へしつぶされて) なに構ひません。あなた方が此處へ見えなことを、シヤンドさんへ傳へませう。

シビル(氣取つてのろのろと) さうかシヤンドさんに迷惑をかけないで下さい。私達は實は兄

が歸つて来て、ホテルへつれて行つてくれるまで此處に待つるだけのことですから。

マギ あの人にさう申しませう。

(彼女はこれ幸ひ二階へ身を隠す。)

伯爵夫人 あの婦人は大變氣をもんでゐるやうですが。シヤンドさんの御親戚ですか。

デイギッド 親戚といふわけでもないんで。私の妹です。吾々はワイリといふんです。

(併し花崗石坑の持主といふことは、二人に何の感じも與へない。)

伯爵夫人 あ、初めてお目にかゝります。あなたは、シヤンドさんの幹事さんですか。

デイギッド いゝゑ、單に友達です。

伯爵夫人(洗面器に向ひ陽氣に) は、あ、私はお前さんを知つてるよ。「はいお次ぎの方」だらう。シビル、お前は目方を量つてるのか、それとも居眠つてるのか。

(シビル嬢はぐつたりと量臺へ坐りこんでゐる。)

シビル 本氣に眠込んでるわけぢやなくつてよ。

伯爵夫人(禮儀の鑑) シヤンドさんの身の上を委しく話して下さい。あの人がピンを拾つたのは、此處ですか。

デイギッド ピンですつて。

伯爵夫人 少くも私の今までに本で讀んだところでは、自力で出世した人は、皆その初めにピンを拾つてゐます。みんな拍子で立身するのは、其後だご傳記に書いてあります。

(併しデイギッドは、再び自己の支配力を得、現に二人の衣裳の値段を見積り始めた。)

デイギッド 奥様、あの人が拾つたのは、ピンではなくて、三百ポンドの金ですよ。

アリク(チヨンの傑さが、もう可い加減話題に上つてもよいと感じて) それに、あの人の立身は、極く初めは、そんなに早くもなかつたね、デイギッド。

デイギッド あの人は奮闘しました。元來牧師になる積りだつたのです。御承知の通り、あの人は大學教育を受けてゐます。労働者選出の議員ぢやないのですからね。

アリク(恭しく) あの人は文學士です。併し學生時代に鐵器修繕業に僱れてゐました。

伯爵夫人(今度は全く見當がつかかねて) 鐵器修繕業といひますこ?

デイギッド ボイラをがりがりやるんです。

伯爵夫人 成程。男いふものは種々な惡戯いたづらをするものだね、シビル。

デイギッド(幾分莊嚴に) ボイラをがりがりやつて、數百萬の財産を拵へたものもあります。

お父さん、人の噂では、シャンドがその仕事に僱れたのは、さうすれば三百磅を返して了へるからだつたといふんでしたね。

アリク(抜からぬ顔で) そんな噂をわしも聞いたな。

伯爵夫人 ハ、ア——ぢやその金は借金だつたのですね。

(デイギッドミアリクは、今や自分達の得意の題目に、馬乗りになつた形。)

デイギッド い、や、一種の——贈與金——つまり好意を抱く人々からの——です。ミころで

その人々は、シャンドさんがそれを拂戻すのを許しません、ねお父さん。

アリク ぎょうして、許すもんか。

伯爵夫人(他の事柄を考へたい氣持を抑へながら) それは親切な美しい心掛でしたね。

アリク(デイギッドをちらり見えて) さやう。ミころで奥様、あの人は鐵器修繕業に立派な天

才を發揮しました。

デイギッド 併しあの男の野心は満足しなかつた。間もなくあの男は政治に志した。演説の野次ぎして中々恐ろしい男になつた。その口を封ずるために、人々はその男を委員席につかせなければならなかつた。次に議長席につかせなければならなかつた。それから後、あの男は一

手に演説を引受けた。消防ポンプのやうに、自分の進む所、何處にでも進路を開いた。そして此補缺の議席があいた時、それがあいたかあかないか判らんうちに、忽ちあの男はそれへ坐りこんで了つた。奥様、成功の途上にあるスコットランド人を見るほご、世の中に人を感銘させるものはありませんね。

伯爵夫人 誠にお説の通りだと思ひます。そしてあの人は、もうボーラミ手を切つたのですか。デイギッド(感銘を興へるやうに力を入れて) いゝゑ、さうして。會社は、シヤンドが當選すれば、年俸八百ポンドでロンドン支店長にするに約束しました。

伯爵夫人 シビルや、この人こそお前のいふ強い人だよ。併しお前は眠つてゐるのだね。

シビル(眠氣をさましながら) 正直のまゝ眠つてはるません。(他の人々に愛想よく) 併しさうでせう、兄の演説がもう終ひになるか、一寸見てくれませんか。

(デイギッドは出て行く。可愛さうに、アリクを獨り島流しにして。伯爵夫人はアリクに對して思ひやりがある。)

伯爵夫人 さうもお氣の毒さま。(この言葉が助け船になつて、アリクもまた出て行く。) ねむ子や、お前強い男が好きぢやないの。

シビル(身づくろいしながら) 私まだ強い男さいふものに會つたまゝなくなつてよ。

伯爵夫人 私も會はない。併し若し會つたら、お前の眠氣がさめるかい。

シビル その強い男は、多分こちらが二人ださいふまゝを發見するでせう。

伯爵夫人(シビルをつくづく見ながら) 成程、さうだらうね。お前さんは冷たい人だが、戀をしたまゝがあつて。

シビル(欠伸をしながら) 私は、まだ火の出る程、のほせ上つたまゝはないわ、小母さん。

伯爵夫人 のほせ上らうと思へば、のほせ上れて?

シビル それだけの相手が來れば。

伯爵夫人 現代の女さして、その男をお尻にしくのが、お前の義務だらう。

シビル 現代の女さして、私は自分の義務を盡すまゝに努めませう。

伯爵夫人 まゝで、却つて向ふがお前をお尻にしくやうなまゝになつたら、さう?

シビル その男が本當に私の求めるやうな人だつたら、當然私をお尻にしくなくぢやならぬでせう。

伯爵夫人 まゝで、さうなるまゝ?

シビル さうなれば、勿論私はその男に魂を打ちこみますわ。小母さん、私が本當に戀をするこなれば、スコットランド女王のメアリのやうな戀をするでせう。女王はその戀人ボズエルのことを、寢卷のまゝで世界中を追かけてもよい人だ云ひました。

伯爵夫人 まあ。

シビル 私は本氣で云つてゐるつもりです。

伯爵夫人 本當に、お前なら、その位のことは、やりさうだ。お前は知るまいがね、私はこのシヤンドといふ人を可なり氣の毒に思ふんだよ。

シビル(美しい眼を大きくあけて) なぜ。シヤンドといふ人は全くの田舎者ぢやなくつて。

伯爵夫人 だからさう思ふのさ。あの人の得意時代は、もう殆んど過ぎてゐるからさ。群衆を動かすあの蠻的な態度は、議會へ出るに笑ひものになるだらう。

シビル(冷淡に) さうでせうね。

伯爵夫人 だけれど、若し教育があれば――

シビル 併し大變素晴らしい教育を受けたといふことを、たつた今聞かされたのぢやなくつて。

伯爵夫人 今あの人を教育するに必要なのは、お前や私のやうな女です。お前だつたら、それ

こそ良すぎる位。

シビル(例の如く頸を美しく延ばして) 私はそんなに興味を感じません。あなたにお譲りします。あなただご、さういふ風にお始めですか。

伯爵夫人 勿論五時頃にあの人に立寄つて貰ひます。それはさうご、あの人には奥さんがあるから。

シビル 私には見當が付きません。併しあゝした人は早婚なものです。

伯爵夫人 奥さんが無いにしても、多分あの人を待つてゐる婦人が、何處かボイラの中にでも居るだらうよ。

シビル さうね。(マギ降りて来る。)

マギ シヤンドさんは直ぐ降りて來ます。

伯爵夫人 有難う。あなたの兄さんが、あの人の履歴について、それや面白い話をして下さいました。ね、シビルや、シヤンドさんは結婚なすつたといふんだつたかね。

マギ いゝゑ、結婚してはるません。併し間もなくするでせう。

伯爵夫人 あゝ。(單に談の相手をするだけ。)その方はあなたのお友達?

マギ(今や自分を蔑視して) その婦人はあまり感心しない人です。

伯爵夫人 それぢやその人のここをすつかり話して頂戴。

マギ あまりお話することもありません。その婦人は平凡で愚鈍で、自己修養なんか立志す女の一人。そして~~貴~~實力を試められると、降参して了ふ。(自分で自分を傷ける兇悪な歡びに耽つて)その女はシャンドさんの破滅の因です。

伯爵夫人 でもそれは悲惨ね。偉大な將來を有つた男が、その元の下級社會と縁組をして、身の破滅を來たすものが、みんなに澤山あるか考へて御覽なさい。

マギ 私もその女に言つて聞かせたのです。

伯爵夫人 けれどもシャンドさんを斷念しないのですか。

マギ しません。

シビル 男の方で愛してゐるなら、さうして女が斷念なんかしませう。何こいふ名前なの？

マギ あの——マギこいふのです。

伯爵夫人(依然として興味を感じないで) まづ氣の毒ながら、そのマギがヂョンをしくじらせるんですね。(ヂョンが降りて來る) あ、吾々の英雄!

ヂョン お待せして濟みません。あなたが伯爵夫人?

伯爵夫人 そしてこれがシビル、テナドン嬢。(シビルの頭はその莖の上で傾く。) この人は、本當をいふと、私の實の姪ではないので、つまり私は半分だけ小母にあたるのです。シ

ヤンドさん、まあ何こいふ大勝利でせう。

ヂョン エ、まづ可加減なところですよ。シビルさん、あなたの兄さんは、群衆への演説をたつた今終られました。

シビル ぢや小母さん、此上お邪魔をしないで、お暇しませう。

伯爵夫人(自分のハートに關係しない限り、不誠實こいふことを非常に良いことに思ふ女) ちよつこ一言。昨晚私はあなたの演説を聞きました。實に立派でした。ちやうご議會でもてさうな熱情的な雄辯。

ヂョン さうも有難う。

伯爵夫人 併しかうしては居られません。Bon soir.(お休みなさい。)

(シビルは、誰か遠くの人にでもするやうな叩頭をする。)

ヂョン お休みなさいシビルさん。あなた私を下品だと思つてるさうですね。

(愕の眉が上がる。)

伯爵夫人 まあシャンドさんとしたところが、何といふ馬鹿氣た——

デヨン シビルさんが私の演説を聞いた後で、さう云つたさうです。

伯爵夫人 それは全くの考へ違ひ。

デヨン(頑こして) 嘘ですか。

シビル(はつきり眼をさまして) あなた御存じのやうですね。それに、さう無暗に突込んでお尋ねなさいますなら——成程そんな風に私は感じました。

伯爵夫人 まあ、この子は。

シビル(少々胸を躍らせて) だつて此人は是非聞かうといふんですもの。

デヨン(當惑して) 別に心配することはありませんよ。若しそれが本當なら、改めなくちやならないから、一寸聞いて見ただけのことです。

伯爵夫人 そらね、この方はお前の意見をあんなに尊重なさるんだ。

シビル(そのすつきりこした身體を、鮎釣竿のやうにしなはせながら) シャンドさん、そんな風に云つて頂いで本當に有難う。さうも濟みませんでした。

デヨン 併しまだ私には、すつかり判らないのです。勿論あなたが私のことをさう考へやうに、

一向私は痛痒を感じないのですがね。私は下品であるところが、立身の妨げになるなら、止めなくちやならんといふ意味です。

(釣竿は再び元の如く堅くなる。)

シビル 成程。それやさうせ私なんか、あなたの立身出世を左右する力はありませんわ。

デヨン(自分が挑戦されてゐることを十分悟つて) シビルさん、悪い意味でなくて、それは事實です。

シビル(彼女が最も魅惑的な時、その聲に小憎らしい小さなひつか、りが出来る) 勿論悪い意味でなしに。ぢやもう一度仲善しになりませうか。

デヨン 是非。

シビル ぢや、ロンドンの私のところをお尋ね下さいな。こつて食はうごもしませんから。

デヨン(彼も男だ) 喜んでお尋ねします。

シビル いつでもよろしい、午後の五時頃。

67
デヨン 有難う。そして、それだけの御親切がおありでしたら、私のまだ知らないことを、教

へて頂きます。

シビル(聲のひつかゝりが益々つものつて来る) お望みごあらば、私はベストを盡しませう。
 チヨン シビルさん有難う。そして私の方からお教へ出来るこゝが、一つや二つはないごも限
 りますまい。

シビル(今や天使のしやつくりのやうになつて) さやう、私達は互に助け合ふこゝが出来ます
 わ。それぢや當分さよなら。

チヨン さよなら。マギ、お客さまがお立ちだよ。

(此小競合の間、マギは離れて立つてゐた。マギさいふ名が出るこゝ、二人は互に眼を見かはす。
 チヨンはシビルを送つて行く。併し伯爵夫人は後戻りをしていふ。)

「ぢや、あなたがそのマギですね。(マギは稍反抗的に頷き、伯爵夫人は胸をいためる。) 併
 し、知つてゐたら、あんなこゝを云ふのぢやなかつたのです。さうかこのお婆さんを許してや
 つて下さい。」

「なに構ひません。」

「多分萬事は旨くゆくでせう。お嬢さん、若し私があなただつたら、シビルのあつした tete-

tete(うちこけ談)を抑へるやうにしますがね。私はぶしつけな女ですが、あのシビルは危険な
 女ですよ。そしてシヤンドさんの圖々しさが、あの女の心を引付けたらしいのです。マギさん、
 では Bon voyage (一路平安を。)

「さようなら——併し私、本當にフランス語がしやべれるのですよ。Je parle français. それで
 いけませんか。」

「成程旨いものです。(萬事マギを安心させるやうにして) C'est très bien. (本當にお上手。)」

「Je me suis embrouillée——la dernière fois. (おつきは私おぼろしくおぼろしくした。)」

「うまー! 前よりのものつくり話しませうか。」

「Non, non. もっと早く、もっと早く。」

「J'admire votre courage! (あなたの勇氣に感服。)」

「Je comprends chaque mot. (一語一語皆判のちやうど。)」

「Parfait! Bravo! (申分なし。偉い。)」

「Voilà! (ぐれ御覽なやう。)」

「Superb! (素敵。)」

(伯爵夫人は喝采しながら行く。そしてマギは一瞬時得意である。併しそれも、デヨンが帽子をこりに歸つて来る時には、失くなつてゐる。)

「まだ演説をなさるのでですか。」

(彼はさうしたわけか、大變上機嫌である。)

「私は急いで出かけて、カウキヤッデン俱樂部で演説をしなければならん。(彼は噴霧器で咽喉をうるほす。) ね、マギ、私、實際下品かしら。」

「あなたはさうでないけれど、私はさうです。」

「別にさうも思はれないが。」

「御覽なさい、私、なんてござつて、着飾つてゐるこゝでせう。これを註文した時、あまりけば、け、ばしいこは思つたのですが、それでも、さうも未練があつて、止める氣になれなかつたので。併しこれから一層地味にします、屹度。シビルさんをあなたさう思つて？」

「あの女は、もう少し慎んだ方がいいよ。少々生意氣だからね。」

「あの人、美しいわね、あなた。」

「あの女は中々旨く身體をうねらせるよ。遊び相手としては一人前の資格があるだらう。」

(マギ慕はしけにデヨンを見る。)

「ね、あなた、此處に居て暫く話して行かない？」

「私に用があるなら、ね。二人を待たせて置けば置く程、二人はお前のこゝを考へるよ。」

「私達の結婚のこゝを、あなた何時發表するつもり？」

「もう直ぐだよ。お前は必要以上に一年待つたのだから、愈々事を急ぐのが、お前に對する私の義務だと思ふ。」

「あなたは見上げた方ですね。」

「さう致しまして。お前こそ、こんなに辛棒強く待つたのは、見上げたものだ。それに、さうせ兄さん達が放つては置かないからね。兄さん達はまるで猫が鼠を狙ふやうに、私を狙つてゐるのだもの。」

「私があなたを助けるためにしたこゝは、本當に僅かですわ。」

「三百ポンド。」

「私はそれに對して百割も返して貰つてゐます。」

「お前がさう考へるのは、私にして大變嬉しい。」

「あなたにまつて、嘸かし辛いでせうね。」

「辛いことは決してない。正直のところ、マギ、この六年間、お前さういふものについて私の見たところは、總て、或は殆んど總て、お前に對する尊敬を増すことばかりだつた。」

「尊敬！」

「それ取引は取引だ。」

「私がこんなにあなたに魂を打込んでなければ、私はあなたを解放して上げるのですがね。」
(彼の眼はきらり光る、併し彼はそれを消す。)

「吾々は非常に幸福な夫婦になれるだらうとわしは思ふよ。」

(マギは此言葉を熱心に受入れる。)

「私達は互に氣心を本當によく知つてゐますからね。」

「私は非常に變つた男でね、私自身の外に誰も私をよくは知るまいと思ふ。併しマギ、私はお前が底の底まで判つてゐるよ。」

(マギは寛大にも此言葉をそのまゝにさし置く。)

「それに、外にあなたの氣に入りの女があつたのとは違ひますからね。」

「そんなものは、一人だつてありはしない。」

「若し將來に、誰かさういふ人が出来るとしたら、さう——誰かチャームのある人が。」

「マギ、餘計なことを云はないが可い。私が一旦結婚する以上、ほかの女なご問題にはならな
いから。」

「世間にはさういふ場合もありません。」

「スコットランド人だけは大丈夫だよ。」

「私時々思ひますわ、スコットランド人と英人の差は、スコットランド人は、總ての他の點で
きびしくて、婦人にだけは柔かく、英人は、婦人にだけきびしくて、總ての他の點には柔かだこ。」

「お前は、スコットランド人の最も偉大な徳性、即ち自分の立身を傷けるやうなことは、斷じて
しないさういふ性質を忘れてゐるよ。」

「あ、併しあなた、あなたは自分のやることを、何でも恐ろしい勢でやりますからね、あなた
が戀をするさなるさ、何さういふ激しい熱情になるさうでせう。」

「それも一理があるやうだ。」

「若しさうなつたら、私に何が出来ませう。さういふのはね、今や私の一生の望は、何でもあなた

の欲するものを、あなたに得させたいことです、但私をもそのうちに加へて貰ひたいだけです。」

「私達二人は旨くやつて行けるよ。」

「あなたは旨くこり繕つていらつしやるのです。戀は同情だといひますが、もしさうださるゝ、私はあなたに大した戀をしてゐるに相違ありません。その證據に、今晚あなたが感じてゐらして、しかも勇敢に隠してゐらつしやるこそが、ちゃんこ私に判るのですもの。私はまるで自分がデヨン、シャンドであるやうに、あなたの氣持に同情します。(デヨンは溜息をつく。)」

「私は今、會へ行つたが一番良いと思ふよ。」

「お待ちなさい。さあ私の眼を眞直ぐに御覽なさい。そしてあなたは、自分の胸中に、自由を得たい、妨げを受けないで新生活を始めたい、こいふ盛な願が、潮のやうに湧起つてゐることを否定が出来ますか。」

「マギ、そんな氣まぐれな考は棄てたがよい。」

「あなたを斷念出来ないなんて、私、怪しからん女です。」

「若し斷念したら、それこそお前は馬鹿な女だと思ふ。」

「私が若しデヨン、シャンドだつたら、自分の前に開かれた美しい戸を通つて、マギ、ワイリ

P57

2

こいふ女をひつ張つて行きたくない、ちやうど一足の古靴と同様に。何故あなたは私をその戸の外へびしやりこ閉め出さないの。(デヨンはびり、こ身體を慄はす。)

「結局取引は取引だからね。」

(マギは、變化のやうに、むせび泣きながら動き廻る。彼女はデヨンの廻りを、脅迫するやうにはためき歩く。)

「束縛を逃れたい一言でも云つて御覽なさい。辯護士をさしむけますから。」

「そんなこゝを、少しでもわしがほのめかしたかい。」

「證文に縛られて、あなたは身動きも出来ません。」

「全くだ。」

(彼女はあはれな満足に耽る。)

「女は決して男と共に向上しません。私はあなたを曳ずり下ろしますよ。本當に曳ずり下ろしますよ。」

「そんな心配は入らない。さうはさせないから。わしは大丈夫だ。」

「あなたは、世の中で一番美しいものを得ずに了ふ、そしてそれはみんな私のせいです。」

P58

2

「何だいそれは。」

「ロマンス。」

「なにを馬鹿な。」

「それがなければ總ては冷^{つめた}くて灰色ですよ。それを得た人は、天國を覗いた人です。」

「誇張してはいけない。」

「あなたはあまり一生懸命に働いたので、大抵の人が、あなたの歳になるまでに出くはすやうな面白いことを、あなたは一つも経験しなかつたのです。」

「わしは面白いことなんか未だ曾て欲しいとは思はなかつた。わしは今日までに笑つたことを覚えてゐないよ。」

「あなたは滑稽の感じがありませんね。」

「全然ないよ。」

「私は時々考へます、若しあなたに滑稽の感じがあつたら、私をもう少し好きになれるだらうよ。私を好きになるには、滑稽の感じが入ると思ひます。」

「わしはある本で讀んだのを覚えてゐるが、スコットランド人の頭へ冗談を押込むには、外科的

手術が入るゝ誰かゝ云つた。」

「ゑ、そんなことを云つた人もあります。」

「併し不思議ぢやないか、手術をしたからこいつて、さうして冗談が頭へ押込められるかね。」
(彼は此點を考へて見て、判らないので斷念する。)

「私の考へてゐた『面白い』といふのは、そんなことではないので、私のいふのは娘達相手の面白いことです。陽氣な愉快な罪のない面白味。今ぢやその相手が、圖々しい上流社會の美人で、あのしやつくりをする小さな夜叉のやうに、身體をうねらせてあなたの側から駈出し、ここまでお出でミ手招きをする女でも可いでせう。」

(チヨンは太い溜息をする。)

「い、や、わしはさういふ経験を曾てしなかつた。」

「それは、總て男に生れたものの特權で、私といふものがなければ、今あなたにはそれが経験出来るのに。」

「わしは無しで濟ませることが出来るよ。」

「それは一切土曜日なしで暮すやうなものです。」

「おいマギ、まさかお前は、もつと歳のいつた男の方が、自分に似合ふと感じてはるないだらうね。」

「決してそんなことはありません。あなたは丁度私の理想の夫です。」

「成程、成程。それや、さうなくちやならない。」

（マギは再び彼を脅迫する。）

「デイギッドが證文を有つてゐます。證文は嚴重に納つてあります。」

「デイギッドがそれを大切にするのは無理もないことだ。」

（彼女はツイリ家の誇を棄てる。）

「ね、あなた、私は今嚴かに誓ひます。二人の結婚の事情が事情ですから、若しあなたが戀をするやうなことがあれば、私は他の細君並には振舞ひません。」

「そんな必要は全くあるまいよ。」

（彼女の聲は慄へる。）

「あなた、證文はデイギッドが有つてゐるものではありません。デイギッドは自分で有つてゐると思つてゐますが、實は私がこゝに有つてゐるのです。」

（稍沈み勝ちで、デヨンはその致命的な書類を打見やる。）

「成程、忘れもしない證文だ。それに違ひない。エヘン。」

「何故私が持つて來たか尋ねないの。」

「何故だい。」

「何故つて、私に、これをあなたに返すだけの勇氣が女らしさが、ないとも限るまいと思つたからです。（デヨンは東の間の夢を見る。）それが私に出來なかつたといつて、將來私を非難なさるやうなことはありますまいね。」

「誓つてそんなことはしないよ。」

「過去六年間、私の眼は唯今晚に注がれてゐたのに、今さら石坑へ歸つて、以前の生活を再び始めるなんて！ 私はあなた同様、永い間今晚を待つてゐました。それなのに、今さら歸つて行つて、其處で萎びて乾上つて了ふなんて、しかもデヨン、シヤンドの妻になればなれるのに！」

「なればなれる、でなくて、本當になるのだよ。私は約束を破りはしない。」

「いゝゑ、いゝゑ、駄目です駄目です。（マギは證文を引裂く。デヨンは坐つたまゝ、身動きをしない、併し其眼は再び輝く。マギはまづ自分を罵り、次に彼を罵る。）あなたを手離すなんて、

私は馬鹿だ、馬鹿だ。屹度^{きとど}あなたは、今日こいふ日を悔いでせう。私はあなたにこつて必要な人間、私がるなければ、あなたは災にあひます。私ほごあなたを助けるここの出来る人間はありません。私はあなたの立身出世に無くてならない。それが判らないあなたは盲^{くら}らだ。」

「何をいふのだね。私は、どんな場合にでも、自分の立身出世に他人の手出しを許さない。」

「私がそれに手出しをしてゐたにしても、あなたは知らずに了つたでせう。併しそれも濟んだこと。あなたはあまり慌て、結婚してはいけませんよ。まづ美しい人形を相手に、思切りおふざけなさい。それから威張つた女を、意のままに従はせて、散々いぢめてやりなさい。さういふ女がしやつくりをするたびごとに、私を記念して、一つ餘計にぶつた、いておやりなさい。そしてあなたの奥さんになる人は、あなたの生體を見抜くこいふことを、屹度忘れないでゐらつしやい。」

「私の生體を見抜く?」

「男はそんなに警戒してゐても、その細君は屹度夫の缺點を見つけ出しますからさ。」

「マギ、お前のいふのはさういふ缺點が判らないね。」

(カウキヤツデン倶楽部は、その四壁を破つて溢れ出で、新選出議員をその波頭に乘せるため、

P59

此方を指して滔々^{たうたう}と押し寄せて来る。第一の浪は、シヤンド、シヤンド、シヤンドと叫びながら、理髪師の店へ打突かつて来る。一時デヨンは戸に背を押付けて、その大浪を喰止める。「マギ、お前は一時の客氣に駈られて振舞つてゐるから、私はそれに乘するわけにいかない。よく考へたがよい、そして明朝談し合つて見よう。」

「い、ゑ、もう二度と此談をすることは、私に出来ません。それは今晚でお仕舞ひ、今を限りです。あなた、御機嫌よう。」

(彼女は、戸を破つて種々のものを打碎きながら押し寄せる大浪の中へ、忽ち吸ひこまれる。一瞬のうちに、其處は氾濫して、もう茶碗一杯の水も流れこむ餘地がない。足を滑らした者は、上の方へ押し上げられて、そのまゝ、降りるこゝが出来ずに他の警めこなる。デヨンは階段へ飛上がり、かのカヌートのやうに、荒狂ふ大海に向つて空しく怒號する。それは自由と高潔な精神についての演説である、そして耳に聞えないけれども、皆の頭がそれで上^{のほ}せて了ふ、演説者自身の頭もこめて。彼の聲が聞える頃になるこ、彼はすつかり感傷的になつてゐる。)

「併し諸君、自由すらも、その多きを憂ふる場合があります。(ノー、ノー) ノーではないアダムスン君。人は時として束縛を欲する。(否、否) 否ではない、ウキリ、カメロン。そし

て私の見出した一人の婦人は、光榮にも、私に束縛されることを欲してゐます。即ち私は結婚せんとしてゐます。(大喝采。) 婦人の名はワイリ嬢。(有頂天。) 靜に。その婦人は此處にゐます。(狂暴。) おや此處にゐましたが、マギ、何處へ行つたんだ。(小さな一つの聲で「此處にゐます。」 大きな百の聲で「何處だ——何處だ——何處だ。」 その小さな聲——「私はあまり小さくて、誰にも見えません。」)

(ワイリ嬢名のつく三人の男が奮闘して進路を開く。間もなくデイギッドの聲が聞える。)

「デイムズ、お父さん、マギを捕へましたか。」

「捕へたよ。」

「ちや擔ぎ上げなさい。」

(變な小さな得意な姿が高く擔ぎ上げられる。その指がちやうぎ星に届く。自分の行爲の氣高いことを幾分已惚れてゐる今夜の英雄は、マギを力強く指さす。)

「諸君、未來のシヤンド夫人です。(「演説、演説。」) いや、いや、この方は婦人ですから、演説は出来ませんが——」

(今夜のヒロインは彼を驚かす。)

「いゝ演説が出来ます、演説がしたいのです、そしてそれは二つの言葉に盡きます。二つの言葉は即ち——(カウキヤッデン俱樂部の全會員を抱擁するやうに、兩腕をさし延べながら)——我が選挙區民！」(狂氣。)

近頃英國を訪れなかつたド、ラ、ブリエール伯爵夫人が、數分前にシヤンド家のロンドンの住宅へ案内された。夫人は、其驚きを言葉に表はすほどの興味は感じなかつたけれども、一つの愉快な部屋へ通されたのを見て、眉を擧げた。彼女は、シヤンド式の裝飾は、シヤンド家の人々と同様、全くお話しにならぬものと思ひこんでゐたから。

それは食堂の背後にある小さな部屋で、英國の建築家は、それで以て以前から名聲を博してゐる。「此部屋を何ぞか利用して御覽、利用が出来たら、それこそ本當に利巧な人だ」こ、彼等はその部屋の除幕をしながら、諸君にいふやうだ。伯爵夫人は、ジョンが、たしかにそれを何ぞか利用したことを發見する。それは彼の「書齋」(non Dieu) やれやれ、英國人の使ふ言葉(いつたら!)、そしてその中には、厭な感じを起させるものが、一つもない。のみならず、其處には、や、もすればさういふ處に有り勝ちなものが非常に少い。それは微塵(ちり)げば、けしなくない。其處には——回轉椅子の幸福な主人に見えませす聞えもしないで——互に喧嘩をする色

彩がない。伯爵夫人は、黒いオークの家具が對に揃つてゐるのを見て、穩かな満足を感じる。いふこゝすらも出来ない。「自然」がその裝飾に加擔したのではないかと思はれる程、それは人の眼に落付を與へる。それは多分近頃オクスフォードから來たらしい教養ある人の勉強部屋である。初めて出會した時、その部屋には、實際以上に見せかけるやうな矯飾(ぎやうじ)が一つもない。吾々のお客さまは少々失望する。併し彼女は公平な考を有つ女なので、自分を失望させたお禮として、不在の主人公に接吻を一つ投げる。

伯爵夫人はまた、ジョンが、その所有品中の一番困難なもの、即ち細君をすらも、何ぞか物にしたこゝを忽ち見てゐる。何故かこいふこゝ、此處で伯爵夫人を接待するマギが、實際感心する程に落付いた身装(みなり)をしてゐるから。マギの顔の醜(みにく)さを、それ程目立たせないばかりでなく、部屋も調和するやうな可愛い鼠色の衣裳を、彼はマギに着せてゐる。併し見たこゝろ明に、マギは夫と共に向上はしなかつた。彼女は依然として愚鈍である。シヤンド夫妻のうちでは、主人公よりも細君の方が氣に入つたこゝを覺えてゐる伯爵夫人は、マギがそんなに愚鈍なのを、こづきたい位じれつたく思ふ。例へば、何故マギは、もう一つの部屋へ出しや張らないのであらう。もう一つの部屋(こゝ)は、實はやかましく儀式張つた食堂であつて、その様子を、半ば開

いた扉を通して、ちらりこ吾々を見る。目下その中には、シャンド氏の婦人委員達が、大きな卓の廻りに、ペンミフルスキャップを備へて坐り、首領の出席を待つてゐる。其婦人達の中には天晴れ賢明な婦人もあれば、愚な婦人もゐる。なにしろ當時は、女にあたまが有るこいふことは、女らしくないこ考へられた不思議な時代であるから。伯爵夫人は、婦人達が書類を整理したり、こちらからは見えない戸を通つて、食堂へ案内されるのを、物珍しげに覗く。浮世を夢の伯爵夫人にまつて、此女達は一種の野生の鳥のやうである。そして其女達の間には姪を見出して、殊に面白く思ふ。夫人は、距ての戸が閉るや否や、直に説明を求める。

「伺ひますが、一たい何時から、うちのシビルが、此婦人達の一員になつたのですか。シビルに似合はないこですわ。」

(明にマギは、婦人問題を理解するだけに賢くはないらしい。彼女は半分仕上げた靴下を、名残惜しげに眺めながら、無邪氣に併し愚鈍に答へる。)

「それは主人が、婦人問題のために活動するやうになつた頃からだこ思ひます。」

(伯爵夫人は、シビル姫ああの無骨者こに關する種々の噂を聞いてゐた。そこで一寸躊躇する

だけのしほらしさを見せた後、上流社交界で評判の、直截な調子で口を切る。)

「奥さん、かう申しちや失禮ですが、私の聞いてゐるこが、半分本當でも、御主人は、あの婦人この交際があまり頻繁すぎるやうです。(マギは無表情。彼女は靴下を取らうこ手をのばす。そこで伯爵夫人は勘忍袋の緒を切らす。) まあ何ですあなたは、そんなもの打ちやつこきなさい。一足ニフランで買へるぢやありませんか。奥さん、何故あなたは御主人の仕事に理解ある同情を有つやうに努めないのですか。」

「私は主人の演説をタイプに打ちます。」

「併しそれがさういふ問題についてか御存じ?」

「種々の問題についてです。」

「まあ!」

(マギは、つ、ましやかに編物をこり上げる前に、相手の氣づかぬ冷やかしの眼で、伯爵夫人を眺めたかこも思はれるが、しかこは判らぬ。何しろ此時ジョンがはいつて來て、そのために、マギは存在を失つて了ふから。デイギッドが恭しく評した「成功の途にあるスコットランド人」こいふ様子は、ジョン、シャンドの人柄に尙表はれてゐる、但や、上等の表装で。併し

その顔は依然として頑固に正直な顔である。そして彼は婦人のための戦士である。それは自分の利害からでなく、彼の感謝すべき貧困時代が、婦人の要求さういふものを彼に悟らせたからである。併し彼の己惚は増加し、事柄によつては氣持よく忘れて了つてゐる。例へば、彼は今や停車場で、赤帽さ大きく呼んでも、手押車を押すやうな手つきをしないですますことが出来る。マギは伯爵夫人を紹介する、併しそれでも彼はびくさもしない。

「あなたをよく覚えてゐます——あのグラスゴウで。」

「もうたつぷり二年になりますね、シヤンドさん。」

「(チヨンは自分が古典の素養のあることを示すに躊躇しない。)

「Tempus fugit (光陰矢の如し) ですね。」

「あれから私は、此英國へあまり参りませんでした、そして來て見るこゝ、あなたは、一世の望を擔つてお出でになります。」

「(幸にして彼の學問は、謙遜の徳を以て緩和されてゐる。)

「いえ、さう致しまして、さう致しまして。」

「婦人の擁護者として。」

「彼の謙遜は、眞實に對する尊敬心を以て緩和されてゐる。」

「まあさやうなわけで。」

「そしてあなたは、一つの法案を愈々御提出になるさうですね、婦人にも、男同様に髻をはやす権利を與へようさういふ。(これがその法案に關する伯爵夫人の知識の全部である。チヨンは此言葉を文字通りにこる。)

「その法案には、髻の事なんか一つもありませんよ。(伯爵夫人はチヨンに熟考の餘裕を與へる。)

そして一向その効果のないのを見て愉快に思ふ。) マギ、私の演説をタイプに打つたかね。」

「ハイ打ちました。二十六頁分。(彼女は抽斗からそれを取り出す。)

「(多分チヨンはお客様を感心させようと思ふのであらう。)

「私は婦人委員會の人々に、その概念を與へる積りです。マギ、私が結論のこゝろを覚えてゐるか、一寸聞いておくれ。『終りに臨んで、議長閣下、以上は凡そ賢明な英國婦人の當然の要求であります』——英國さういふよりも寧ろ大英帝國さういふ方がよからう——『而して我輩は、以上の主張を我が旗印とするこゝを誇るものである。』——」

「(お客様はすっかり感心する。)

「おやおや首領達に反抗するのですね。」

「『但我輩の行動が政府に迷惑を及ぼさない範囲に於て』」

「あ、あ、成程。」

「『我輩は當局者に要求する、忠誠の心を以て併し斷乎として』——」

「また強硬になりましたね。」

「『我輩の議案を採用するか、それとも、當局者自身一つの案を、時を移さず提出するところを約束されんことを。而して當局者が之を拒絶する場合には、我輩は嚴然として警告する。我輩は今強ひて採決を促さうとは考へないが——』」

「エヘン」

「『近き將來に於て再びこれを提出せんとするものであることを。かういふわけで、私が採決を求めないといふことは、あなただけ御存じで、外に誰一人知らないのです。』」

「そんなにまでお打明け下さつて、私、心から嬉しく思ひます。」

「勿論今こなつちや、誰が知つたつて構はないからお話したのですがね。」

「おやおや」

(何だか知らんが、マギは不満の様子。)

(チヨンに向ひ)「併しそれはどうしてです、あなた。」

「私は自分のしようと思ふことを、此上當局者に對してあいまいにして置く勇氣はない。私は今晚院内幹事に此演説を内示して置くつもり。」

(併しマギはまだ満足しない。)
「併し採決を求めないのは、日和見ぢやないの。それで強硬だ
と云へますか。」

「演説をするといふ事そのことが、既に大抵の人に出來ない強硬な態度だよ。その上採決を求めたら、わしはやられて了ふよ。」

「吠えるだけで噛まないのですね。」

「おいおい、そんなことは、マギ、お前には判らないよ。」

「さうかも知れません。」

(伯爵夫人は判る範囲に止まつてゐる。)

「併し婦人達は何といふでせうか。」

「勿論婦人達は厭に思ひますさ、併し我慢しなくちやなりません。」

(この時女中がマギ宛の一枚の名刺を持つて現はれる。マギは靜にそれを見て考へてゐる。)
「誰か大切なお客様かね。」

「いゝゑ。」

「ぢや、マギ、用意はいゝよ。」

(これは明に、マギに向つて、扉をあけよといふ合圖である。そして彼は拇指をチヨッキにかけながら、悠然と食堂へ乗込む。そこには委員連からの氣持のよい拍手が起り、戸は閉る。何か深く考込み出したマギは、その時やつと女中に向つて、客を通せと命ずる。)

「女のお客様さま？」

「名刺にはミスタ、チャールズ、エナブルズとあります。」

(伯爵夫人は到らう本當に乗氣になる。)

「チャールズ、エナブルズ！ まあ、その人をあなた知つてゐて？」

「何でも外務省の夜會で、そんな名の人と知合になつたやうです。」

「そんな名の人ですつて！ 内閣委員の一人をつかまへて。併しそんな浅い知合なら、何故その人があなたのおところを訪問するのでせう。」

「さあ何故でせうね。」

(マギの眼は、ヂヨンの演説を納ひこんだ抽斗の方へさまよふ。)

(マギに向ひ)「なあに、御心配は入りませんよ、私が後見して上げますから。」

「あなたはその方を御存じ？」

「私ですか。最後にその人に會つた時、その人は、さうか私に——エヘン——さね、あなた、三十年前の話ですよ。」

「三十年！」

「あの時分は私も綺麗でした。今その人に遇つては、胸が悪くなるでせうが、若しさうならなけれや——一寸した狂言をませう——私はこの本を取落します、そしたら、ね、あなた、あの——暫く此處をはづして下さいね。」

(は入つて來たエナブルズ氏は非常に雅なお殿様で、十八世紀といふ時代を携へて來るやうに思はれる。彼のお轎が戸口に待つてゐるやうな氣がする。彼はマギの平民的な手に、頭をかがめて忝しく口をつける。)

「シャンド夫人、私が御訪問申上げた失禮をお赦し下さることを思ひます。先夜は大變愉快な

お談を致しましたな。」

(マギは、勿論エナブルズ氏の愛想のよい態度を忽ち眞にうける。)

「さう仰有つて下さつて有難う存じます。お二人はお知合ですか。こちらはド、ラ、ブリエール伯爵夫人。」

(彼は幾分の感動を以てその名を繰返す、そして伯爵夫人は、半ば人悪く半ば悲けに、片手で顔を覆ふ。)

伯爵夫人。」

「三十年です、エナブルズさん。」

(彼は、優にやさしく、顔を覆ふ手を取除ける。)

「そんなに永くも思はれませんな。」

(彼女も同じく彼の顔を見入る。)

「まあ、本當に三十年ですわ。」

(二人はや、悲けには、笑む。マギは親切な女主人公らしく、その緊張を緩和する。)

伯爵夫人は、夏場だけ、サレに別荘をお借りです。」

「それは何より喜ばしい。」

「い、え、喜ばしくはないでせう。あなたはもう私を何とも思つてゐらつしやらない。男心も秋の空。しかも僅か三十年しか経たないのに。」

(彼は伯爵夫人の側の椅子にごつかご坐わる。)

「ね、伯爵夫人、ボスフォラス海峡のあの楽しい夕。」

「私そんな話はお断り。私はあなたが大嫌ひ。」

(併し彼女は書物を取落す、そしてマギは部屋から消える。それはあまり旨い立去りかたではないので、其外交家はほ、笑む。それから彼は美しい溜息をつく、彼のやることは何でも美しいから。)

「ね、夫人、頃しも金角灣頭月冴えて。」

「輕舟に棹さす二人は誰ぞ。」

「男は勇敢なるレアンダ、女は燈臺守のヒエロウカ。あらず、女はフランス大使の愚な妻、男は女の口から、夫の秘密を探らんとする英國大使館附のやくざ男。」

「まさかそんな事が！二人はある庭園の門のところで袂別をする。」

「あゝ、チャールズさん。」

「併しあなたは歸つて来るに約束した。私は曉方まで待つた。あゝ伯爵夫人、若しあの時あなたが本當に歸つて來たら——」

「奥さんは御機嫌如何。」

「少々加減が悪くて。多分痛風でせう。」

「そしてあなたは？」

「朝なごに少々關節がきしみます。」

「私も御同様。ウキースバーデンに大變良い醫者が居ますよ。」

「ホムブルグの男の方が良いです。去年の夏、その男のしてくれた手當こいつたら——や、ミうも實に。」

「本當にチャールズさん、もうかうなつちやお仕舞ですわね。吾々は二人とも時代遅れの老朽。(二人は聲を合せて呻く。それから夫人は鋭く相手の手の甲をたたく。)一體あなたは此處で何をしてゐらつしやるの？」

「單に交際の訪問。」

「嘘だと思ひます。」

「昔の通りだ。さう正面から切出すところは、矢張悪くないね。」

「あなただつて昔の通り。例によつて嘘ばかり。(夫人は、戸が質問を發してゐるのを見てこる。) よろしい、おはいり下さい、奥さん。エナブルズさんこの談はもう澤山ですから。御

注意申上げますが、此人は何か悪企みがあつて此處へ見えてゐるのですよ。」

「マギ(臆病に後すさりしながら) まさか。」

「エナブルズ 伯爵夫人、あなたは本當に人の談に水をさしますね。私に少しも悪氣のない證據を、さして、シヤンド夫人、さうかあなたから話題をお選び下さい。」

「マギ(安心して) そら御覽なさい、奥さん。」

「エナブルズ 御主人は御健勝でございますな。」

「マギ 有難う。(旨い考を思ついて)主人の話をすることにきめませう。」

「エナブルズ お望みごあらば。」

「伯爵夫人 御用心。話題を選んだのは、果してエナブルズさんですよ。」

「マギ 私が選んだのでせう、さうでなくつて？」

エナブルズ 御存じの通り、あなたがお選びになりました。

マギ(訴へるやうに) あなたは主人を偉いとお思ひですか。

エナブルズ 大に偉いと思ひます。唯少し當惑する點は、あなた方スコットランド人は、實際的な性質に感情的な性質が、非常に交り合つてゐるので、英國人には、まるでお國の鮎のやうに、捕へやうがないことです。

マギ(眼を丸くして) さうですかね。

エナブルズ いや、あなたぢやなくて、御主人がです。議會生活の初めが、あんなに拙かつた人を私はあまり知りません。あの人は全く手のつけられない、犬の吠えるやうな、大道演説式でしたが――

伯爵夫人 私もその演説振りを覚えてます。

マギ いゝゑ、そんな演説振りではありませんでした。

エナブルズ(慰め顔に) 初のうちですよ。併し二度目の議會になるに、すっかりさういふ風を棄て、了つて、今日では、あの人の演説を聞くのが楽しみです。それはさうして、伯爵夫人、私のこの言葉に何か悪企みがありますか。

伯爵夫人 あなたは、シャンドさんが、かういふ事柄を奥さんと談されるかどうかいふことを、探らうと思つたのです、そしてシャンドさんが談されないといふことを、奥さんから教はつたのです。

マギ(憤概して) 私一言も、そんなことを教へはしませんわ。

エナブルズ 確にさやう。ところでまた私は、シャンド氏のイムプロムチュな演説に感心してゐます。

マギ イムプロムブチュミ申しますさ。

エナブルズ 即席演説のことです。その演説には、幾分重大な缺點があります、判断の缺點がいふよりも、寧ろ趣味の缺點が――

マギ(躍起になつて) 私にはさうは思はれません。

エナブルズ 失禮ながら事實です。併し後になりますに、實に手際よくそれを訂正されます。

私は、二度目に良い考を出す人は、注意する値打のある人だといふことを、何時も経験します。ところで伯爵夫人、あなたはまた何か、口が出したいやうですね。

伯爵夫人 あなたは、シャンドさんに二度目の考を供給する人間の誰であるかを、奥さんが御

存じかまうか、探らうこしてゐるのです。

マギ 主人に考を供給するんですつて。一たい誰が主人に考なんかを供給するか知りたいものですね。

エナブルズ 成程。

伯爵夫人 あなたを感心させる點が、何か外にありますまか、チャイルズさん。

エナブルズ (咽喉をごろつかせながら) エーミ。さやうさ、吾々は一同あの人の諧謔によつて、大に啓發されるどころがあります。

伯爵夫人 (本當に愕いて) あの人の諧謔? まあ、あの人の!

マギ (つんこして) 何が不思議です。

エナブルズ いや本當に、あの人の演説中に出るある手際の良い文句は、議會全體の腹をよらせますよ。さういふ文句に對して、シヤンド式いふ新しい名が發明された位です。

伯爵夫人 (徐々にその愕きから回復しながら) まあ諧謔ですつて!

エナブルズ あの人は、對談の時は、成程——ごちらかいふこ——諧謔に缺けてゐる人のやうな感じを與へますがね。

伯爵夫人 (飛か、るやうに) あなたは、誰があの人の演説に諧謔を供給するか、探つてゐるのです。

マギ 供給するんですつて、うちのの人に?

エナブルズ さういはれて見るこ、あの人の諧謔には、妙に女性的なところがあるやうです。

伯爵夫人 それが女かも知れないこ、あなたは考へたんですね。

エナブルズ 冗談いつちや——

伯爵夫人 ちやんこ判つてゐます。あなたはそれが奥さんであるかも知れんこ考へたのでせう。

エナブルズ (兩手を上げて) 降參々々。

マギ (呆氣にこられて) 私が?

エナブルズ 御免下さい。成程私の考へ違ひでした。

マギ (慌てこ) 私が主人に何か迷惑をかけてゐましたか。

エナブルズ それこは反對に、シヤンド君の演説に、女のヘヤピンが這入つてゐないのを知つて、安心しました。若しシヤンド君が御在宅なら、お眼にかゝりたいこ思ひますが。シヤン

ド君に、一つ大變よいことをして上げようと思ふのです。

マギ(二つの方向へ心を引かれて) エー居るには居ますが――

エナブルズ(こいふ意味はね、伯爵夫人、もしあの男が私の信するやうな男であると思ればです。(此言葉が、殆んど食堂の戸口に達したマギの足を止める。))

マギ(躊躇しながら) 主人は今非常に忙しいのですが。

エナブルズ(ほ、笑みながら) 私なら面會してくれらるでせう。

マギ 何かあの人の演説についてですか。

エナブルズ(そのほ、笑が冷くなりながら) まあ、さうですな。

マギ ぢや、あなたのお知りになりたいことは、主人を煩さなくても、私から申上げるこゝが出来ること思ひます。私はその演説をタイプに打ちましたから。

エナブルズ(溜息ついて) 私はそんな方法で事を確める人間ではありません。

伯爵夫人 それやさうでせうよ。

マギ その演説については、全く秘密といふことはないのです。主人は今晚それを院内幹事へ見せるのですから。

エナブルズ(言葉鋭く) 屹度ですか。

伯爵夫人 全く本當ですよ。私はあの人がさういふのを聞きました、のみならず、その所謂結論なるものを、私の前で暗誦しました。

マギ 私はそれを宙で覺えてゐます。(彼女は大膽な芝居を打つ。) 『以上はあらゆる賢明な大

英國婦人の要求であり、我輩は之を我が旗印とするこゝを誇るものである』――

伯爵夫人 全くその通りです、奥さん。

マギ(伯爵夫人を拜むやうに見ながら) 『而してそれが如何程當局者に迷惑を與へても構はない』(伯爵夫人は言葉が出ない、それ程突然に、彼女は本當のマギ、シヤンドに面接したのである) 『尊敬する首相閣下に於て、今議會中に同様の議案を提出すべしこの言質を與へられるならば、私は喜んで此議案を撤回しませう。併しながら、さうでない限り、私は嚴然として警告する、私は今や此問題を採決に問はんことを。』

(彼女は、顔をその大政治家から轉ずる、彼女は眞青になつたから。)

エナブルズ(暫く黙つた後) 素敵だ。

(血がマギの心臓へ歸る。)

伯爵夫人(大に面白くなり始めて) では、あなたは、あの人がお話の通り、採決に訴へようとするのを知つてお喜びになるのですか。

エナブルズ さうです。その勇氣こそあの人を大成させる所以です。

伯爵夫人 成程。

(伯爵夫人は、マギの眼を捕へたいと思ふが、その眼は用心深く、夫人から轉せられてゐる。)
エナブルズ シヤンド夫人、直ぐ御主人をお呼び下さいませんか。

伯爵夫人 本當にさうなさいませ。

(マギは又一心配、併しヂョンを呼んで來なければならぬ。)

ヂョン(感銘して) これはこれは、エナブルズさん。光榮に存じます。

エナブルズ ごうだ、君。

ヂョン まあ、まあ、お坐り下さい。(再び落付を回復して) あなたが何の用事で見えたか、私には見當がつかます。

エナブルズ やれやれ、スコットランド人は隅へ置けない。

ヂョン 勿論私が當局者に對して迷惑をかけてゐるのは、判つてゐます。

エナブルズ(にこやかに) 心配はいらないよ。吾々の方は大に喜んでゐる。

ヂョン そんなことを私に信じさせようつたつて無理です。

エナブルズ 私が今日お尋ねしたのは、その證據を見せるためだ。御存じだらうが、この廿四日に、吾々はリーズで大會を開かうにしてゐる、そして大臣が二人演説することにまつてゐる。そこで、もう一人演説する餘地があるのだが、私はその地位を君に提供することが出来るのだ。

ヂョン あの私に!

エナブルズ さやう。

ヂョン(威丈高かに) 要するに政府が私を買収しようとするのですな。

エナブルズ あまり大げさに考へちやいけな。つまり政府が君を有望な少壯政治家だと思へてゐる證據さ。

マギ あなた、氣をつけて。

ヂョン(難局に處するだけの力量を具へてゐる) それは賄賂です。あなたは、私がこの演説をしないといふ條件で、さういふ提供をなさるので。私を、自分の榮達のために、婦人の味

方を裏切る男だ、なきごお考へになるのは、少しひびいぢやありませんか。私はあなたの賄賂を拒絶します。

エナブルズ(初めてジョンが氣に入つて) 感心だ。併し君は考違へをしてゐる。こちらには條件いふやうなものはないし、それに吾々の方では、君に先程の演説をして貰いたいのだ。さあ、さうだ引受けるかね。

ジョン(尙も迂散らしく) あなたがその演説を讀んだ上でも、尙同じ提供をなさるなら。私は、あなたが先づそれをお讀みになることを主張します。

エナブルズ(溜息つきながら) よろしいとも。

(マギは、ジョンが其首領に演説を渡すのを見て、絶體絶命の苦み。一方に伯爵夫人は、ぞくぞくする。)

けれども斷つて置くが、吾々はその演説を重大視してはるませんよ。重要な點は、君が採決に訴へようとしてゐるごことだ。そして吾々もそれに賛成なんだ。

ジョン(頭がふらふらになつて) それはさういふごことです。

エナブルズ さやう、吾々は賛成なんだ

ジョン 併し——併し——だつて、私がそんなことをやつたら、除名するなんて威かしてゐたぢやありませんか。

エナブルズ 何もかも君を試めすためさ。

ジョン 私を試めすため?

エナブルズ 吾々は、君の議案の採決が、別に大した影響を與へる筈のないことを知つてゐる。又さうはさせない積り。従つて問題は、果して君に、採決を要求するだけの勇氣ありや否やを試めすことだつた。若し君が此演説で大言壯語しながら、しかも當局を恐れて、日和見をするやうならば、この先き君に用事はないといふ考だつた。

ジョン(沈んだ調子で) 成程。(併し彼に合點のいかにないことが一つある、それは、何故エナブルズが、自分の日和見をしないことを確信してゐるかといふこと。)

エナブルズ(ペーヂを何氣なく返しながら) この中には、例の旨い文句が、何かありますかね。ジョン(その唯一の頼は、草稿を取返すこと) いや、なに——今お讀みになる必要はありませんよ。

エナブルズ(單に禮儀上から) ほんの自分一個の樂みのため。今晚眼を通して見ませう。(彼は

原稿を巻いてポケットへ入れようとする。デヨンはマギに絶望的な救いを求める、勿論マギから何の救ひも来る筈のないことは十分承知だが。

マギ ね、あなた、その草稿は外に寫しがないのです。(エナブルズに向ひ)新しい寫しを拵へて、一二時間のうちにお届け致しませう。

エナブルズ(愛想よく) そんなお手数をかけちや恐縮ですよ、奥さん。大事に致します。

マギ お歸りの途中、あなたに何か變事のあつた場合、あなたのポケットのものは何でも、あなたの相続人の財産だご考へられやしないでせうか。

エナブルズ(笑ひながら) いやこれは用意周到。あ、云はれて見るミね——(彼は原稿をデヨンへ返す、デヨンの手は貪るやうにそれを奪る。) 奥さんも矢張スコットランドの方です、

伯爵夫人。

伯爵夫人(喜んで) さうです、矢張スコットランドの方。

エナブルズ シヤンド君、勿論往來で私をやつつける懼のある人間は、君の婦人委員の外にはなからうが。あの連中が私の馬車から馬をはづして行つてからこいふものは、私は、一哩先きからでも、あの連中を嗅ぎつけるこゝが出来よ。

伯爵夫人 一哩? チャールズさん、そこを覗いて御覽なさい。

(彼は食堂の戸の把手をそつこ廻はす、そして彼の鼻が、思つた程利かないこゝを悟る。彼はマギに伯爵夫人に、大げさな道化染みた囁きで、別れを告げ、爪さき立てて安全な場所へ去る。デヨンがエナブルズと共に出て行つて了つたので、マギは最早伯爵夫人の非難の眼を避けるわけに行かない。大に傷けられた夫人は、非難の指を立てながら、マギへ向つて殺到して来る。)

「奥さん、道理でね。」

(マギは夫人の攻撃を覺悟してゐる。)

「何を仰有るのか私には判りません。」

「いゝゑ、判つてゐます。シヤンドさんを助ける人が、實際に誰か居るこいふ意味です。」

「そんなものは居ません。」

「そしてそれは婦人です、それはあなたです。」

「私の助けるのは、ちよつこした事です。」

「ちよつこした事! あなたが、即ちシヤンドさんの拾つたビンで、それがあの人の運を開く

82

のです。ところで私の知りたいことは、^{いつ}たい御主人が、抑もあなたから助けられてゐるのを、
氣付いてゐられるかどうかいふこと。」

(ジョンが歸つて来る、そしてそれに對する返答を直に供給する。)

「マギ、伯爵夫人、また旨くやつつけましたよ。」

「まあ、よかつたわね。」

(伯爵夫人は感極まる。)

「それさいふのも、あなたが日和見をしないといつたためですシヤンドさん。」

(シヤンドが、小學生のやうな熱心さで、夫人に泣つく様子は、彼を可なり可愛く見せる。)

「ね、奥さん、どうかすつば抜かないで下さいよ。(彼は事の理由を發見する。私が強い人

間だもんだから、強硬に出るだらうと、向ふで考へたに過ぎません。マギ、お前が草稿の寫を
拵へたいと云つた時、お前は氣付かなかつたが、ほんまに私は大助かりだつたよ。」

(マギには一向判らない。)

「どうしてです、あなた。」

「どうしてつて、お蔭で終の方が變更出来るもの。」

283

(やつと合點が行つて。)

「成程變更出來ますわね。」

「もう一つ運の良いことにはね、私が日和見をするさいふことを、婦人達の委員に云はなかつ
た、だからあの連中には全く判らずにすむ。奥さん、實際、小さな天の使が頭の上に坐つて、
ジョン、シヤンドの出世を守つてくれますよ。」

(伯爵夫人は頭の上を見ずに、今マギが占めてゐる椅子の方を見る。)

「その天の使は何處に坐つてゐますか、シヤンドさん。」

(彼は婦人さいふものに學問がないことを知る。)

「なに比喩的に云つたのです。」

(彼は輕快に委員室へ歸つて行く、そして今や諸君はマギの編針の音を聞くこゝが出来た。そ
の音は最早夫人を腹立たせない。夫人はそれを音楽に合せてゐる。)

「奥さん、その天の使は、今此處で靴下を編みながら坐つてはゐませんね。」

「ゑ、坐つてはゐません。」

「さうとも知らず、私は此處へは入つて來た時、何から何まで、シヤンドさんの力だを考へて

りました。部屋の美しいのまでも。」

「主人は美しい趣味を有つてゐます。」

「さよなら、スコットランドの姉さん。」

「さよなら、奥さん、ようこそ入らして下さいました。」

「さよなら、ピン子さん。」

（マギは上品な音を出す。）

「さようなら。」

（伯爵夫人は今や全くマギに傾倒する。）

「ほんごに見上げた賢夫人。あの人には勿體ない、誰にだつて勿體ない位。何故あなたはさうなさるのですか。」

（マギは少し身慄する。）

「シャンドは、萬事自身でやつてるご考へるのが好きです。それが男の常。私はシャンドより六つ年うへで、醜くて、チャームがありません。あの人私が私に結婚したのは氣の毒です。だからその埋合せをしてゐるのです。」

それから二三日たつて、此同じ部屋は、チョンが、しやつくりの令嬢に打あける戀の告白を（同じ冷淡さを以て）聞いてゐる。吾々は（打合せによつて）やゝ遅くその場へ來合はす。従つて吾々は、戀の惱みの最も面白いある場面を見はづす。

此二人が決して芝居をやつてゐないごき、假令やつてゐても、氣付かないでゐるごきは、誰にも判る。チョンには、世界の不思議が、しやつくり、ごいふ形をこつて現はれたのである（戀が選ぶ手段は、なんご奇怪ではないか）。彼はシビルの前で慄へる。眼がこんなに濕つたごきは曾てない。今まで其顔が木造りのやうで、又その動作もそれご釣合つてゐた彼が、一枚の紙のやうに燃え上つた。彼には感情が溢れてゐる。チョンがこんなに戀を崇拜するのは、可愛くも思へる位。彼には、得るごきが殆んど絶望だごも思はれた種々の性質が現はれて來た、それは殆んど總ての神々しい性質を網羅してゐる、但し例の諧謔を解する力だけは例外。美しいシビルも亦、この力だけは、平生からあまり持合せてゐなかつた、そして切角の持合せも、キューピッドのから、竿によつて、たゞき落されて了つた。かやうに精神の餘裕を缺いてゐるので、二人は

恐ろしい有頂天の状態で、互に面を向つてゐる。

「私は、一つの部屋で、寒い人が火の側へよるやうに、あなたの側へよりますよ、シビルさん。一つの空家で轟く鐘のやうに、あなたは私を満たします。」

（彼女は、あの咽喉の可愛いひつか、りのために、散々な目にあつてゐる。此ひつか、りを吃逆と呼ぶのは甚だ不適切であつて、それを吃逆と書くことすら怪しからぬ、勿論そんな字が書けるのは、偉いといふ證據には成るけれども。では音の出ない音を何と形容したらよいか。かういつて見よう、シビルが何か大に言はうとする時には、其通路に小さな邪魔物が現れる。彼女はそれにつまづき、一度位るは倒れ、それでやつと飛び越える。してその間、彼女の訴へるやうな眼は、さうぞおこらないで下さい、と言ひ顔である。吾々はかういふやさしい沈黙の合ひ間合ひ間を、貴重なほつほつで書き表はしても可い、さうすればそのほつほつを、後で誰か伶俐な人が繋ぎ合せて、一種の眞珠の頸飾にするここが出来よう。）

「私はあなたに……そんなことを……いはせてはならないのですが、あ………あなたの……おつしやりかたは……本當に美しい。」

「あなたには推量が出来たでせう。」

「私は夢想し……私は恐れました……併しあなたは……スコットランドの方ですから、さうへて良いか判りませんでした。」

「シビルさん、初め何が私をあなたに引つけたか御存じ？ それはあなたの横柄な態度でした。私は思ひました『おれはあの女のために、あの横柄な態度を挫いてやらう』と。」

「私は私で思ひました……『私はあの人のち……から、を挫いて上げよう』と。」

「そして今、あなたの鳩のやうな聲が私の廻りにさまよひ、美しい着物を着たあなたの柔みは、幼い鳥を私に思はせます。（咽喉の障害は今や到底打勝ちがたいものとなり、彼女は泳いで渡らざるを得ないので、ジョンの方へ泳ぐ。）私の仕事を鼓舞するものはあなたです。」

（彼はシビルの身體に觸つても壊れないのを發見して、ぞくぞくと喜ぶ。）

「私は……本當に嬉しい……本當に得意……」

「そして、シビルさん、他の人達も私も私と同様にそのことを知つてゐます。昨日も伯爵夫人が私に言ひました、『ごんな人だつて、助なしに、そんなにごんごん立身するものではない。シャンドさん、Cherchez la femme（その女をお探しなさい）』と。」

「まあ、小母さんがそんなことを言つて！」

「私は『あなたもその女をお探さない、奥さん』と言ひました。」
 「そして小母は？」

「小母さんは『もう見つけました』と言ひましたから、私は例の如くぶつ切ら棒に『シビルさんのごいでせう』と言ひますよ、小母さんは笑ひながら行つて了ひました。」
 「笑ひながら？」

「私の言ふことは、あの人には面白く聞えると思えます。」
 (シビルは悄氣て来る。)

「若しあなたの奥さんが——本當にあの方に濟まない。奥さんが停車場へ迎へに入らしたのは、さなただよ仰有いましたかね。」

「マギの父よ兄達です。」

「その人達にも本當に濟まない。私達はもうこんなことを考へないやうにしませう。きち……がい染みたごいでです。」

「これも運命だ。シビルさん、二人の戀を公然と打明けようぢやありませんか。」

「今、あなたは、初めて私に知らしたのですもの、そんな註文は無理です。」

「假令あなたのためだからといつて、一つ私にしたくないことは、包み隠しの生涯を送る……ごいでです。」

「奥さんにまつて……何さいふ打撃でせう。」

「それはさうです。併し少くも家内は、私に愛の全く無いごいでを、以前から、知つてゐます。」

「それは、私に向つて、あなたのために、萬事を、あらゆる人を、……犠牲にせよごいの註文です。」

「過大な註文ですね。」

(チヨンは初めて謙遜になる。)

「本當に愛する婦人にまつて、それすら過大ではありません。いゝいゝ、問題になるのは私ぢやなくて、——あなたです。」

「嬉しいごいでを云つてくれますね。」

「あなたを助けるためなら、私はちつとも厭ひはしません。併し、まあ、若しそれがあなたの出世の妨ぎなるやうなら！」

「あなたごいふものが居て、私を助けてくれる以上、ごいふものがあつたつて私の出世が妨げられる筈はありません。」

「私は眼が眩みますよ、ね、あなた、私は……」

「可愛い可愛いシビル。」

「私は……まあ……此處で……」

「しつかりなさい、ね、元氣を出して。」

「……………」

(此眞珠の混亂のうちに、シビルは彼の兩腕の中へ溶けこむ。マギは丁度その時、偶然戸を開ける。併し戀に眼の眩んだ兩人は、何れもその音を聞かない。)

「ね、シビルさん、私が往來を歩くに、何時も店こいふ店の飾窓を覗いて、何があなたに一番似合ふだらうかを探すのですよ。(彼の心臓がまだ驛夫時代の畝織の中で鼓動してゐるかのやうに、不器用な恰好で、彼はポケットから鎖つきの下げ飾を取出す。彼は羞む。シビルは、その唯一の寶石であるルビの美さを褒めて、例の眞珠を澤山にこぼす。)これは私の血の一滴ですよ。」(彼女の美しい頸はさし延べられる、そして彼はそれに鎖をかける。マギは來た時と同じに靜に引さがる。併し多分戸が「畜生」を囁いたか、それこそ滑稽的に「ちく……しやう」を囁いたのであらう、シビルは天國の夢から覺める。)

「おや——戸が閉つたの？」

「前から閉つてゐますさ。」

(恐らくシビルが、戸なんごのある現實界へ再び戻つて來たのを發見して、驚いたに過ぎないのであらう。)

「何だか私には——」

「何でもありませんよ。併し人聲が聞えるやうです。多分あの人達が着いたのでせう。」

(ある可愛い本能が、シビルをしてチョンの側を立のかせる。マギは、親切にも、戸を開ける前に口を利いて、かうするだけの餘裕をシビルに與へる。)

「兄さん、それで十分よ。女中が何處へ納ふのか、知つてゐますから。(マギ入り來る。)あなた、來ましたよ、あの人達が。荷物の運びかたを手傳ふ云つて、さうしても聞かないのです。

(チョンは出て行く。マギは、お客さまがあるのに氣がついて、意外な喜びを感じる。)まあ御機嫌よう、シビルさん。ようこそ入らして下さいました。」

「奥さん、あなたがお留守なので、誠に残念に思つてゐました。」

(咽喉の障害は逃げて行つた。それはその好きな人に向つてだけ、出て來るのである。)

「ありがたう。お坐り下さいませ。」

「いえ、失禮いたしました。御親戚の方が——」

「親戚の者は、あなたが私の友人だといふことを見て、さぞ得意に思ふでせう。」

（マギがあまり無邪氣なので、反つてお客さまは居心地が悪い。シビルは話を榮えさせようとする。）

「その御親戚の方は、ロンドンが初めてですか。」

（この點についてのシビルの熱心さを満足させようとはせずに、マギは、抱き心地のよささうなその美しい一塊を、じつと眺めてゐる。）

「シビルさん、あなたは本當にお美しく結構ですね。」

（美しいその女は、さうしたわけか喜ばない。彼女は不安を増しながら質問をつゞける。）

「御親戚の一人は、今度結婚なすつたさうですね。（それでも返答がない。マギは何時までもシビルを眺め、少し身慄ひをする。） 今日スコットランドから入らしたのでですか。奥さん、さうして私をそんなに見てゐらつしやるの。それぢや、戸が實際開いたの！（マギはうなづく。） あなたはさうなさるつもり？」

「そんなことが、さうして云へますか。まあお坐りなさい、美しいお方。」

（ワリー家の者ならば一目見て最上等の椅子だといひさうなものへ、シビルがぐつたり腰を下ろす時、マギの父と兄達がチョンにつれられては入つて来る。皆シルクハットを携へてゐる。そして汽車の中でゆつくり休息した後なので、非常に生き生きとした顔付をしてゐる。彼等は、あたりをじろじろ見てゐる。彼等は、この婦人客にも、チョンにも、否マギにすらも、一寸の間、出て行つて貰つて、部屋を委しく吟味したいと思ふ。例へば、あの壁に張つてあるのは、リンネルかそれとも唯の紙か知ら。絨壇は足に感ずる通りに實際厚いのか、それとも下に厚紙が入れてあるのか。マギは、あの書棚を、蟲が食つてゐるこいふので幾分か値引をさしたのかな。此部屋には、實際以上を装ふやうなものが一つもないこ、先に吾々が云つたのは、馬鹿だつたこいふことをすら、デイギッドは発見する。彼は大理石の暖爐棚を叩いて、それがトタンのやうな音を出すので感心する。）

デイギッド 本當に巨く模造してある。マギ、素敵なお家だね。

マギ お氣に入つて嬉しいわ。お互におちかづきですか。これは私の父と兄達です、シビル姫さま。

(美しい姿は彼等の方へ傾く。アリクミデイギッドは、しつかりご足をふまへて立つてゐるが、
 チェイムズはよろめく。)

チェイムズ なに姫君だつて。マギ、偉い偉い。

アリク(言葉鋭く) おいチェイムズ! 私はあなたを覚えてゐます、姫君。

マギ お坐りなさい、お父さん。これは書齋。

(チェイムズは、注意を受けるまで、その中をきよろきよろこつて廻る。)

シビル 永い道中でお勞れでせう。

デイギッド(自分ご自分の仲間の姿をさつこ一筆に描いて) 勞れたごお仰有るのですか。さう
 いたしました。私達はすつこクッションのついた席に腰をかけてゐました。

チェイムズ(人の坐つてゐる椅子を見廻して) 此部屋の椅子には、皆クッションがついてゐるな。
 マギ チェイムズ兄さん、この有難いうちの人のお蔭で、今ぢや、私の生活は、全部クッション
 つきこ云つても可いんですよ。

(彼女はチョンの肩を愛情こめて一つき突く、シビルは、それが一種の暗號による自分へ對し
 ての電信だこは感ずるが、意味が判らない。アリクミ兄達は、マギの幸福さうな様子を見て、

自分達も良い氣持になる。)

チョン(落付かないで) さうでエリザベスは元氣かね、チェイムズ。

チェイムズ(新婚の男が細君のここを聞かれた時にふさはしい様子で、自分の鼻さきを見下ろし
 ながら) 有難う、極くたつしやです。

マギ チェイムズは、奥さんが出來たのですよ、シビルさん。

(シビルは小さな聲で祝意を表する。)

チェイムズ 有難うございます。(勇敢に) さやう、私は結婚しました。(彼はデイギッドとアリ
 クが笑つてやしないかこ二人を見る。さうが二人は笑つてゐるのだ。) 私の場合は、さつ
 捕つたのではないので、全然私の自由意志によつたのです。(彼はもう一度見る。さうが
 くだらない野郎共、まだ笑つてゐる。) お嬢さん御結婚は?

シビル 残念ながら、まだです。

デイギッド おいチェイムズ! (丁寧) 今に良縁がおありでせう。

(シビルは、本當にあなたは親切だこいふ様子を見せる。)

チョン マギ、この人達はお前に案内して貰つて自分の部屋が見たいだらう。

デイギッド 寢室ばかりでなく、家中すつかり是非拜見したいものだが。併しまづ——(彼は議長が次の辯士を促すやうな眼付で父を見る。)

アリク あ、判つてるよ。(彼は大きな袋のやうなポケットから一つの紙包を取出す。)私達が今日を忘れるこいふことは、まづないことだからね。シャンド君。

デヨン 今日?

デイギッド 君の結婚の第二週年を。態々そのために私達は來たんだ。

デエイムズ(父の手から其包を取りたさうに、指をむづむづさせながら) あれはね、マギ、三人からお祝のレースの肩かけ、本當のトバモリだよ。値段を知つたら、こてもかける勇氣はあ
るまいよ。

(肩かけは美しく擴けられ、マギはそれを見て喜びの小さな叫を揚げる。彼女は三人の贈手に
駈寄つて、まるで可愛い美人のするやうな様子で、一人一人にキスをする。三人は大に歡ぶ、
そして自分達の歡びを、三人共あまり大して違はない方法で表はす。)

アリク よせよ。

デイギッド よせよ。

デエイムズ よせよ。

デヨン 實に立派な肩かけだな。

(彼は口を利かなければよかつたのだ、餘計なこゝを云つたため、デエイムズの氣輕な頭が運
轉し出した。)

デエイムズ 立派だこも。こゝろで君はマギに何をやりましたかね。

デヨン(急に神にも人間にも見はなされて) 私が?

アリク さうだ、さうだ、一つ見せて貰ひたいものだ。

デヨン あの——私は——

(マギだけは彼を見はなさないが、切抜ける方法を考へつくこゝが出来ない。)

シビル(直ぐ側に隠れてゐた例の咽喉のひつか、りに促されて) まあ、この人は………忘れたん
でせうか。

(此言葉には可なりの皮肉が含まれてゐる。それは一種の挑戦である。そしてワイリ家の人々
は、由來家族として、挑戦に應ずるのに迅速鋭敏すぎる程である。)

マギ(投げられ手袋を取上げて) デヨンが忘れる? さう致しまして。デヨンの贈物は下け飾

ですよ、お父さん。

(咽喉のひつか、りは雲を霞。デヨンは立上る。)

アリク 下け飾？ 鎖についた例のやつだね。

(彼は齒をむいて笑ふ、思ひ起せば六十年程前に、自分とある婦人下け飾——併し今はそんなことを云つてゐる時間がない。)

マギ さやう。

デイギッド(喧嘩腰の調子を感じて、不安に襲はれながら) シヤンド君、君は一向そのことを言はなかつたね。

マギ(今こそ奮闘の秋) デヨンは羞しかつたのです、あまり贅澤だといつてあなたが非難するだらうと思つて。

デイギッド(安心して) うん、さうか。

ヂェイムズ(舌なめずりしながら) 一つ見せて貰ひたいな。

マギ(悪魔の申し子) あなた、何處へやりました？

(デヨンの口は開くが、何にも役に立つことがいへない。)

シビル(咽喉のひつか、りがまたそつ戻つて來た) 何處かへ失くしたのぢや……ないの。

(兄達はまさかこいふやうに、その言葉を繰返す。)

マギ そんなことがあるものですか。何處へ置いたんでせうね。そのテーブルぢやなくつて、ヂェイムズ兄さん。(ワイリ家の人々はその方を向く、その間にマギの手はシビル嬢の方へ差出される。デヨン、シヤンドは立會人。その手は甚だ斷乎たる手である、従つて間もなく一つの下け飾がその中へ置かれる。) あ、ありました。(アリクと兄達はそのまはりに群がり、そのの重さを量つたり、値ぶみをしたりする。)

アリク これは驚いた。その石は本ものかい、シヤンド君。

デヨン(此上もない苦い顔をし出した) さやう。

マギ(望みとあらば、デヨンを相手にしようと思つて) デヨンは、それが自分の血の一滴だ、こいふのです。

デヨン(相手になることを望んで) 實際さうですよ。

デイギッド 感心な言葉だ、シヤンド君。

マギ(憎えて) それぢや。皆私と一緒にいらつしやい。デヨンはシビルさん何か折入つての

話があるやうですから。(勇氣を回復し、デヨンに挑戦しながら)それこそあなたは、皆の前で云つた方がよいのですか。

シビル(喘ぎながら) いゑいゑ!

デヨン(顔を屹こ上げながら) さうだ、皆の前で言つた方がよい。

マギ(同様に顔を屹こ上げながら) ぢや、もう一度坐りませう。

(ワイリ家の人々は怪みながら其言葉に従ふ。)

シビル シヤンドさん、ごうか——

デヨン マギは知つてゐる。私の心配は唯マギのためだけだつた。あの人達を私が怖がつてると思つて? (大に重荷を卸したやうす) さあ、これで隠さずに言へる。

デイギッド(險悪な顔で) 何だ。ごうかしたのか、君。

デヨン(眞直にデイギッドを見て) 私はシビルさんにその下け飾を贈つたのだ、そして同時に總ての私の愛を捧げたのだ。(恐らくデュームズはあつこ叫ぶだらう、併しアリックもデイギッドの沈黙は一層恐ろしい。)

シビル(思つたより小さな聲の持主) あなたはごうするつもり?

(これはマギへ對する言葉。)

デイギッド マギはその取扱ひをおれ達に任かせるだらう。

デヨン それが私の望むところ。

(萬有の支配者達は女連を眺める。)

マギ(解釋して) 男達が吾々二人の運命を定める間、あなたと私はこの場をはづせまいふのですよ。(シビルは其旋に喜んで従はうとする、併しマギは立たうとしない。) 男は榊の樹、女は蔦。どちらがあなたに縋るのですか。

(三人の頑丈な男にぎろりこ睨まれながら、デヨンはなかなか堂々こ、シビルの手をこる。デヨンこ、シビルは、二人で世界を相手こする。)

シビル(一個のヒロイン) 私は先に躊躇しましたが、今はもう恐れませんが。此人の望むところなら、何でもします。

(デヨンが彼女に望む最初のここは、食堂で自分を待てこいふここらしい。)
それは萬事をこの人のために犠牲にすることです。さういふ意味の犠牲であるここを私は喜びます。(彼女はキスのやうに可愛い姿で、食堂へはいつて行く。)

マギ それで事はきまりました。
アリク それぢや事はきまらないと思ふ。

デイギッド きまつてたまるものか。(併しマギに對する彼の愛情は彼を平靜にする。彼の聲は、歎願の調子すらも帯びてゐる。) マギへ何もいふことはないのかい、君。

デヨン 云ひたいことは山々あるが、君の前ぢや云へない。

デイギッド(嚴然として) マギ、あつちへ行きなさい。この人をわし等に任かすが可い。

チェイムズ(もう良い加減、自分が何か云ふべき時だと思へて) さうだ、わし等に任かすが可い。

マギ いゝゑ、デイギッド兄さん、私がさうされるのか聞かして頂戴。決してごちらにも味方をしませんから。

(云つて暖爐の側に坐りながら、編物をやり始める。四人は、一昔前の石坑に於ける一夜のやうに、彼女を見まもる。)

デイギッド(怒氣を含んで) 一體これは何時から始まつたことなんだ?

デヨン 君のいふ意味が、何時からあの婦人が私の意中の人であつたといふのなら、確答は出

來ない。併しあの婦人に打あけたのは、今日が初めてだ。

マギ(考深く、そして一針も落さずに) あの婦人があなたに非常に大切に思はれ出したのは、ほんの六ヶ月位前のことでせう。初めあなたは、私と談をする時に、あの人の名を持出すのが好きでした。それは、あの人の行動について何か私が聞いた場合、それがどんな詰らぬ噂でも、私の口から聞けるさいふためでした。併しその後になつて、あの人が段々大切に思はれて来るに従つて、あなたは、あの人の名前をいふのを避けるやうになりました。

デヨン(愕いて) お前はそこに氣がついてゐたのか。

マギ(例の古風な調子で) はい。

デヨン 私は、お前のために、思切らうと思つたのだ。私は度々お前を心から痛ましく思つたのだよ。

チェイムズ 今度のことは、その證據なんだね。

マギ チェイムズ兄さん、この人は本當にさう思つてくれたんですよ。胸にさういふ考があるものだから、近頃デヨンが私を大變悲しさに眺めるのを、度々見受けました。そして、今までしたこともないやうな一寸した親切を、度々私にしてくれました。

デヨン お前はそのこも氣付いてゐたのか。

マギ はい。

デイギッド(自分を制しながら) まあ、そんなこは今更いふ必要はない。何しろ有難い、事が濟んで了つて。

アリク(非常に年をこつた顔付で) さうだ、さうだ、それは有難いこだ。

デヨン そんなこを云つたつて駄目。事は濟んだのでなくて、これから續いて行くのだ。

デイギッド おいシャンド、君には悪魔が乗り移つてゐるな。

デヨン(今のこころ不幸な男) さうもさうらしい。併し悪魔が私をそんなに無難作に征服した

こ思ひますか、デイギッド君。

デイルムズ おい、貴様を擲倒してやりたい位だ。

マギ あなたの方の誰にだつて、デヨンは擲倒せませんよ。

デイギッド(癪に障つて) マギ、靜に。お前はまるでこの男の味方をしてゐるやうだ。

マギ この人がちやうど一番私を必要とする時に、さうしてこの人を見棄てられませう。

デイギッド デヨンの方がお前を見棄てようとしてゐるのぢやないか。

デヨン さうだ、それに違ひない。

アリク 君の結婚の誓はさうしたのだ。それに毎日曜の教會通ひは？

デイルムズ(辛辣に皮肉つて) それに貴様の倫理哲學の懸賞論文は？

デヨン(やけになつて) 皆何處かへ飛んで行つて了つた。

デイギッド 君は、議席を退かなければならんこは、承知だらうね。

デヨン(その下唇をうんと突出して) 議席は何百こあるが、デヨン、シャンドはたつた一人しかない。

マギ(併しその言葉は吾々に聞えない) あの言ひやうが、私には好きなんだ。

デイギッド(部屋の中で一番しつかりした男) おい、考へて見るが、君に比べるこわしは年

長者だ、そして永らく君を自慢の種にしてゐたのだ。今度君は、八年前よりも一層大きな障害を戦ひながら、新奇まき直しをやるわけだ。

デヨン 私は八年前よりも一層良い頭で事を始めるわけだ。

アリク(かういへば、耳が痛いだらうと望んで) あの女は財産を手に入れるのだらうよ、デイギッド。

デジョン シビルは乞食同然だ。

デエイムズ(自分の細君のお母さんのことを恐らく考へたのであらう) シビルの親戚へ行つて、すつかり話さう。さうすれば皆で留めるだらう。

デジョン シビルは丁年だ。

デエイムズ 皆であの女を遠くへやるだらう。

デジョン わしは跟を追かけて、女を奪つて来るよ。

アリク 君の前途は――

デジョン(流石はデジョンだ) 前途なんか、そ喰へだ。わしが暗礁へ乗上げてゐるのを、自分で知らない、こ思つてるのか。男一匹の熱情なんていふものが、君や、君や、又君なんか判つてたまるものか。わしは戦ふだけ戦つて、敗れたんだ。わしなんか難破船だらうが、船が難破する時、喚いたつて何になる。皆、静かにするが、(彼は大股に食堂へ入る。そこで時々床をあちこち歩くのが見える。)

デイギッド(上着を脱いで一働きやりたさうな様子に見えるデエイムズに) 放つて置くさ。さうしたつて、あいつは動きはしない。(苦い悟り)あの男のいふのは本當だ、少くもおれだけ

でいふさ。男一匹の熱情なんていふものが、おれにどれだけ判つてゐるだらう。おれは自分の知らないものにぶつ突かつてゐるのだ。

アリク それはたちの悪いものだ。

デイギッド さうかも知れないが、何か偉大なものだ。

デエイムズ それはあの忌々しいチャームだ。

マギ(尙煖爐の側にゐる) それですよ。兄さん、あなたがエリザベスを好きになつたのは、何のためでした。

デエイムズ(きまり悪さうに) さあ何のためだらうかね。

マギ あの人のチャームですよ。

デイギッド なに、エリザベスのチャームだ、へん!

デエイムズ(喧嘩腰で) さやうさ、エリザベスのチャームに違ひない。

マギ あの人は、デエイムズにこつては、チャームがあつたのです。

(これが幾分か彼等仲間の結合力を弱める。マギは、顔に奇妙なほ、笑をちらつかせながら、一人から一人へこ行く。)

デイギッド マギ、支度をおし、この家を引上げよう。

マギ(彼の親切な頭を撫でながら) 私は駄目よ。

(三人が知つてゐて、然かも忘れてゐたマギの一面が、此言葉に現はれる。三人一齊に元氣を回復する。)

デイギッド ぢやお前は屈服しないのだね。

(ほ、笑みはちらついて、それから消える。)

マギ どうか皆二階へ行つて、私に腕試しをさせて下さい。

デイムズ お前の腕だめし?

アリク お前のその言葉で、わしは生返つたやうだ。

デイムズ わしも生返つたやうだ。

(デイギッドは何もいはず。彼はマギの肩を掴む、その掴みやうが、彼の心持を説明する。)

マギ 兄さん、私出来るなら、あの人を救ひませう。

デイギッド お前をこんな目に合せたのに、救つてやるだけの値打があるかい。

マギ 兄さん、あなたは馬鹿ね。それが何の關係があるの。

(三人が行つて了ふに、ジョンが食堂の戸口へ来る。彼の胸中には、マギを憐む心が大に湧き起つてゐるが、編物がまだマギの手にあるのを見るに、この憐みの心は少々下火にならざるを得ない。誰だつてそんなに直に他のものにお株を奪はれたくないから。シビルは後から来る、そして二人は、せつせと動く編針をじつと眺めてゐる。)

マギ(お客様があるのに氣がついて) あなた、おはいりなさいな。お坐りなさい、シビルさん、どうぞお氣樂に。さき程は御迷惑をかけたね。

(マギは要するに二人よりも僅か四五年の年長者に過ぎなかつた、そして殆んどそれ程の歳にも見えないのだが、然かも今の口振りは、靴の中に住んでゐたあの小さな婆さんが、自分の澤山な子供達に言葉をかける時は、こんな風でもあらうかと思はれるのであつた。)

ジョン 私はお前を實に氣の毒に思ふ。

シビル(ジョンの手が握れるなら、もつと勇敢であるだらうが) 私もさう思ひます。

マギ(慰め顔に) それやさうでせうよ。併しそんなことを云つたつて、今更仕方がありませんから、三人で此問題を事務的に相談してはさうです。さうしても悪くはありませんが。

(シビルは懸念顔、併しジョンは、その事務的さいふ言葉に必死になつて緘付く。)

デヨン シビルが、私と私の仕事にまつて、どんなインスピレーションを與へるか、ほんこに
マギ、お前に判れば可いんだが。

シビル ほんこに奥さん、私の考へるのは、唯そのこまばかりです。

マギ それは結構。さうなくちやありません。

シビル(少し口を出し過ぎて) 奥さん、あなたは誠に聞きわけがよくて、本當に有難うござい
ます。

マギ それがスコットランド風です。ところで、ね、あなた、あなたは何時私のところを立退く
考へでした。

(多分これもスコットランド風なんだらう、併しシビルは英國人だ、そしてシビルがハツと驚く
その驚き方からいふに、何かその足指の上へ落ちたのぢやないかと思はれるやうだ。)

デヨン(何も物の落ちる音を聞かなかつた) 愈々破裂の事がきまれば、早けれや早いだけ可い
だらう。(彼の言葉は、デュームズが、細君の様子を聞かれた時のやうな調子になる。) マギ、
お前の都合次第で。

マギ(す早く勘定をして) ミうしたつて水曜より前には出来ませぬ。水曜は洗濯物の歸つて

來る日ですから。

(シビルは再び足指を引込めなくちやならない。)

デヨン そして水曜は議會の閉會する日だ。(呻き聲を押殺しながら) 議會に顔を出すのもそれ
が最後だらう。

シビル(兩腕がデヨンを抱きたさうにむづつきながら) いる、いる、そんなこまを言はずに置
いて下さい。

マギ(氣の毒さうに二人を見渡しながら) ね、あなた、あなたは、シビルさんの次には、議會
が好きでせう。あなたがリーズの演説を濟ますまで、待てないのは残念ね。私と手を切れば、
エナブルズさんも、リーの演説を、あなたにさせないでせう。

デヨン 實に絶好の機會なんだがね。仕方がない、諦めるさ。

マギ 其大會も今から一ヶ月足らずです。その演説を非常に立派にやつて、皆の人に、あなた
を失ふこまを、残念に思はせては如何です。

デヨン(得意になつて) 私も實はさうしたいと思つてゐたのだ。

シビル(健氣な信頼を示して) 又屹度さう出來た筈です。

マギ ぢや、事務的に一つ事がきまつたわけです。

ジョン(頗る有効に其想像力を働かせながら) 併し私がこのまゝ此處に居るのぢや、お前に對して濟まないからな。

マギ あなたの出世が問題となつてゐる時に、私自身のこゝをかれこれいふなきと思つて貰つては間違ひ。一ヶ月位は、私から見れば直ぐたちます。中々澤山荷造りをしなければなりませんもの。

ジョン それは天晴な心がけだが、私にはその親切を受ける資格がない、お前にそんなこゝをさせちや濟まない。

マギ シビルさん、さあ今こそ、あなたがその神來の妙案をお出しになる時ですよ。

シビル(直ぐに乘出す) さやう、さやう——併しごうしませうね。

(此瞬間に、二人が二人共、マギの助を求めるのは妙だ。)

マギ(自分の胸に先からそれを繰返してゐた) ぎうでせう、かうなすつては。私はこのまゝ、此處に、父や兄達と一緒に止まつてゐますから、あなたは何處かへ行つて、演説に全力を注いではいけませんか。

シビル 成程。

ジョン 悪くはないね。(思ひやり深く)お前がたの誰にも分れて。けれども一體何處へ行つたもんだらう。

シビル(直ぐに乘り出す) まあ、何處へね。

マギ 判つてゐます。

(彼女は、二人が止める隙もあらせず、ある電話の番號を呼出してさふ。)

ジョン(威儀を正して) そんなに急ぐこゝにはないぢやないか。

マギ もしもし、あなたラムズ、ホテル? ド、ラ、ブリエール伯爵夫人を呼出して下さいな。

シビル(悄氣て) 小母に何の御用なの?

マギ あの^{かた}方の田舎の別荘は、丁度誂へ向きでせう。あの方はシャンドミ私を招待なすつたのです。

ジョン それはさうだが併し——

マギ(理屈で責めて) それにエナブルズさんも其處へ見える筈です。あなたが、三週間、毎日あの人と顔を合せてゐれば、それだけの印象をあの人に與へることが出来るか、考へて御覽

なさい。

チヨン お前の言ふところに一理がある。

マギ もしもあなた、伯爵夫人？ 私マギ、シヤンド。

シビル あの人に云はないで下さいね、あの――

マギ いひはしません。(伯爵夫人に向つて)エ、至極達者で、元氣の上なしです。さやう、さやう。そんなわけだね、うちの者はロンドンが初めてなので、方々見物につれて廻はらなければならぬから、私は駄目です。併しシヤンドが獨りでお邪魔に上つても可いでせう。ね、いけない？

チヨン(流石に體面を重んじて) 向ふがそんなに乘氣でなけれや、行かないよ。

マギ 向ふは大に乘氣なんです。奥さん、そのうち私も一日位は様子を見に行つてもよろしい。

エ、屹度です。(チヨンに向ひ)夫人は大喜びだ云つてゐます。

チヨン(思ひありけに) お前がこんなことをするのは、私がシビルの側を二三週間離れてゐるに、そのために幾分でも形勢が變ると思つてゐるためぢやなからうね。それや勿論、お前が二人の間を裂かうとするのは無理もないが――

マギ(毒々しく) あなた方の間を裂いて、さうしようのかうしようのとは、考へてゐません。

チヨン 世間の細君のやりさうなごことだが。

マギ 私は他の細君のやうにしないご約束しました。

チヨン(強い人としての自分の位置が保證されたので) では承諾するご夫人へ傳へてくれたまへ。(彼はぶらりご食堂へ歸つて行く。)

シビル 私は思ふのですが――(何を思ふのか、はつきりしてゐない)――あのあなたは本當に偉いわね。

マギ チヨンがあなたを呼んでゐるのぢやなくて？

シビル さう？(彼女は食堂のチヨンの側へ行くごことを喜ぶ。)

マギ 伯爵夫人、一寸の間、切らないで下さい――(彼女は唯一人である、そして今まで自分を制してゐたのが、もう殆んど制し切れなくなる。彼女は感動的に慄へて、苦しきうな小さな叫び聲を揚げる。彼女がしたいご思ふ或る事がある、そして彼女はそれをするのが厭やなのであるが、思ひ切つて實行する。)もしも奥さん。もう一つお願があるのですがね。さうかシビルさんをも招いて上げて下さい。さうです、チヨンの居る間ずつこ。いえ、私、氣が

狂つてはるません。私に大した恩を施すと思つて。さやう、のつぴきならぬ理由があるのですが、その説明はお断りします。エ、いくらでも私の風變りを笑つて下さい、その替り承諾して下さい。さうぞ、さうぞ、さうぞ。ありがたう、ありがたう、さよなら。

(彼女は今や自分を制するここが出来、そして二度に此自制力を滑り落すまいと決心する。二人がもう一度出て来る時、此決心の据つた女は、手紙を書いてゐる。)

ヂヨン また電話のかゝる音を聞いたやうだが。

マギ(せつせし書いてゐる手紙から眼を擧げて) 伯爵夫人からでした。夫人は、シビルさんをも同時に別荘へ招待したい、さ仰有います。

シビル まあ私を。

ヂヨン シビルを招待する？ ぢや勿論私は行かないよ。

マギ(かういふ遠慮深さに驚いたやうな顔付で) 構はないぢやありませんか。演説以外に考へるここがあるわけぢやなし。(マギが小な悪魔だといふことは、折紙つきだ。)それに、シビルさんがその場に居合せて、あなたを助けたり、感激を與へたりすれば、まあ何といふ立派な演説が出来るところでせう。

ヂヨン(すつかり乗氣になつて) マギ、お前は本當に度量があるよ。

シビル(到さう得心がいつて) 本當にさうですわね。

ヂヨン それにお前は變つてゐるよ。こんな場合に臨んで、坐つて手紙を書く女が幾たりあるだらう。

マギ それはあなたへの手紙です。

ヂヨン 私へ？

マギ 書いて了つたらあなたへ上げます、併し伯爵夫人のミころのあなたの滞在が、終を告げるまで、開けて下さいませぬ。

ヂヨン 用向きは何かね。

マギ 事務的のこです。

シビル(可なり力のない聲で) 事務的？ (シビルは今日此言葉をあまり度々聞いたので、それがスコットランド風の響を帯び始める。自分はマギを好くのが本當だとは感ずるが、併しマギもつと離れてゐたら、一層好きになれるだらうと思ふ。彼女は、自分の心臓が醫者達の心配の種になつてゐることを明かにして、別れの言葉を囁きながら立去る。其跟からついて

行くヂヨンは戸口で立止まる。

ヂヨン(妻に對し一種奇妙な讚嘆を感じながら) マギ、お前を好きになれ、ばい、んだがな。
 マギ(心から) 本當にさうだとい、んですがね。

(ヂヨンは立去り、マギは再び手紙を書き出す。靴下が手近かに横つてゐるのを、彼女は床へ突落す。彼女は一時靴下と縁を切る。)

四

人間の最大發明は芝刈機械である。總ての鳥は、このことを知つてゐる。だからこそ、それが運轉してゐない時、何時も一匹位は、其把手の上にとまつて、頭をかしげ、ごうしてあの氣持のよいカラカラといふ音が出るか、怪んでゐるのだ。その秘密が判れば、鳥共は鳴きかたを變へるだらう。さういふわけで、諸君は、朝極く早く、芝刈機械の音を聞くやうに思つたところが、時々あるに相違ない、そして恐らく寢卷のまゝで、格子窓から覗いて、誰がそんなに早くから起きてゐるのか、怪んだであらう。ところがそれは、實は鳥共が、その音を覺えようと思つて稽古をしてゐるのであつた。

併しこの焼けつくやうな朝には、時は正午で、そのカラカラの音を立て、ゐるのは、エナブルズ氏であるところが、誰の眼にも判かる。彼は麻の服を着て、上着を脱いでゐる(そして鳥はその上着の上に止まつてゐる)、そして彼は愉快氣に顔の汗を拭きながら、伯爵夫人の芝生を歩き戻りしてゐる。吾々は弓形張出窓を通して彼を見る。その窓は思切り開いてあるので、薔薇の

花がその中へ頭を突込んで、窓が夜に閉まるのを妨げてゐるかのやう。又幾つかの卓には、他の薔薇の花が、腕に幾抱へこいふほご飾つてあるので、何處までが部屋で、何處からが花園であるか、一寸見當がつかかねる位。

伯爵夫人の奇麗な喜劇的客間(こいふのは、夫人は英國に居る間は、喜劇趣味を好むから)には、デヨン、シヤンドが女主人(おんなあかじ)と共に、互に遠く距つた椅子に坐つてゐる。デヨンは麻の服でもなく、フランネルの服でもなく、膝きりズボンですらもない。彼は英國人の野外の服装を羨むけれども、あまりお國風の人間なために、それを真似ることも出来ない。彼はちやうど故郷で、短袴の形で着るだらう通りのツキード織を着てゐる。こころで多くの他のスコットランド人と同様、デヨンが生れて初めて短袴を見たのは、英國人が着てゐるそれであつた。それから考へても、確かに短袴(せんとこ)といふものは、ゴルフと同じく、英國人を北の國へ引つけるためだけに、發明されたものだ。デヨンは今、何もしてゐない。これもまたスコットランド人の得手ではない。従つて彼は大分まいつて、しかも面をしてゐる。伯爵夫人は既にカルタの獨遊びを始めて、デヨンの永い沈黙が、あまり悪くもなさうに、折々彼の方を見てにやりと笑ふ。遂に彼女は口を開く。

「シヤンドさん、こんな美しいお天氣に、お婆さんのお相手に、此處へあなたを引止めて置くのは、さうも濟まないやうですね。」

「私はあなたのお相手をしてゐる積りではありませんよ。」

「併し事實私のお相手ですよ。」

「さうしてだか、聞きたいものですね。」

(彼女は例の通り不躰に肩を聳かす。間もなくデヨンの口から、もう一つ太い溜息がもれる。)

「そらまた！ 何故船遊びに出かけないの。」

「成程さうしても可いですね。」

「そしてシビルをつれて行けば。(彼はまた腰を却す。) いけない？」

「私はシビルを二十遍も船遊びに行きました。」

「ぢやフェアロウの森へ遠足につれて行つたら。」

「先週二度も二人で出かけました。」

「あそこには、村の人が『戀の細道』をいつてる突當のこころに、粹(いと)にじめついた小さな亭(ちん)がありますよ。」

「でも毎日に行けませんからね。何か可笑しいところがありますか。」

「私笑ひまして？ 私は前後の様子をフランス語に翻譯してゐたのでせう。」

(恐らく芝刈機械の音楽が、デヨンの氣分に向かないのであらう、彼はもう一つの部屋へ立去る。エナブルズ氏は勞働の手を休めて、一人の婦人を歓迎する。その婦人は今芝生に現はれた、そしてそれはマギである。彼女は非常にきり、こした身なり、婦人のうちで一番氣持のよい、タイプスト勢の一人かと思はれる程である、そして小な鞆を携へてゐる。彼女は窓から部屋へは入り、伯爵夫人の眼を兩手で覆ふ。伯爵夫人はいふ。)

「此手は、こにかく、しつかりした手です。」

「それにあまり白くもなく、私の丈の割合には大柄です。さあ、あて、御覽。」

(伯爵夫人はあてる、そして其兩手を、大切なもの、やうに自分の手に握る。夫人はマギの帽子を脱がせる、マギが飛び去るのを防ぐやうに。)

「まあ、ひじい人ね、來るのを知らせもしないで。」

「不意打をしようと思つたの。ステーションから歩いて來ましたわ。(一時マギはシビルの咽喉のつかへを借りたやう。)

御機嫌よくつて——エ——皆さん？」

「デヨンさんは至極達者です。併しね、すつかり憎氣てるるやうですよ。」

(この悲報はマギをすつかり憎氣させるやうにも見えない。伯爵夫人は不思議に思ふ、彼女は自分で發見した事以外に、何も事情を知らないから。)

「まあ薄情な、さうしてあなた、それを聞いて嬉しさうな顔をするの。」

「それは云へません。」

「本當に私、あなたを捕へてこづいてやりたい位だわ。この通り私の家を數日間もあなたの勝手にさせてさ、さうせ何かお國風の惡戯のためでせうがね、それに一向譯をいはないなんて。いへません」

「ぢや、ようござんす。ですがね一つあなたの所謂厭なことを聞かせて上げます。(伯爵夫人は、レモンスコッシの泡立つコップも見られるものをさし揚げて、エナブルズ氏を部屋へおびきよせる。) お氣の毒さま、これはたゞの花入れです。あなたデヨンさんの演説をさう思ふか、奥さんへ話して上げて下さいね。」

(エナブルズ氏は女主人を眼で非難する。)

「エ——ア——その話はシャンド君が自分でしたいでせう。私は園丁に約束しましたから——」

向ふでも當あてにしてゐますから——失敬します——」

「是非云つてお上げなさい。」

「ねエナブルズさん、さうぞ云つて下さい。」

「御主人は、此處で演説を書いてゐられました、そして御自分からの希望で、三日前に私にそれを讀んでお聞せになつた。今度は重大な場合であるわけです。ミころですな、目下我黨には十人ばかりの少壯が居つて、皆ある一寸した閣員の席を占める資格があるのです。(彼は芝刈機械を懐しさうに眺めるが、芝刈機械は彼を助ける何の返事もよこさない)。ミころでシヤンド君がその一人なのですから、私は、此演説に於てあの人が、自分の力量を示してくれ、ば可いと思つたのです。」

「で、示さなかつたのですか。」

(エナブルズ氏が、政治にたづさはらなかつたらと思ふのは、これが初めてではない。)

「示してはくれましたがね。」

(伯爵夫人)「あなた、その演説の何處が悪いの。」

「何處も悪くはない——だからあのまゝやつても構はない。力のある思慮をこらした演説で、

立派な腕のある人でなければ、さても書けないやうな演説だ。併し少しもこれといふ特色がない——以前私のやうな古狸に、おいシヤンドミ云つて肩を叩きたいやうな氣分にならせた、あの一寸した妙味が全くない。(伯爵夫人は口を曲げる、併しマギはそれに注意することを拒む)。中々元氣よくさし進むけれども、いはば義足で進むやうなものさ。他の連中に負けない位にはやつてゐるでせう。併し他の連中には、親譲りの種々な長所があるから、シヤンド君はあの人達よりも良くやらなければならない。」

「成程、さうでございますね。」

「奥さん、私はシヤンド君が氣に入つてゐるので、残念に思ひます。あの人の立身の眼を見るに、若しこの私が赤帽から出發したなら、今でも矢張り「ハイさうぞ」ミ聲を張上げてゐるんじゃないかと思ひます。」

(マギはありさうなこころだと思ふが、別に重要なこころは考へない。)

「エナブルズさん、お話で思ひましたが、主人は、あなたが初めての演説に感心なさらないといふこと、それで演説の書直しをやつてゐるといふことを、手紙で確に云つてよこしました。」

(伯爵夫人の眼は本當に丸くなる。)

「奥さん、私は一向そんなことを聞きませんでした。(エナブルズはその賢い頭を振る。) まあ何しろ、あの様子ではね——」(彼は依然として義足の音を聞く。)

「併しあなた御自身、シャンドの二度目の考は、時とするに初めの比べて、非常な進歩だ。おつしやいましたね。」

(伯爵夫人は此あばずれ女の加勢をする。)

「私、あなたがさう云つたのを覚えてゐますよ。」

「さやう、さういふ感もしました。(丁寧) まあ、シャンド君が何か見せようといふなら——まづそれまでは——」

(彼は芝生へ戻る、デヨンの葬式のお伴を逃れて喜ぶ人のやうに。伯爵夫人は芝刈機械の——ちつとも義足らしくない——音を聞いて初めて口を開く。)

「ピン子さん、今度はさういふ狂言をかかうとするの。そんな書直の演説のないことは、私と同様あなたも御存じだが。」

(マギの口は屹も結ぶ。)

「いえ、存じません。」

「ちや、愈々私に決闘をしようといふの。」

(伯爵夫人はベルを鳴らす、マギの疚しい心はぎきつく。)

「なぜベルを鳴らすのです。」

「私は決闘を挑まれたのですから、武器を選択する権利があります。私は御主人を呼びにやつて、果してシャンドさんがそんな演説を書いたかどうか聞きませう。それから後で、多分あなたの方から、シャンドさん二人でそれを書く間、席をはづしてくれお頼みでせう。」

(マギは両手をふり絞る。)

「それはあなたの考へ違ひです。併しさうかやめて下さい。」

「さういはれるに、私は益々好奇心がつのるばかりです、そしてかゝりつけの醫者は、私が何でも聞きたいことを聞かないに病氣になるにひまです。(伯爵夫人は活劇の女主人公といふ身振り) さあ、さあ、マギ、シャンド、参つたといつてカルタを投出すか、それとも——(夫人は自分が何時も相手のこゝめを刺す女だといふしぐさをする。マギは悄然としてその鞆から一巻の紙をこり出す。) はつきりいふにそれは何です。」

(答はかすかに軋る位の音。)

「ヂヨンの演説。」

「まああなたが自分で書いたの！」

（マギは勿論憤慨する。）

「タイプで打つたの」

「あなたは、シャンドさんが獨りで書いた演説は不十分だらうと察して、その替りにこれを自分で用意したのでせう。」

「いゝゑ、さう致しまして。これはシャンドがうちへ残して置いた演説の草稿です。たゞそれだけのこと。」

「あなたの手で一寸した變更を加へてでせう、屹度。それが嘘だこいへますか。」

（マギが憤慨するに不思議はない。彼女はそれ相當のツンとした様子で、ヂヨンの演説を鞆の中へ再び入れる。）

「伯爵夫人、そんな當こすりはあなたにも似合はないこと。失禮ながらシャンドは何處に居ますか。」

（伯爵夫人は古風な會釋をする。）

「畏れながらお殿様はオランダ園に居られませう。ちやんこね、あなたの腹が見えすいてよ。」

あなたは、シャンドさんにその演説を見せるのでなくて、あの人にもう一つ演説を書かせるのです、さうするに何さかした拍子に、あなたの附^つたしが、皆その中へ這入つてしまひます。憚りながら、ド、ラ、ブリエール伯爵夫人ほぎの海千山千を、欺せるなんて思つたら間違ひだよ。」

（かやうな非難に對して、善良な細君の與へる返答はたつた一つしかない。忽ち伯爵夫人は獨り残されて臍を噛む。間もなく召使が現はれる。召使こいふ者が、如何に來たり去つたりするかは、諸君も御承知。）

「奥さま、御召で？」

「呼んだかね。お、さうさう、併し何の用だつね。（此男は最近田舎から來たばかり、従つて夫人の難儀を救ふことは出來ない。かうして困つてゐる時、彼女の眼は、ふと鞆に落ちる。不幸にして彼女は、すつかりあばずれてゐるので、耻しいふものを感じない。彼女は、まだ自分に武器の選擇權があるを考へてゐる。彼女は鞆から演説を取出して、それを召使に與へる。）さうぞこれをエナブルズさんへ上げてね、シャンドさんからだま云つておくれ。（トマス

——併し結局は、多分彼をヂヨンと呼ぶやうになるだらうが——は、その小爆彈を携へて去

る。マギが歸つて来て見るに、伯爵夫人は、妨げられたカルタの獨遊びを又始めてゐる。シヤンドさんが見つからない？」

(總ての勇氣はマギの顔から失くなつてゐる。)

「シヤンドに遇ひませんでしたけれど、聲を聞きました。あの女がシヤンドと一緒にゐます。二人は此處へ来るだらうと思ひます。」

(伯爵夫人は再び急にやさしくなる。)

「それはシビルのことか？ あの女を追拂ひませうか。」

「いゝゑ、あの女にも、此處にゐて貰ひたいのです。愈々判りますから。」

(伯爵夫人は小さなマギをくるり自分の方へむける。)

「判るつて何が？」

「シヤンドの顔を見さへすれば、直ぐ判ります。」

(馥郁たる香に送られて、美しいシビルがはいつて来る、彼女は乳しほりの腰掛のやうに小氣味がよい。彼女は稍驚いてマギに挨拶する。)

マギ シビルさん御機嫌如何。その着物を召してゐらつしやるに本當に美しくお見えます。

(シビルは居心地悪るさうに、絹ずれをさせる。あなたを見るのは眼の正月です。)

シビル さうぞそんなに見ないで下さい。

(吾々はシビルの着物を説明しようか。シビルがその着物を着てゐるところは、まるで、當然摘取られるものゝ豫期してゐる大きな苺のやうであるが。それとも、チヨンの来るのを見張つてゐる方がやさしいだらうか。吾々はチヨンを見張つてゐよう。)

チヨン おや、マギかい。来るさいふこをちつとも知らせなかつたね。

(いや、吾々はマギを観察しよう。マギがチヨンの顔を見るや否や、何か重要なことが判る筈だから。)

マギ(自分の見たものに不満足ではない) いゝゑ、あなた、これは不意打なんです。一寸お暇乞に駈つけたまで。

(この言葉に、チヨンの顔はがっかりする、併しマギはそれを見て厭やには思はない様子。)

シビル(スコットランド式の見苦しい角つき合ひが、また始まるものゝ豫想して) お暇乞ひ？

伯爵夫人(愈々始まるか胸躍らせて) 誰への暇乞ひなの？

シビル(咽喉の障害に見放されて。その障害は戀の細道でやんちや小僧達に戯れてゐることにだ

らう。小母さん、さうぞ此場をはづして下さいね。

伯爵夫人 さうしてはづせるものかね。これあ、あんまり面白くなつて来たもの。

マギ さうせ間もなくお判りになることでも、伯爵夫人にお知らせしても差支はありませんまい。

デヨン それはさうだ。(シビルは、デヨンも亦事務的にならうとするのを見て、氣落ちする。) マギ 事柄は極く簡單です。つまりね、シャンドミシビルさんが戀に落ちたんです、そしてリーヅの演説會が終り次第、出かけようといふのです。

(伯爵夫人は、あまりにも突如として、スコットランドにその種々な魅力を胸に感ずる。)

伯爵夫人 Mon Dieu! (これはしたり)

マギ 私の云ひかたは間違つてゐますまいね、あなた。

デヨン 一面からいふに間違つてはゐない。併し私はリーヅの演説會に出席はしないつもり。私の演説はうけが悪いから。(不思議な謙遜さを示して)その演説には何處か變なところがあつたのだ。

伯爵夫人 あなたが、そんなことをおつしやることは、意外ですね。

デヨン(同じく不思議に思ひながら) 自分でも意外です。私はそれを出世演説にするつもりで

したが、さうしたわけか、私の筆から魔力が失くなつたやうです。

伯爵夫人 そしてその理由が判りませんか?

デヨン 全く不思議です。私の頭は、常にも増して明晰でしたのに。

伯爵夫人 シビル、お前が力を貸して上げることも出来た筈だが。

シビル(ひきくむつりこした様子で) 力を貸して上げましたわ。

伯爵夫人 だつてシビルは、あなたにまつて、大したインスピレイションではなかつたの?

デヨン(勇敢にシビルの側へ近づきながら) シビルは私と一緒に、其演説のために骨身を惜ま

ず働いてくれました。

伯爵夫人 妙ね。(尙また、意地悪く、事務的になりながら) ぢや、もう何も此處に用事はな

いのですね。シビル、馬車を呼びにやらうかね。

シビル(心の底から叫んで) 小母さん、後生ですから、座をはづして下さい。

伯爵夫人 シャンドさん、あなたが早く出かけたのは、無理ぢやありませんわね。

デヨン(悄然) 私は廿四日まで待つて、マギに約束しました。私は言葉を反古にはしませ

ん。

マギ 併しその約束を許して上げます。今からいらしてもよろしい。

(チヨンはシビルを見、シビルはチヨンを見る、そして咽喉のつかへが丁度良い具合に其處へ來あはせて、二人の顔を覗く。)

シビル(吾々が結局は皆、達しなければならぬ事務的態度を、彼女は探り求めながら) シャンドさんは、先づあなたの身の身を適當に始末しなければなりませんまい。私は是非それをお願ひします。

マギ(まるで牝雞のやうに想像力がない) シビルさん有難う、併し私はすっかり身のまはりの始末をしました。

チヨン(むつこして) マギ、それはおれのやる仕事だつたのに。

マギ(いつまでも牝雞に物を云はせて) つまりね、兄さん達は、もうこの上、向ふの商買を放つて遊んでゐるわけにいくまいさういふので、あなたさへ御迷惑でなければ、私は水曜日の夜行で、兄さん達と一緒にスコットランドへ旅をしても可いと思ふのです。

シビル あの——私は——。本當にあなたの物の云ひやうつたら——!

チヨン 今日はまだ廿一日だ。

マギ 私の物はすつかり荷造りが出来ました。シビルさん、家はちやんこなつてゐるつもりです。真空掃除器を用ゐさせました。シート類と銀食器の鍵を上げませう、その鞆の中にありますから。二階へ行く途中のカーペットは大分すり切れてゐますが——

シビル さうぞ、その位でやめて下さい。

マギ 食堂の天井は、ペンキを塗り變へるに良くなるでせうし——

シビル(小形四號の足をふみ鳴らして) あなたこの人を止めさせられない?

チヨン(慰め顔に) マギに悪氣はないのだ。おいマギ、人生に對するお前の眼界は、さういふもので限られてゐるのだから、お前がそんなものを大切に思ふのは無理もないが、一體さういふ話は私の耳に不愉快だよ。

マギ さう?

チヨン さうしてお前は、そんなに直ぐにも行かうとするのか。

マギ 私はあなたの邪魔をしない約束しました。

チヨン(男らしく) そんなに急ぐには及ばないよ。まだ三日間があるからね。(フランス人は

吾々英國人とは非常に變つてゐるから、此時伯爵夫人が何故大きな聲で笑つたか、到底吾々にその理由が判らないだらう。) 伯爵夫人には、ほんの冗談に聞えるのだ。

伯爵夫人 あなたには中々冗談どころではないやうですね。ね、シビルや、お前この人を手放すつもり?

シビル(嚇まなつて) この人を手放す? それや望み次第で。あなたそれがお望みですか。

ジョン(雄々しく) いや私はこのまゝ進みたい。(何かが彼の咽喉にひつかかつた様子。若しかするにそれは例のひつかかりが、一時的に住みこまうとするのだらう。) それは私の唯一の願。お前が私と一緒に來てくれるなら、決して後悔させないだけのこみを、男の力に出来る限り、やるつもりだ。

(勇敢な男の勝利。)

マギ(のほせ上つた二人を、ドシリミ地面へ引却す) では私は、水曜の手筈をしてもよろしいの?

シビル(伯爵夫人の保護を求めながら) いゝゑ、いけません。小母さん、私こんなこみはもうやめます。シャンドさん、あなたには大變お氣の毒ですがね、今になつて見ますこみ——私に

は、向つて行くだけの勇氣がありません——

(此瞬間彼女が向つて行くだけの勇氣のあるものは、寢椅子の枕に對してだけ。)

伯爵夫人(ジョンのほつこした太い溜息を見つけて) シャンドさん、まあ、あなたもこれで安心ですね。

マギ あなたシビルさんをもう愛さないの? さあ、てきばきこ片付けなさい。

シビル(枕に向ひ) こにかく私はあの人が厭になりました。いゝゑ、聞苦しくても本當のこみを打あげた方がよろしい。私は自分に愛憎がつかます。私はこのこみで眼もつぶれるほご泣きました——私はもつこ違つた女だと思つてゐましたから。併し私はあの人に鑿きが來てゐます。あの人は——本當に退屈な方だと思ひます。

ジョン(その顔を輝しながら) ぢや君は、屹度さういふ風に、私のこみを考へ出したんだね?

シビル お氣の毒さま。(心の底から) 併し本當です——大丈夫——受合ひ。

ジョン やれやれ、こいつあ儲けもんだ。

伯爵夫人 お二人共お目出たう。

(シビルは逃げて行く。やがて時機到來して、彼女は燦爛たる銀の衣をつけて、首尾よく結婚

したが、その銀の衣は、後で寝臺覆ひに用ゐられた。

マギ ね、あなた、私の手紙をまだ讀まない？

チョン まだ讀まないよ。

伯爵夫人(拜むやうに) 教へて頂戴ね、どんな可愛い手紙をいふのか。

マギ それは、あの人がロンドンを立つ前に、私があの人に書いて上げた手紙です。それを封のまゝで上げて、此別荘の滞在が終るまでは、開けてならないといつたのです。

チョン(手がそのポケットの方へさまよひながら) 今讀むのかね。

マギ この人が居てはいけません。伯爵夫人、さうぞあちらへ行つて下さい。

伯爵夫人 あなたが何か言ふたびごに、私は益々此處に是非居たくなくなります。

マギ その手紙を讀まれるとあなたは氣を悪くするでせう。(氣を揉んで)あなた(チョンのこゝろ) 讀まないでね、裂いて下さい。

チョン さういはれると、大に讀みたくなるね。けれども一體何が書いてあるか見當がつかない。

伯爵夫人 併しあなたは少々おつかないのぢやない？ さあ、その匕首をこつちへよこしなさい。

い。

マギ(急いで) いけません。(併し伯爵夫人は既にそれを手に入れてゐる。)

伯爵夫人 讀んでもいゝ？(彼女は、二人がいゝ言つたものと思つたらしい、構はず手紙を開く。彼女は二人と共にそれを讀む。)
「あなた様へ申し上げます。伯爵夫人があなたと同時に、

シビルさんを別荘へお招きになつたのは、私がお頼みしたためです」

チョン 何だつて？

伯爵夫人 さやう、マギさんがあなたがたを二人一緒に招待してくれといつたんです。

チョン けれども、なぜ？

マギ 私は他の細君並みに振舞はないと約束しました。

チョン さうも了解しかねるね。

伯爵夫人 「なぜ、私がそんなことをするかとお尋ねなさいませう、そのわけはね、あなたがシ

ビルさんご毎日毎日鼻をつき合せて二三週間もゐらしたら、終にはシビルさんといふものが死ぬほご厭やになるだらうと思ふからです。尙また私は、シビルさんに、あなたのお仕事を助けたり、うまい考を吹込んだりする機會を與へ、それによつて、シビルさんの助力やイン

122

ビレイションが結局どんなものか、お二人に判るやうにします。もちろん、あなたの愛が考の通りの盛んな熱情であるなら、此數週間によつて、あなたはシビルさんを益々愛するやうにおなりでせう、さうすれば私は、さうならぬいふより外に道はありません。併し、若し私の推量通り、本當の愛がどんなものであるか、丁度今のところお判りにならないければ、それこそ今度お遇ひする時分には、ね、お母様、シビルさんがもうすつかり鼻についてゐるでせう。いさほしく思ひまいらす妻、マギより。まあ残念な、何だつて、この遺言狀をシビルに聞かせなかつたのだらう。それはさうして、若しお構ひなくば、私はこれからシビルのところへオー、ド、コロニーを持つて行つて、あの子を慰めてやらうと思ひます。

ヂヨン これぢや男の自信も少々失くなるね。

伯爵夫人 まあ、さうは云はないでね。

マギ(ヂヨンを辯護しながら) シヤンドの氣を損はないで下さい。(ヂヨンに向ひ)あなたが深い眞剣な戀をしなかつたにしても、それは、それだけの戀を吹きこむ女に遇はなかつただけのこゝです。

伯爵夫人(マギの肩に手を置いて) シヤンドさん、あなた遇はなかつたの？

ヂヨン あなたのいふ意味は判つてゐます。併しマギは、私が嘘なんか云つたつてそれで私をよく思ふわけぢやなし、マギに對する私の感情が昔も今も全く變らないこゝを、マギは知つてゐます。

マギ(ヂヨンが、まるで註文で印刷した一巻の説教集のやうに嚴かに、自分を眺めてゐるのを見て) 私を見て少し笑へる人でなければ、私を好きにはなれますまい。

ヂヨン それが一體どういふ役に立つのかい。

伯爵夫人(業を煮やしなから) シヤンドさん、あなたには、私、匙を投けます。

マギ 併し正直なのは感心。

伯爵夫人 あゝ、あなたにも匙を投けた。Arcades ambo (揃ひも揃つてお目出たい。)二人とも流石はスコッチー。

ヂヨン(伯爵夫人が行つて了ふ) だが、この手紙はお前の藝當らしくもない。マギ、本當にお前は隅へ置けないね。

(マギはにこつく、ぎんな細君だつて、かういはれて、にこつかないものはなからう。)

併し一體おれはさうしてあんな思違ひをしてゐたのだらう。強い男にも似合はない。(明に彼

はインスピレイションを得たらしい。

マギ どうしたのです。

デヨン(インスピレイションの化身) おい、實際わしは強いのかい。

マギ あなたが? それや強いにきまつてゐます。そして自力で今日の身分におなりになつた。極く少しでも、人があなたを助けたここにありますか。

デヨン(もう一度考へた結果) いや誰もない。

マギ シビルさんでも。

デヨン 私はそれが疑はしくなつて來たのだ。けれごもね、マギ、今度の演説が旨く行かない。こいふのは本當に妙だよ。

マギ つまりゴナブルズさんが、その値打を知るだけの明がないのでせう。

デヨン それに違ひない。(併し彼はかう考へて安心するには、あまり善良な男だ。) いや、マギ、さうぢやない。どうしたわけか知らんが、私は、ものを手際よくいふ力を失つたやうだ。

マギ(殆んどあまへるやうに) その力は今に戻つて來ますよ。

デヨン(力なげに) 本當に、みんなに、私は一生懸命になつたことだらう。

マギ(慎重に) もう一度やつて御覽なすつたらさう、そしたら一寸私がお側へ來て、坐つて編物を致しませう。時とするに編針の音が、あなたを丁度さういふ氣分にしたかも知れません。デヨン 怪しいね。こはいふもの、お前が側で坐つて編物をしてゐた時に、随分面白い文句をさしこし造出したものだ。多分あたりが静かだつたせいだらう。

マギ 屹度さうですわ。

デヨン(もう一つ靈感に打たれて) おいおい、マギ!

マギ(もう一度) どうなすつたの。

デヨン あ、いふ變つた考を私の頭へ吹込んだのは、お前だしたら、みんなものだらう。

マギ 私が?

デヨン つまり、お前がさうこは知らないでさ。

マギ 併しさういふ風にして?

デヨン 私達は、一寸こした事を種々二人で談したもんだ。で、いはゞ、お前が種をおこしたのかも知れない。

マギ ね、あなた、かうぢやないでせうか、つまり私が、折々女じみた、ざつこした考を有つ

てゐて、それをあなたが磨き上げて、立派なシャンド式にしたごいふのぢやなくつて？

ジョン(ゆつくりと其膝をはたいて) なるほささうだよ。併しお前がすつと私の加勢をして

ゐながら——私もお前もそれを知らなかつたなんてね。

(彼はもう少しで危く笑ふところだつた、それ故若しこの時伯爵夫人が顔を出さなかつたら、
そんなごことが起つたかも知らない。)

伯爵夫人 シャンドさん、エナブルズさんが、あなたに會ひたいと云つてゐますよ。

ジョン(出か、つた笑ひが紛失したか、盗まれたか、迷兒になつたか) フーム。

伯爵夫人 今、見えます。

ジョン(不機嫌に) あ、さうですか。

伯爵夫人(やさしく) あなたの演説のごこで。

ジョン あの人は、あの演説については、云ひただけのごこ、否寧ろそれ以上のごこを云ひ
ました。

伯爵夫人(少々慄へながら) 二度目の演説についてせう。

ジョン 二度目の演説とは？

(マギはその鞆のごころへ走りよつて、それを開く。)

マギ(慄然として) 伯爵夫人、あなたはあれをエナブルズさんへやりましたね。

伯爵夫人(圖々しく) 私に渡さすつもりぢやなかつたの？

ジョン 何だいそれは。さういふ二度目の演説だね？

マギ まあ、ひぎいわ、ひぎいわ。(突伏したい位の氣持で、ジョンに向ひ)あなたは、演説の
初めの草稿をうちへ残してお置きでしたね、私はそれを此處へ持つて來たのです——少しば
かり一寸したごこを私が附足して。

ジョン(七尺ゆたかになつて) 附足したごは何を？

マギ(せいぜい四尺八寸) ほんのつまらないごこを——あなたの御参考に申上げようとしてゐ
たごこを——私が編物をしながら——そして、若しそのうちのどれかが、お氣に入つたら、
それを磨き上げごこも出來たでせうし——そして何か良いものに變へるごこも出來たで
せう。ね、あなた——ごこがこの方が、それをエナブルズさんへ見せたのです。

ジョン(雷のやうな聲で) 私の書いたものだご云つてですか、伯爵夫人。

(併し伯爵夫人は雷を恐れるやうな女ではない。)

マギ それはあなたの手になつたものです——十分の九まで。

チヨン(死刑の宣告を下すやうに) マギ、シャンド、よくも大それたことをやつたな。よし、

よし、エナブルズ氏が、今、見えるからな、その位お前がわしの助をしたかが判るだらう。

エナブルズ やあ君、シャンド君、お目出たう。さあ握手しよう、手を貸し玉へ。

チヨン 演説は？

エナブルズ 君はあの演説を見違へるやうに改善したね。もちろん同じ演説だが、あの新しい筆致で、すつかり變つて了つた。(チヨン悄然と腰を却す。) 奥さん、あなたの御主人を御自慢なさい。

マギ してゐます。(チヨンに向ひ)してゐますよ、ね、あなた。

伯爵夫人 シャンドさんは、二度目の考の方が良いと、いつもあなたは云つてゐましたね、チャールズさん。

エナブルズ(そのことを注意されて喜びながら) さやう、さやう、私さう云つてましたね。

あの何ごもいへぬ一寸した筆つき! あの「押寄せる潮」のころは、實に良いね、君。

伯爵夫人 押寄せる潮つて何です。

エナブルズ 初の演説では、何でもこんな風だつた——「諸君、反對黨は、彼等及びかの酒々を寄せる潮のために、投票せんことを諸君に求めてゐる、併し私は、其酒々たる潮流が、諸君

を溺らすの危険を、嚴かに警告するものである」と。二度目の方は遙に良い。

伯爵夫人 シャンドさん、二度目のはごんなですか。

(チヨンは云はない。)

エナブルズ 二度目のは、こんな風になつてゐる。(チヨンは頭を擧げて傾聴せざるを得ない。)「諸君、反對黨は、彼等及びかの酒々を寄せる潮のために、投票せんことを諸君に求めてゐる、併し私は、諸君が笑つて吾々のために投票し、かの酒々たる潮流を堰止めんことを望むものである。」

(エナブルズ氏と舊友の伯爵夫人は、腹をか、へて笑ふ、併し各々異つた理由のために。)

伯爵夫人 シャンドさん、確に良くなりました。

マギ 私には、さうは思はれません。

エナブルズ いや、いや、非常にきびきびしてゐます。伯爵夫人、失禮ですが、これから行つて、すつかり読み直して見ませう。(彼はチヨンが妙に黙つてゐるのに初めて氣がつく。)こ

の演説を書くので君は大分参つたね。

(チヨンの頭は益々低くなる。)

まあ、まあ、いゝさ、吉報人を殺さずだ。

マギ(被告辯護人) 確に、演説に重要なことは、その力ミ學識ミ雄辯ミであつて、即ち初めの演説にも具つてゐた點です。

エナブルズ それやもちろん大體に於て眞理です。機智も、それ等の諸點がなければ不十分であることは、恰もそれ等の諸點が、機智なくしては不十分であるのと同じだ。兩者相俣つて初めて人を魅するこゝが出来る。(チヨンの頭が少し上る。) おいシャンド、君こそ吾々の求める人だ。忘れちやいけないよ、この演説は、今まで君のやつたうちで一番の傑作だ。リーヅの大會で、この演説がどんな働をするこゝだらう。

(彼は太陽氣でそのハンモツクへ歸つて行く。併しチヨンの頭は益々下つて行く。そして流石の伯爵夫人さへ、その場をはづすだけの床しさを示す。マギの兩腕は、夫のまはりにふらふらさはためくが、それにさはるだけの勇氣を缺く。)

「エナブルズさんの云つたこゝをお聞きでせう。兩者の結合ですよ。私がおあなたを愛するのあ

まり、一寸した事柄に、あなたの加勢が出来た、さういふこゝが判つたからさういつて、それがそんなにお厭なんですか。」

「一寸したこゝだつて！ マギ、お前が私を呼ぶのを聞くに妙に感ずるよ。まるで初めてお前の顔を見たやうだ。」

「あなた、今初めて私を見て御覽なさい。何が見えます。」

「夫に頭を下けさせた女が見える。」

「それだけですか。」

「自分の正體を見つけた男の悲劇が見える。あ、マギ、お前はもう一緒に暮せない。」

(彼は身慄する。)

「何故身慄なすつたの？」

「私は、寧ろさうしてこんなに永い間、お前が私と一緒に暮したか、不思議に思ふのが本當だのに、もう一緒に暮せないなんて云つてる自分に對して、身慄ひが出たのだ。それに、今日までつゝお前は私を赦してくれてゐたのだらうね。(マギは頷く。)そして今でも私を赦してくれる？ (もう一度頷く。) 夢ぢやないか知ら！」

13

「ね、あなた、私は出て行きませうか、それともこのまゝ側に居させて下さる？（彼女は今やチヨンの足もさじに、小さな塊となつてゐる。）他に立派な理由がないにしても、私があなたのお役にたつこいふだけで、私は喜んで側にゐませう。（チヨンの手はマギの方へさぐりよる、そして小さな塊は次第に側へるざりよる。）私のしたことは、全く世間並のこゝです。立身出世をした男は皆、それが自分獨りの功名だと思ひたがるものです。その人の細君は笑ひます、そしてそのまゝ、勘辨します。それが女の唯一つの笑ひ事。それは女なら誰だつて知つてゐます。（チヨンは唯茫然としてマギを見つめてゐる。）あなた本當に、私を見て笑ふこゝが出来れば、いゝんですが。」

「私には笑へないよ。」

（併し彼が、尙も續けてマギを見つめてゐるうちに、彼の顔が奇妙に崩れて来る。マギは、それが今か、然らずんば永久に不可能なこゝを感じる。）

「さあ、お笑ひなさい、お笑ひなさい。私をよつく見て。本當に何でもないこゝよ。」

（恐ろしい奮闘がチヨンの胸中に起つてゐる。彼はきしむ。笑ひらしいものが、無理にこみ上げて来る。初めは苦心慘澹。その中に少しも愉快のないこゝは、恰も永い間干あがつてゐた

泉から出る泥水のやう。併し間もなく彼は一聲高く尾を引いて笑ふ。泉の水は澄んで来る。マギは手を叩く。彼は救はれたのである。）

（終り）





J. M. Barrie



J. M. BARRIE

WHAT EVERY WOMAN
KNOWS

A COMEDY

WITH TRANSLATION AND NOTES

BY

TORAJIRO SAWAMURA

TOKYO
KENKYUSHA

1926

I

James Wylie is about to make a move on the dambrod, and in the little Scotch room there is an awful silence befitting the occasion. James with his hand poised—for if he touches a piece he has to play it, Alick will see to that—raises his red head suddenly to read Alick's face. His father, who is Alick, is pretending to be in a panic lest James should make this move. James grins heartlessly, and his fingers are about to close on the 'man' when some instinct of self-preservation makes him peep once more. This time Alick is caught: the unholy ecstasy on his face tells as plain as porridge that he has been luring James to destruction. James glares; and, too late, his opponent is a simple old father again. James mops his head, sprawls in the manner most conducive to thought in the Wylie family, and, protruding his underlip, settles down to a reconsideration of the board. Alick blows out his cheeks, and a drop of water settles on the point of his nose.

You will find them thus any Saturday night (after family worship, which sends the servant to bed); and sometimes the pauses are so long that in the end they forget whose move it is.

It is not the room you would be shown into if you were calling socially on Miss Wylie. The drawing-

room for you, and Miss Wylie in a coloured merino to receive you; very likely she would exclaim, 'This is a pleasant surprise!' though she has seen you coming up the avenue and has just had time to whip the dust-cloths off the chairs, and to warn Alick, David and James, that they had better not dare come in to see you before they have put on a dickey. Nor is this the room in which you would dine in solemn grandeur if invited to drop in and take pot-luck, which is how the Wylies invite, it being a family weakness to pretend that they sit down in the dining-room daily. It is the real living room of the house, where Alick, who will never get used to fashionable ways, can take off his collar and sit happily in his stocking soles, and James at times would do so also; but catch Maggie letting him.

There is one very fine chair, but, heavens, not for sitting on; just to give the room a social standing in an emergency. It sneers at the other chairs with an air of insolent superiority, like a haughty bride who has married into the house for money. Otherwise the furniture is homely; most of it has come from that smaller house where the Wylies began. There is the large and shiny chair which can be turned into a bed if you look the other way for a moment. James cannot sit on this chair without gradually sliding down it till he is lying luxuriously on the small of his back, his legs indicating, like the hands of a clock, that it is ten past twelve; a position in

which Maggie shudders to see him receiving company.

The other chairs are horse-hair, than which nothing is more comfortable if there be a good slit down the seat. The seats are heavily dented, because all the Wylie family sit down with a dump. The draught-board is on the edge of a large centre table, which also displays four books placed at equal distances from each other, one of them a Bible, and another the family album. If these were the only books they would not justify Maggie in calling this chamber the library, her dogged name for it; while David and James call it the west-room and Alick calls it 'the room,' which is to him the natural name for any apartment without a bed in it. There is a book-case of pitch pine, which contains six hundred books, with glass doors to prevent your getting at them.

No one does try to get at the books, for the Wylies are not a reading family. They like you to gasp when you see so much literature gathered together in one prison-house, but they gasp themselves at the thought that there are persons, chiefly clergymen, who, having finished one book, coolly begin another. Nevertheless it was not all vainglory that made David buy this library: it was rather a mighty respect for education, as something that he has missed. This same feeling makes him take in the Contemporary Review and stand up to it like a man. Alick, who also has a respect for education,